

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17集

県立ガンセンター関係 昭和56年度

埋蔵文化財発掘調査報告

おお
大

やま
山

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

近年、首都圏に属する埼玉県では各種開発事業が進行し、そこに所在する埋蔵文化財との調整件数は激増の一途をたどっております。そして、記録保存のため発掘調査を実施しなければならないものも増加しています。特に、県内の国鉄・私鉄沿線は開発事業が集中し、発掘調査が急増している地域であります。大山遺跡の所在する伊奈町周辺も、急速に都市化が進み、新幹線の開通とともにあって、従来の景観が大きく変貌しつつあります。

こうした人口増のなかで、医療機関の拡充は必須のものとなっております。県立ガンセンターは昭和50年11月に開院して以来7年目を向えましたが、さらに医療施設の拡充が必要となり、増築することになりました。しかしながら、予定地内は埋蔵文化財包蔵地であり、県立病院課と慎重に協議が重ねられた結果、やむを得ず発掘調査・記録保存の措置が講ぜられることとなりました。

その結果をまとめたものが本書であります。大山遺跡は、昭和47年から50年に4次にわたる発掘調査が実施され、考古学的にその重要性が認められ、一部は現状で保存されております。今回の調査でも、それらと関連の深い遺構が確認され、大山遺跡の全貌も解明されつつあります。これらの資料が、教育、学術、文化の一助となり、さらに文化財保護思想の普及啓蒙に、広く活用されることを念願しております。

発掘から報告書刊行に至るまで、種々便宜を図っていただいた埼玉県教育委員会、県立病院課、県立ガンセンター管理課、伊奈町教育委員会及び地元関係者の方々に対しまして、改めて厚くお礼申しあげます。

昭和57年9月

財團法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井 五郎

例　　言

1. 本書は、県立ガンセンター増設にかかる大山遺跡の発掘調査（昭和57年2月26日委保第5の101号）報告書である。遺跡は、北足立郡伊奈町大字小室字丸山818番地他に所在する。
2. 発掘調査は、埼玉県教育委員会が調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が埼玉県から受託し、実施した。なお、発掘調査の組織は2ページに示したとおりである。
3. 調査は、金子直行、樋口誠司が担当し、昭和57年2月1日から、同年3月25日に亘って実施した。
4. 遺跡原点I-3は、第N系直角座標X=-2.604.0、Y=-18.870.0で、海拔高度13.273mを測る。挿図内の方位記号は座標北（GN）を示す。磁北を使用している場合はMNを示した。
5. 出土遺物の整理および図の作成は金子があたり、樋口誠司、立石盛詞、島村薰、金沢文雄、紫崎正之、大野秀子、駒崎美佐子、福田哲子、山本芳子の協力があった。
6. 発掘調査における写真は主に樋口が、遺物写真は主に金子があたった。
7. 本書の執筆は主に金子、樋口があたり、分担の文末に氏名を記した。
8. 挿図の縮尺は、遺構図1/60、遺構微細図1/30、繩文土器実測図1/5、土師器、須恵器実測図1/4、土器拓影図・石器実測図1/3、土製品1/2と1/3を原則とした。
・印は土器、△印は石器、□印は土製品を示す。
なお、遺物分布断面図はポイントから両側へ50cmづつ、1m幅で示した。
9. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第五課職員があたり、横川好富が監修した。
10. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を得た。

（敬称略）

浅野晴樹、石岡憲雄、磯崎一、金子真土、木下亘、中村倉司
宮崎朝雄

目 次

序

例 言

I 調査に至るまでの経過	1
II 遺跡の立地と環境	5
III 調査の概要	10
1 遺跡の概要と調査の方法	10
2 調査の経過	13
IV 遺構と遺物	14
1 住居跡と土器	14
2 土壙と土器	60
3 グリッド出土土器	85
4 石 器	91
5 土 製 品	95
V 昭和54年度の発掘調査	98
1 遺跡の概要	99
2 遺構と出土遺物	100
VI 結 語	101
1 大山遺跡の集落分析について	101
2 土壙について	112
3 出土土器について	113

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 第1図 遺跡周辺地形図 | 第35図 第5号住居跡出土土器（2） |
| 第2図 遺跡分布図 | 第36図 第5号住居跡出土土器（3） |
| 第3図 遺跡グリッド配置図 | 第37図 第6号住居跡 |
| 第4図 基本土層図 | 第38図 第6号住居跡貯藏穴 |
| 第5図 遺跡全体図（折り込み） | 第39図 第6号住居跡遺物分布図 |
| 第6図 大山遺跡調査範囲図 | 第40図 第6号住居跡出土土器 |
| 第7図 第1号住居跡 | 第41図 第7号住居跡 |
| 第8図 第1号住居跡遺物分布図 | 第42図 第7号住居跡遺物分布図 |
| 第9図 第1号住居跡炉 | 第43図 第8号住居跡 |
| 第10図 第1号住居跡出土土器（1） | 第44図 第8号住居跡遺物分布図 |
| 第11図 第1号住居跡出土土器（2） | 第45図 第9号住居跡 |
| 第12図 第1号住居跡出土土器（3） | 第46図 第10号住居跡 |
| 第13図 第2号住居跡 | 第47図 第10号住居跡遺物分布図 |
| 第14図 第2号住居跡遺物分布図 | 第48図 第10号住居跡出土土器 |
| 第15図 第2号住居跡炉 | 第49図 第11号住居跡 |
| 第16図 第2号住居跡出土土器（1） | 第50図 第11号住居跡出土土器 |
| 第17図 第2号住居跡出土土器（2） | 第51図 第12号住居跡 |
| 第18図 第2号住居跡出土土器（3） | 第52図 第12号住居跡遺物分布図 |
| 第19図 第2号住居跡出土土器（4） | 第53図 第12号住居跡カマド |
| 第20図 第3号住居跡 | 第54図 第12号住居跡出土土器 |
| 第21図 第3号住居跡遺物分布図 | 第55図 第13号住居跡 |
| 第22図 第3号住居跡炉 | 第56図 第13号住居跡遺物分布図 |
| 第23図 第3号住居跡 ピット12 | 第57図 第13号住居跡出土土器 |
| 第24図 第3号住居跡出土土器（1） | 第58図 第1号土壙 |
| 第25図 第3号住居跡出土土器（2） | 第59図 第1号土壙出土土器 |
| （折り込み） | |
| 第26図 第3号住居跡出土土器（3） | 第60図 土壙（1） |
| 第27図 第3号住居跡出土土器（4） | 第61図 土壙（2） |
| 第28図 第3号住居跡出土土器（5） | 第62図 土壙（3） |
| 第29図 第4号住居跡 | 第63図 土壙（4） |
| 第30図 第4号住居跡遺物分布図 | 第64図 土壙（5） |
| 第31図 第4号住居跡出土土器 | 第65図 土壙（6） |
| 第32図 第5号住居跡 | 第66図 土壙（7） |
| 第33図 第5号住居跡遺物分布図 | 第67図 土壙（8） |
| 第34図 第5号住居跡出土土器（1） | 第68図 土壙出土土器（1） |
| | 第69図 土壙出土土器（2） |

- | | |
|------------------|-------------------|
| 第70図 グリッド出土土器（1） | 第75図 石器（2） |
| 第71図 グリッド出土土器（2） | 第76図 土製品（1） |
| 第72図 グリッド出土土器（3） | 第77図 土製品（2） |
| 第73図 グリッド出土土器（4） | 第78図 昭和54年度調査1号溝址 |
| 第74図 石器（1） | 第79図 昭和54年度調査出土土器 |

写真図版目次

- | | |
|----------------------|--|
| 図版1 (上) 調査区東側全景 | 図版16 第2号住居跡出土土器 |
| (下) 調査区西側全景 | 図版17 第3号住居跡出土土器 |
| 図版2 (上) 第1号住居跡 | 図版18 第3号住居跡出土土器 |
| (下) 第1号住居跡遺物出土状況 | 図版19 第3号住居跡出土土器 |
| 図版3 (上) 第2号住居跡 | 図版20 第5・6号住居跡出土土器 |
| (下) 第2号住居跡炉 | 図版21 第10・11・12号住居跡出土土器 |
| 図版4 (上) 第3号住居跡 | 図版22 第12号住居跡出土土器 |
| (下) 第3号住居跡炉 | 図版23 第1号土壤出土土器 |
| 図版5 (上) 第3号住居跡炉セクション | 図版24 第1号住居跡出土土器 |
| (下) 第3号住居跡 P12遺物出土状況 | 図版25 (上) 第1号住居跡出土土器
(下) 第2号住居跡出土土器 |
| 図版6 (上) 第5号住居跡 | 図版26 第2号住居跡出土土器 |
| (下) 第13号住居跡 | 図版27 第3号住居跡出土土器 |
| 図版7 (上) 第6号住居跡 | 図版28 第3号住居跡出土土器 |
| (下) 第6号住居跡遺物出土状況 | 図版29 第5号住居跡出土土器 |
| 図版8 (上) 第7号住居跡 | 図版30 (上) 第4・13号住居跡出土土器
(下) 土壤出土土器(1) |
| (下) 第1号土壤遺物出土状況 | 図版31 土壤出土土器(2)(3) |
| 図版9 (上) 第8号住居跡 | 図版32 グリッド出土土器(1)(2) |
| (下) 第10号住居跡 | 図版33 グリッド出土土器(3)(4) |
| 図版10 (上) 第12号住居跡 | 図版34 グリッド出土土器(5)(6) |
| (下) 第12号住居跡カマド | 図版35 (上) 昭和54年度調査出土土器
(下) グリッド出土土器(7) |
| 図版11 調査区西側土壤群 | 図版36 石器(1)(2) |
| 図版12 (上) 拡張区土壤群(1) | 図版37 土製品(1)(2) |
| (下) 拡張区土壤群(2) | |
| 図版13 第1号住居跡出土土器 | |
| 図版14 第2号住居跡出土土器 | |
| 図版15 第2号住居跡出土土器 | |

I 調査に至るまでの経過

埼玉県衛生部が、県政施行百周年記念事業として県立がん医療機関を設立する方針を決定したのは昭和45年であり、この構想に基づき、北足立郡伊奈町大字小室地内の山林中に埼玉県立がんセンター建設地を決定したのは、昭和45年12月である。県衛生部は、この決定にもとづき医療機関設立準備室を設置し、用地買収と建設工事の設計に入った。

埼玉県教育局での建設計画について連絡を受けたのは昭和47年3月の末であった。教育局では当時、文化財を主管するのは文化財保護室であったので、衛生部との連絡・折衝の窓口は文化財保護室が当たることとなった。

連絡を受けた文化財保護室では、建設予定地内の文化財の所在について直ちに指定文化財台帳や遺跡地名表と照合した結果、文化財の該当はなかった。しかし、面積が $163.371m^2$ と広大なうえ、立地場所が洪積台地の縁辺部が含まれており、埋蔵文化財が包蔵されている可能性もあったため、現地調査を実施してから回答することを決めた。

昭和47年4月11日、文化財保護室では、吉川国男主任と谷井魁主事を現地に派遣した。派遣された両名は、衛生部から渡された2500分の1の地図をたよりに、アカマツ、サカキ、コナラ林に分け入って踏査を実施した。この踏査中、山林中の小径において一塊の鉄滓を発見した。近接する畑で草取りをしていた農家の方に聞くと、この付近は通称「金くそ山」だということであり、精査すると鉄滓は、台地の斜面の400メートルにわたって散布しており、更に用地の南端の道路の切通しに、熔鉢炉が露出していることを確認し、ここに製鉄遺跡が存在することが推定された。更にまた、用地の北東部等に縄文時代中期の土器片が若干散布していることを認め、ここには縄文時代の集落跡も存在することを予察した。

この現地調査をもとに、文化財保護室では当該建設予定地内の埋蔵文化財の保存策について検討し、同月18日、埼玉県衛生部医療機関準備室あて次のような回答をおこなった（教文第84号）。

「照会のあった用地内には、別紙のような埋蔵文化財が所在しております。については、建設計画にあたっては、当室にじゅうぶんご協議ください。なお、製鉄址については部分的に学術調査を実施し、現地保存をすることを検討する必要がある。」

この回答書を受けて、昭和47年5月24日、医療機関設立準備室から文化財保護室に対して、建設計画の概要の説明があり、発掘調査を実施してほしい旨依頼があった。しかし、文化財保護室では台地斜面に埋存する製鉄遺跡をできるだけ現状保存するよう建設計画の変更を求めて協議した。そして、昭和47年6月5日には医療機関準備室、がんセンター建設事務所、文化財保護室の三者が集まり埋蔵文化財の取扱いについて協議し、建設計画の部分的変更を含む文化財の保存措置について概略的な合意に達した。その内容は、①製鉄遺跡埋存箇所には構築物をできるだけ避け現状保存を行うこと。②やむを得ず建物を建設する箇所について、記録保存のための発掘調査を実施すること③用地東端部に埋存する縄文時代の集落跡については、当面建設工事は行わないこと、の3点であった。

それを受けて文化財保護課では、同月6日がんセンター建設事務所とともに現状調査を行い、現状保存区域と記録保存区域を現地において区分し、記録保存区域にあって発掘調査所要経費の積算を行った。

昭和47年10月19日、医療機関設立準備室・がんセンター建設事務所・文化財保護課の三者は、発掘調査の実施について協議した。文化財保護課では他機関の協力を得て調査体制を組みたいことなどを申し合わせた。

翌11月8日と14日には発掘調査の実施組織と実施方法について、がんセンター建設事務所・文化財保護課・埼玉県立博物館の三機関と発掘担当者に予定されている安岡路洋・早川智明の両氏とが協議した。

大山遺跡発掘調査一覧

発掘調査	実施期間	発掘主体者	発掘担当者及び調査員	発掘面積	備考
第1次調査	昭和47年11月24日～48年3月31日	埼玉県	安岡路洋、早川智明	10,000m ²	
第2次調査	昭和48年4月25日～8月31日	埼玉県	横川好富、小久保徹 早川智明、小川良祐 安岡路洋、大和修	41,500m ²	
第3次調査	昭和49年4月11日～6月15日	埼玉県教育委員会	小川良祐、増田逸朗 谷井 誠、大和修	16,000m ²	
第4次調査	昭和50年5月13日～8月16日	埼玉県教育委員会	大塚和義、水村孝行 今泉泰之、鈴木敏昭	9,143m ²	
第5次調査	昭和54年6月4日～6月15日	埼玉県教育委員会 財団法人 埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	高橋一夫、星間孝志	800m ²	
第6次調査	昭和56年2月1日～3月25日		金子直行、鍬口誠司	1,902m ²	

発掘調査は、昭和47年11月24日から48年8月31日まで、埼玉県（衛生部）が埼玉県立博物館の協力を得て実施された。この調査は、がんセンター本館に伴うものであり、主として台地斜面を対象としたが、その後、台地上にも集落跡がひろがっていることが判明した。また、調査の進展にともない大規模な遺跡で、数少ない製鉄遺跡であることが判明してきたため、調査の万全を期すること及び工事施行の両調整を、県土木部長あてに要望した（教文第916号）。この発掘調査は、昭和48年3月31日まで続いた。これを第一次調査と称するが、この調査の結果、遺跡は台地斜面ばかりでなく、平坦地にも遺跡（縄文時代中期・古墳時代前期の集落跡及び平安時代の製鉄址）がひろがっていることが明らかとなり、この部分にも建物（県立がんセンター、附属高等看護学院及び生徒宿舎、医師住宅、看護婦宿舎、つけ替え道路）の建設計画があったので、県衛生部はこの発掘調査の実施法を県教育長に依頼した（昭和48年4月付け医療第65）。

この依頼により、県教育委員会では教育長中谷幸次郎を本部長とする発掘調査団を組織して、4月から昭和48年8月31日まで、この区域の発掘調査に当たった（これを第2次調査という）。

昭和49年度の発掘については、県衛生部長から昭和49年4月10日付けがん準第10号で依頼があつた。それによると県立高等看護学校とがんセンター排水処理施設の敷地あわせて16,000m²の発掘であった。県教育委員会では、この発掘調査を同年4月11日から6月15日にかけて実施する旨回答（昭和49年4月11日付け教文第109号）し、文化財保護課を主管課として直営により実施した。

昭和50年度になると更に、がんセンター外構工事敷地及び血液センター建設敷地の発掘について県衛生部長から県教育長あてに依頼があり（昭和50年4月25日付けがん準第35号）、県教育委員会はこれに対して同年5月15日から8月16日にかけて実旨する旨回答（昭和50年5月12日付け教文第199号）した。この発掘調査は、県教育委員会が県立博物館と地元伊奈町教育委員会の協力を得て直営で実施した。

かくして、昭和50年11月1日付けをもって、埼玉県立がんセンターは開院したが、過去4年間の発掘調査で得られたデーターと出土品に対する整理作業が調査報告書の刊行のため、昭和51年から昭和53年度にかけて実施され、埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集「埼玉県立がんセンター地区埋蔵文化財発掘調査報告 大山」として刊行された。

しかし、病院開院後、周辺施設の設備充実を計るために、いくつかの工事計画がたてられた。この工事のうち、昭和54年にG区（県立高等看護学院）とH区（高等看護学院関係宿舎）との中間地区に県立高等看護学院の体育館の建設が計画された。当該地は以前の発掘調査で遺構の密度が薄いことがわかつていているため、事前に発掘調査を実施することとなった。発掘調査の実施方法等について関係機関と協議を進めたが、県教育委員会が直営で実施することとなり、昭和54年6月4日に開始し、6月15日に終了した。

昭和55年になると、入院患者の増加に答えるため、ベット数の増床が計画され、本館の増築が計画された。増築部分は本館の南側にあたり、山林として残されていた部分が幅10m、長さ120mにわたってかかる計画がたてられていた。県教育委員会はがんセンターの主管課である県立病院課と協議を重ねてきたが、昭和56年度に当財団法人埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を委託して実施することとなった。なお、調査にあたっては、既発掘調査地域と今回の調査区域との関係を知るため庭として整備された部分も含め、増築部分外周の全域を対象とすることになった。

これを受けた当事業団では、他の事業との関連を調整して、昭和56年1月から3月の3カ月をえて、昭和57年度には出土品等の整理・報告書の刊行を行うことになった。

（吉川 国男、谷井 麟）

発掘調査の組織

1 昭和54年度発掘

主 体 者	埼玉県教育委員会	教 育 長	利之信	藏夫
事 務 局	埼玉県教育局文化財保護課	課長補佐	郎史明	夫一
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	正奏	文幹
庶務経理	埼玉県教育文化財保護課	庶務係長（兼）	史岳尚	史尚
発 捜	埼玉県教育局文化財護課	文化財第三係長	信和修	和修
			好一孝	好一孝
			高星	高星

2 昭和56年度発掘

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	郎也夫	光一
		副理事長	五和澄	浩人
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	常務理事	悦栄	富彪
		管理部長	伊闇福	行司
発 捜	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	井尻辺	朗好
		調査研究第三課長	長沼渡	直誠
			伊闇福	本横谷
			庄川井子口	金穂

3 昭和57年度整理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	郎也夫	二一
		副理事長	五和澄	美子
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	常務理事	長栄和啓	浩人
		管理部長	伊闇江	富祐祐志
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	井尻辺野	志行
		調査研究副部長	長沼渡佐	二一
		調査研究第五課長（兼）	伊闇江	美子
			福本	浩人
			横小川	良孝
			川間	直
			川	星金

4 協力者

北足立郡伊奈町教育委員会及び地元関係者

II 遺跡の立地と環境

大山遺跡は、埼玉県北足立郡伊奈町大字小室字丸山 818 番地に所在し、国鉄高崎線上尾駅と国鉄東北線蓮田駅を直線で結んだほぼ中間の地点に当る。上尾駅からは東北東方向へ、蓮田駅からは西方向へ約 3 km の地点に位置する。

遺跡は所謂大宮台地上に立地する。大宮台地は鴻巣市付近に端を発し、浦和市や鳩ヶ谷市まで連なる南北に細長い洪積台地であるが、荒川によって西部の武藏野台地と、中川によって東部の下総台地と分断されている。標高約 10~20 m のほぼ平坦な台地面を呈するが、南の端部に於いては複雑な樹枝状谷が形成されている。

大宮台地の中央部は鴨川、見沼、芝川、綾瀬川、元荒川が東南方向に流路をとり、これ等の河川に浸食され、大宮主台以下、西から指扇、大和田、片柳、鳩ヶ谷、岩槻、慈恩寺の各支台に分かたれる。河川が東南方向に流路をとるため、これ等の各支台は東南方向に傾き、基部が狭く、端部で広がる瓜実状の地形を呈する。各河川の左岸は比較的単調な崖線を成すが、右岸と各支台の先端部は樹枝状の小谷が発達し、特に先端は複雑な地形を呈している。

大山遺跡は小室支台の先端部に位置するわけであるが、小室支台は大和田片柳支台に属し、その基部から分岐する独立した小支台である。小室支台は東側を流れる綾瀬川と、西側を流れて綾瀬川と合流する落し掘に挟まれた、東南方向に伸びる茄子状の地形を呈する。また、台地先端部には北に延びる支谷が発達し、先端部を大きく二分している。大山遺跡は二分された西側の台地の西端に位置し、標高は約 14 m 前後を測り、水田面からの比高差は約 4~5 m を測る。

さて、大山遺跡周辺の地形的な環境の概略は以上のようにあるが、次に、伊奈町周辺の歴史的環境について眺めてみたい。

遺跡の高台に立ち東南方向を眺望すると、水田の中に高架線が延々と続いている。新幹線は大宮駅を発してから北上し、上尾市原市地区を通って伊奈町の丸山地区に至る。この丸山地区で東北、上越両新幹線が分岐する。東北新幹線はそのまま進路を北北東にとり、蓮田市の吹上地区へとぬけていく。また、上越新幹線は丸山地区で分岐した後、進路を北西にとり、ほぼ伊奈町の中央部を縦断し、大針、羽貫、小針内宿地区を通って桶川市方面へとぬけていく。路線は人家を避け、低位水田や台地上の畠、台地縁辺部の林等が選ばれているため、必然的にこれに関わる埋蔵文化財の調査が増加している。

これ等の調査は後日詳細に報告されるはずであるが、概略が当事業団の「年報 1・2」に報告されている。ここでは、伊奈町に於ける遺跡の在り方や大山遺跡との関連から、新幹線関係の代表的な遺跡を紹介しておきたい。

大山遺跡の東南方向約 500 m の谷を挟んだ対岸の台地に、県指定「伊奈氏屋敷跡」が存在する。新幹線にかかるため屋敷の一部と、台地下の低湿地が調査された。大山遺跡から連なる台地の縁辺部からは先土器時代の遺物が、また、低湿地からは縄文時代後・晩期の土器片と独木舟、漆塗り筒弓、白木弓、漆塗り椀、漆塗り櫛、櫛状木製品等低湿地遺跡ならではの貴重な木製品が検出されて



第1図 遺跡周辺地形図

いる。台地上からは、江戸時代の畝堀りが発見され、裏門跡の調査では断面箱築研堀りの溝が確認されている。

丸山地区から分岐する東北新幹線に沿って大宮側から北上すると、赤羽遺跡、久保山遺跡が存在する。赤羽遺跡では、縄文時代中期加曾利EⅠ～Ⅲ式期の住居跡3軒、平安時代の住居跡1軒、方形周溝墓1基、縄文時代の土壙1期、炭焼窯1基、井戸跡1基が検出された。そして、久保山遺跡では、先土器時代のユニック2箇所、縄文時代早期の炉穴10基、中期の住居跡6軒、土壙35基等が検出されている。

また、上越新幹線に沿って大宮側から、西浦遺跡、上新田遺跡、北遺跡、原遺跡、八幡谷遺跡、相野谷遺跡、丸山遺跡、向原遺跡が存在する。これ等の中で北遺跡、原遺跡、向原遺跡は集落遺跡である。

北遺跡は、小室支台基部付近に形成される北西に開けた一舌状台地上に立地する。この付近は樹枝状谷が発達し、北遺跡西側にも南に延びる支谷があり組み、遺跡の西限が画されている。北遺跡からは、縄文時代中期勝坂式から加曾EⅢ式までの土器を伴う住居跡が75軒、同期の土壙が約250基、近世の墓塚が約30基検出されている。他に、台地の先端部では先土器時代の石器集中箇所が3箇所と砾群が1箇所発見された。検出された住居跡の大半は、加曾利EⅠ式からEⅢ式期にかけての所産である。調査区内に於ける住居跡の分布から、北遺跡は舌状台地上に形成された環状もしくは馬蹄形を呈する集落で、大宮台地にあっても縄文時代中期に於ける最大級の集落の1つであることが判明した。

また、原遺跡は北遺跡と谷を挟んで対岸に位置しており、縄文時代中期の住居跡が12軒、土壙7基、方形周溝墓2基、炭焼窯、溝等が検出されている。

北遺跡と原遺跡は谷を挟んで両岸に位置しており、集落形成時期もほぼ同時期であるため、当時に於ける地域的な集落テリトリーの在り方の完明にも重要な位置を占める遺跡となるであろう。今後、詳細な分析及び検討が期待される。

そして、上越新幹線の一番桶川市により、向原遺跡が存在する。遺跡からは、弥生時代後期吉ヶ谷期の住居跡2軒、弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡19軒、方形周溝墓2基、土壙40基、炉穴、溝、炭焼窯等が検出されている。

以上、新幹線関係の遺跡をみてきたが、次に、伊奈町は於ける遺跡の分布をみてみよう。

伊奈町の行政単位は、前述した兩河川によってほぼ区画されており、小室支台をそのままとり囲むものである。遺跡は、この台地の縁辺部に形成されており、殆んどが等高線10mのライン以上に所狭しと存在している。また、台地先端部から北上する支谷の両岸にも谷を挟んで台地縁辺部に遺跡が一巡する。台地の殆どが縁辺部に遺跡が存在すると言っても過言ではないであろう。この様な状況にあるので、過去調査された遺跡は少からず存在する。

特に遺跡の集中する地域は、北遺跡を中心とする大針地区と小支谷をとり囲む小室地区である。小室地区では、志久遺跡（笠森他1976）と小室天神前遺跡（田中他1981）が調査されている。

志久遺跡からは、縄文時代中期加曾利EⅠ～Ⅲ式期の住居跡10軒、後期初頭称名寺式期の住居跡2軒、土壙10基が検出されている。遺跡は小支谷の西側ほぼ中央部に位置しており、すぐ南には赤



第2図 遺跡分布図

遺跡地名表

- | | | | | | |
|-----------|-----------|---------|----------|----------|-----------|
| 1 向原遺跡 | 2 相野谷遺跡 | 3 原遺跡 | 4 北遺跡 | 5 小貝戸貝塚 | 6 水川神社裏遺跡 |
| 7 久保山遺跡 | 8 小室天神前遺跡 | 9 志久遺跡 | 10 赤羽遺跡 | 11 大山遺跡 | 12 伊奈氏屋敷跡 |
| 13 井沼遺跡 | 14 上門戸貝塚 | 15 綾瀬貝塚 | 16 関山貝塚 | 17 沢堂貝塚 | 18 御林遺跡 |
| 19 炭釜屋敷貝塚 | 20 宿上貝塚 | 21 菅谷北城 | 22 諏訪坂貝塚 | 23 尾山台遺跡 | |

羽遺跡が存在する。志久遺跡の報告書では出土遺物が詳細に検討され、加曾利EⅡ～Ⅲ式土器の細分に当たって先駆的な業績が残されている。

志久遺跡から西へ約1.2kmの地点に小室天神前遺跡が存在する。遺跡は落し掘によって形成される小室支台西側の奥まった縁辺部に位置している。縄文時代中期加曾利EⅡ式期の住居跡2軒、亦生時代終末の住居跡が4軒、土壙53基、溝、炭焼窯、近世墓等が検出されている。

小室天神前遺跡から台地に沿って約1.3km南下した地点に、大山遺跡が存在する。大山遺跡は先土器時代から縄文時代各時期、古墳時代前後期、平安時代等の遺構、遺物が検出されており、複合大集落であることが知られている。特に平安時代の製鉄遺構は、遺跡周辺地域との関わり合いで注目をあびている。

また、小室支台東側の縁辺部で大針と小室地区のほぼ中間地点に、県指定縄文時代前期貝塚である小貝戸貝塚が存在する。小貝戸貝塚は、綾瀬川右岸で前期貝塚としては最北部とされているが、北遺跡発掘の際、北遺跡がのる舌上台地東縁に前期の貝塚が露呈しているのを確認した。貝塚は半分以上の面積が削平されて消滅しており、周辺に開山期から黒浜期の土器片及び貝類が散布していた。この貝塚は小貝戸貝塚より北に位置している。また、綾瀬川対岸の蓮田台地では前期のタイプサイトとなっている関山貝塚、黒浜貝塚が存在し、綾瀬川、元荒川流域を中心とするこの付近は、縄文時代前期貝塚の集中地であることが理解される。

小貝戸貝塚より南約0.7kmの地点に縄文時代晩期の水川神社裏遺跡（細田1980）が存在する。安行I～III式の土器が散布しているが、伊奈町教育委員会によって調査が進められている。

伊奈町で遺跡としてマーキングされている箇所は68箇所にものぼる。その殆んどが、縄文式土器の散布地であり、中期を中心とし、早、前、後、晩期の遺跡が揃っている。

先土器時代の遺跡は、今までの調査で理解される様に台地の縁辺部に位置しており、今後の調査で遺跡数が増えることは間違いない。そして、弥生時代も比較的多くの散布地が存在し、今まで調査された遺跡などからしだいに様相が明らかにされていくであろう。

しかし、古墳時代以降は、遺物の散布地は多く見受けられるものの、調査された遺跡は少く、大山遺跡と比較検討するに足る遺跡は存在していない。今後、遺跡周辺地区のみならず、大宮台地といった広い視野の中で、大山遺跡の性格、重要性等の位置付けを行って行くべきであろう。

また、中世以降、大針の細田城、内宿の春日山陣屋跡、関東郡代伊奈氏屋敷跡等各時期の居館がみられ、歴史の舞台としても著名である。

この様に、伊奈町は先土器時代から中世までの遺跡が存在し、その内容も豊富である。今後、この地域は、新幹線で象徴される様に開発の対象地域になると思われるが、そのためには破壊される遺跡数は増加するであろう。しかし、新幹線が遠隔地との交通網に止まらず、原始、古代から現代を経ぐレールにもなっている事をも忘れてはならないであろう。新幹線に端を発し、正しい形で文化財へのレールが引かれる事を願って止まない。

(金子 直行)

参考文献

- ・埼玉県教育委員会 1975 「埼玉県遺跡地名表」
- ・笹森健一他 1976 「志久遺跡」
- ・谷井彪他 1979 「大山」
- ・田中信他 1981 「小室天神前遺跡」
- ・細田勝 1980 「埼玉県北足立郡伊奈町水川神社採集の縄文土器資料」 金鈴22号
- ・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981・1982 「年報1・2」

III 調査の概要

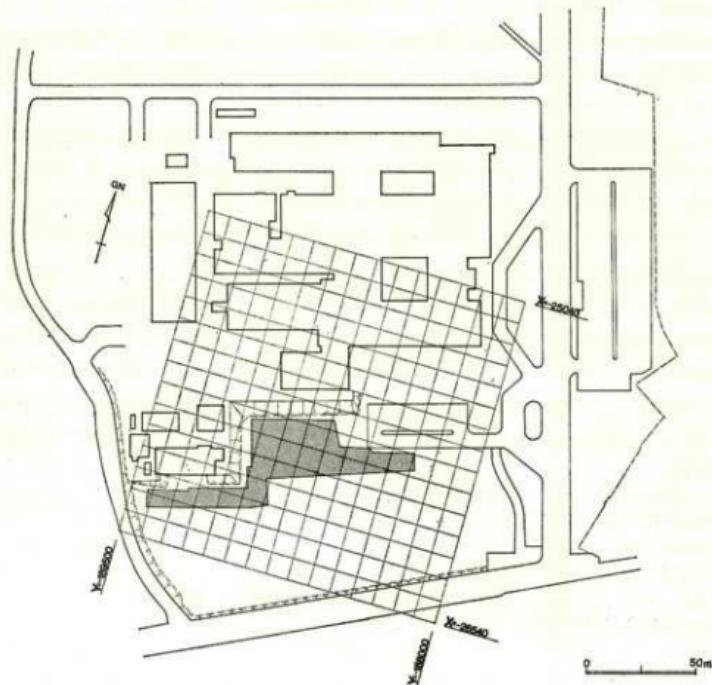
1 遺跡の概要と調査の方法

大山遺跡は、過去5回にわたって調査が行われている。第1次から第4次の調査については、「埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集」で報告されているが、昭和54年度の第5次調査については未報告である。本書において、昭和56年度の調査とともに第5次調査についても報告する。

今回の調査は、県立ガンセンター正門西側の林の部分が対象となった。調査区は、現在生活排水汚水処理場によってカッティングされている林の南側から、管理棟の西側、本館南側の庭及び林、職員駐車場南側の林にかけて、東西に細長いクランク状を呈している。調査面積は、約1902m²を計る。

調査はグリッド方式を採用した。グリッドラインを第Ⅳ系直角座標に合わせ、原点杭1—3は、X=−2.604.0, Y=−18.870.0を測る。(第3図)

1辺が10mのグリッドを大グリッドとして設定し、大グリッドの内部に、1辺が2mの小グリッド



第3図 遺跡グリッド配置図

Dを設定した。調査は、小グリッドを基本にして進めたが、本書における記載は大グリッドを基本にしている。今回の調査において、遺構確認の段階では小グリッドを基本にして遺物の取り上げを行ったが、住居跡内遺物は全点ドットで記録した。また、土壤内出土遺物は、必要性の認められるものに対してはドットで記録したが、他は明らかに流れ込みの遺物が多く、その性格上遺構単位で取り上げた。

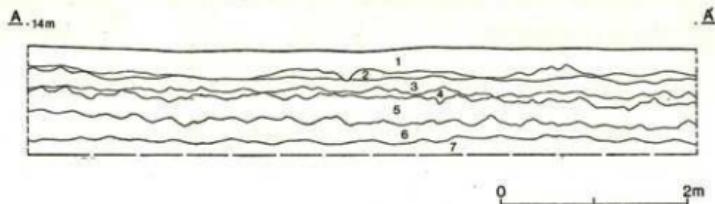
グリッド名称は、東西がアルファベットで、南北が数字である。調査区最西端の台地肩部をAとして、東方へA～Mまでを与えた、調査区最北端を0として、南方へ0～6までを与えた。従って、大グリッドは、北西のコーナーが基準になっている。また、小グリッドは、大グリッドを25分割するわけであるが、やはり、大グリッド北西コーナーを基準にして、北から南へ番号を与えた。

今回の調査区全体図は第5図に示した。A-5、6区は、台地の傾斜面に当り、一番低い部分の遺構確認面で標高約11.5mを測る。C-5、6区ライン付近が台地の肩部に当り、遺構確認面の標高は約13.5m前後を測る。調査区内における比高差は約2mを測る。C～M区までは、多少の高低はあるものの、殆んど平坦な面を保っている。

調査区の基本土層は第4図に示した。表土から黒色帶の下まで、8層が観察された。1層は腐植土層であり、粘性、しまりに欠けるバサバサの土である。2層は暗褐色土の遺跡包含層で、台地上の平坦部では薄く残存しているが、台地の端部では殆ど存在していない。調査区内はもと林であったため、木の根等による擾乱が進み、遺物包含層が部分的にしか存在しない箇所もある。3層はソフトロームであり、4層がハードロームである。ハードロームはソフト化が進行し、厚い部分でも20cm位で、塊状になり部分的にしか存在しない箇所もある。2層と3層の境目も不明瞭であった。ハードロームの下は厚さ約50cm前後にわたって黒色帶が存在する。黒色帶の上部は白色粒子が顕著に認められ、下部にはあまり認められなかった。この白色粒子の含有の差を似て黒色帶を分層し上部を6層、下部を7層にした。8層は粘性、しまりの強い黄褐色土である。

台地上の平坦部では1～8層が比較的プライマリーな堆積状態を呈しているが、台地先端の斜面部では、2～8層が斜面に沿って徐々に削平されており、その上面に1層が厚く堆積している。

この様な土層堆積状態からでは、大山遺跡における洪積台地縁辺部が、自然營力によって形成されたものか、人的營力によって形成されたものかは即断しかねる。しかし、斜面部に住居跡が確認されたり、以前の調査で製鉄遺構が確認されていることを考え合わせれば、人的營力によって微細に地形が変形されていることは疑いないであろう。当時の人々にとって台地の縁辺部が、ただ自然



第4図 基本土層図

環境的な地形条件に止まらず、生活様式にとって何等かの意味合いを持っていたであろうことは想像に難くない。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡が6軒、古墳時代の住居跡が2軒、平安時代の住居跡が5軒であり、各時代の土塙が105基であった。

縄文時代中期の住居跡は、F～J—2～3の調査区内にまたがって、ほぼ弧状に分布している。位置的には、台地縁辺部からやや奥まった台地上面の平坦部に存在する。各住居跡とも、ローム面への掘り込みが浅く、柱穴も不揃いで浅い傾向にあり、床面もあまり踏み固められておらず脆弱な状態を呈していた。遺物は、住居跡の覆土中より土器片が多数出土しているが、第3号住居跡からはほぼ完形品から復元可能な大形破片まで多数が検出された。また、第2号住居跡からは、シジミの貝層ブロックが検出されている。

古墳時代の住居跡は、第6、8号住居跡の2軒である。第6号住居跡は台地の斜面部に構築されており、出土遺物から古墳時代後期の所産であると思われる。第8号住居跡は台地平坦部の端に位置し、出土遺物はあまりないが、ハケ目のある台付甕の脚部が出土していることから、古墳時代前期所産の可能性が高い。

平安時代の住居跡は、第7、9、10、11、12号住居跡の5軒である。第7、9号住居跡は攪乱が著しく、ローム面への掘り込みも浅く、出土遺物も少い。第10号住居跡も攪乱を受けているが、須恵器の坏、土師器の甕が出土している。第11号住居跡はカマドの周辺部以外、殆んどプランが埋めなかつたが、遺物がほぼ同一レベルで集中して出土している。第12号住居跡は、規模が一番大きく遺物も多数出土しており、その中には羽口、鉢型、鉄滓等の製鉄に関連ある遺物も含まれている。

大山遺跡は、昭和47年11月24日～昭和48年3月31日に第1次調査が、昭和48年4月25日～同8月31日に第2次調査が、昭和49年4月11日～同6月15日に第3次調査が、昭和50年5月13日～同8月16日に第4次調査が、昭和54年6月4日～同6月15日に第5次調査が行なわれている。

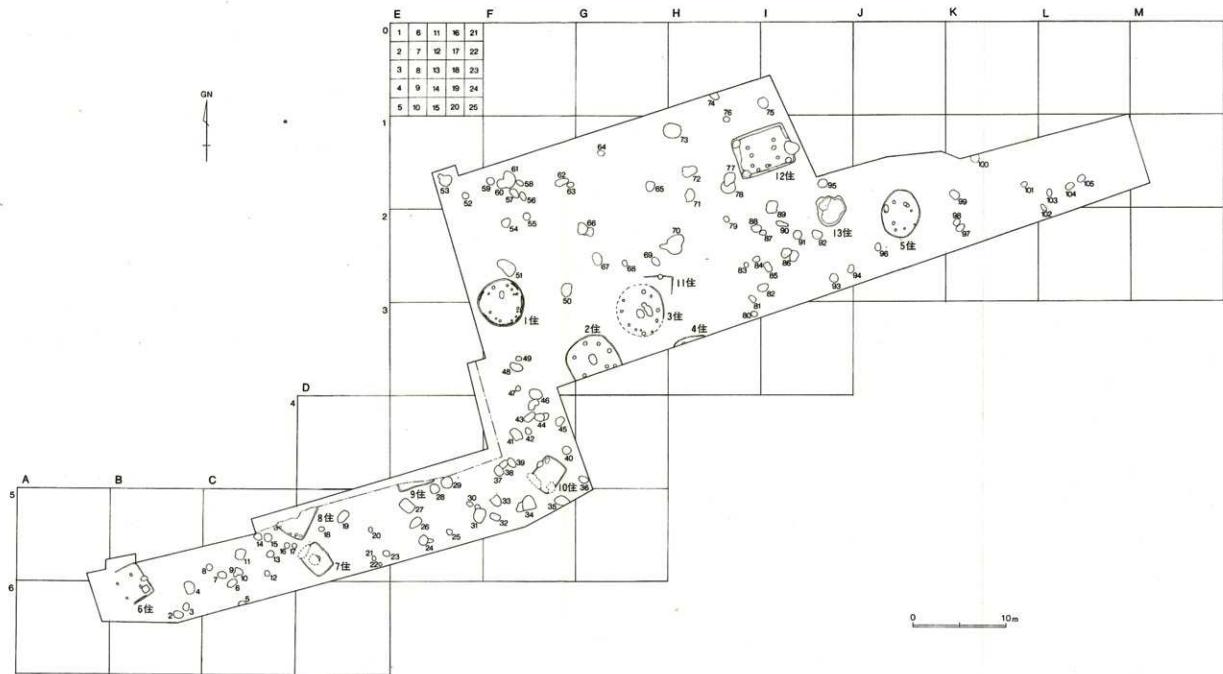
第1次、第2次調査はA、B区が対象となり、A区では縄文中期の住居跡が10軒、古墳時代前期の住居跡が23軒、古墳時代後期の住居跡が6軒、平安時代の住居跡が38軒検出されている。

第3次調査ではB、G、H区が対象となり、古墳時代前期の住居跡が4軒、平安時代の住居跡が5軒、満1本が検出されている。

第4次調査ではC、E、F、I区が対象となり、古墳時代後期の住居跡が2軒、平安時代の住居跡が2軒、炭焼窯が2基検出されている。

他に、先土器時代の遺物、縄文時代各時期の土器、石器が出土しており、先土器時代以降居住の要所であったことが偲ばれる。

(金子 直行)



第5図 遺跡全体図



第6図 大山遺跡調査範囲図

2 調査の経過

今回の調査は、昭和57年2月1日から同年3月25日までの約2ヶ月間にわたって行われた。午前中は、調査区に殆んど日が当らず、霜等の影響で思った様に調査が進行しなかった。

1月の末日までに器材等の搬入を終え、すべての調査準備を完了した。2月1日から、調査区内の立木の抜根が始まり、大山遺跡昭和56年度の調査が開始された。

調査区西側の台地肩部から、抜根と表土除去を同時に進行させ、終了するまでに約一週間を要した。その間、遺構確認も進め、台地先端部の第6号住居跡を始めとし、調査区東側に進むにつれて第7、8、9、10号住居跡が確認された。第3、11号住居跡周辺は、遺物が集中して出土しており遺構確認の際、すでに床面が霜呈していた。この周辺は、表土を浅く除去し、遺構確認を丁寧に行なった。遺構の調査は、表土除去と同様、調査区西側の台地肩部より始めた。

住居跡の調査終了後、調査区全体の航空撮影を行う。3月10日より、先土器時代の遺物確認調査を始めると同時に、F～I-1～2区にわたって調査区を拡張し、第12号住居跡と土壙多数を検出した。

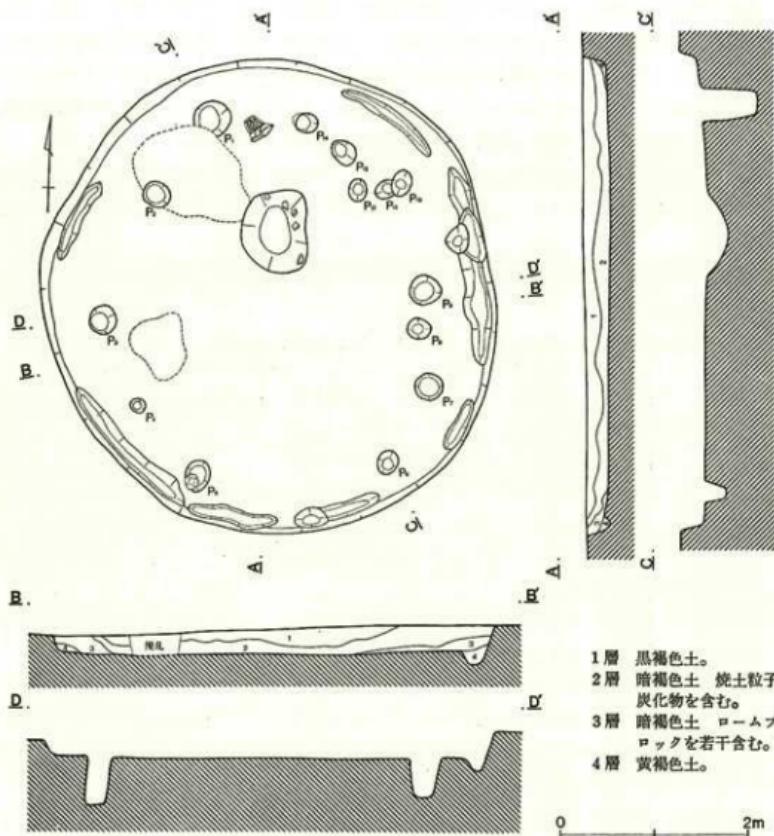
拡張区の住居跡、土壙等の調査を完了し、3月25日、拡張区全景写真を撮影して、現場における調査を全て終了した。

尚、各住居跡、土壙等の調査経緯は、簡略にして以下の表にまとめた。 (金子 直行)

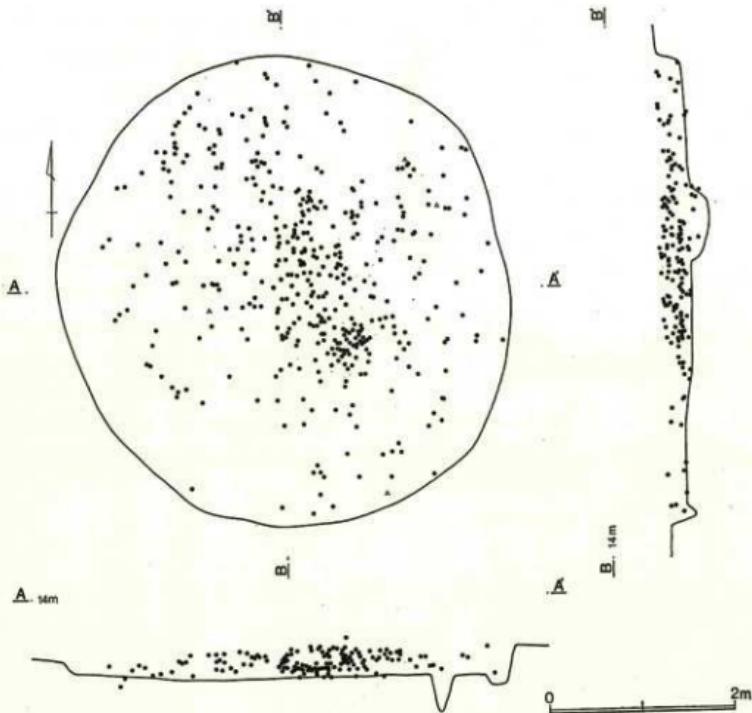
	2 月 1日	15日	28日	3 月 1日	15日	25日
遺構確認	—	—	—	—	—	—
1号住	—	—	—	—	—	—
2号住	—	—	—	—	—	—
3号住	—	—	—	—	—	—
4号住	—	—	—	—	—	—
5号住	—	—	—	—	—	—
6号住	—	—	—	—	—	—
7号住	—	—	—	—	—	—
8号住	—	—	—	—	—	—
9号住	—	—	—	—	—	—
10号住	—	—	—	—	—	—
11号住	—	—	—	—	—	—
12号住	—	—	—	—	—	—
13号住	—	—	—	—	—	—
土壙	—	—	—	—	—	—
ブレ確認	—	—	—	—	—	—

IV 遺構と遺物

1 住居跡と土器



第7図 第1号住居跡



第8図 第1号住居跡遺物分布図

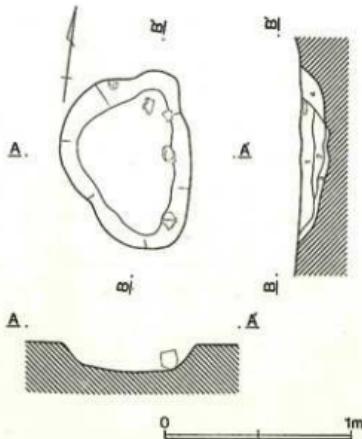
第1号住居跡（第7図）

E—2、3～F—2、3区にわたって位置するが、大半はF—2～3区に所在する。調査区のはば中央部にあたり、今回の調査範囲内で縄文時代の住居跡としては西端に位置している。

住居跡のプランは長径約5m、短径約4.5mを測り、南北方向に細長い橢円形を呈す。炉は中央部長軸上やや北寄りに位置している。壁溝は一周せず、とぎれながら部分的に存在し、壁より幾分か離れて掘り込まれている。北壁部には壁溝は存在しない。床面は炉の周辺が踏み固められているものの、他の場所は細かな擾乱が進み、脆弱な状態を呈していた。

柱穴は14個検出された。床面からの深度はP₁=69cm、P₂=29cm、P₃=47cm、P₄=16cm、P₅=25cm、P₆=20cm、P₇=57cm、P₈=47cm、P₉=19cm、P₁₀=63cm、P₁₁=46cm、P₁₂=24cm、P₁₃=14cm、P₁₄=40cmを測る。殆どの柱穴は壁から約60～70cm内に位置し、住居跡のプランに沿って配列されるが、壁溝内にも小さなピットが検出された。

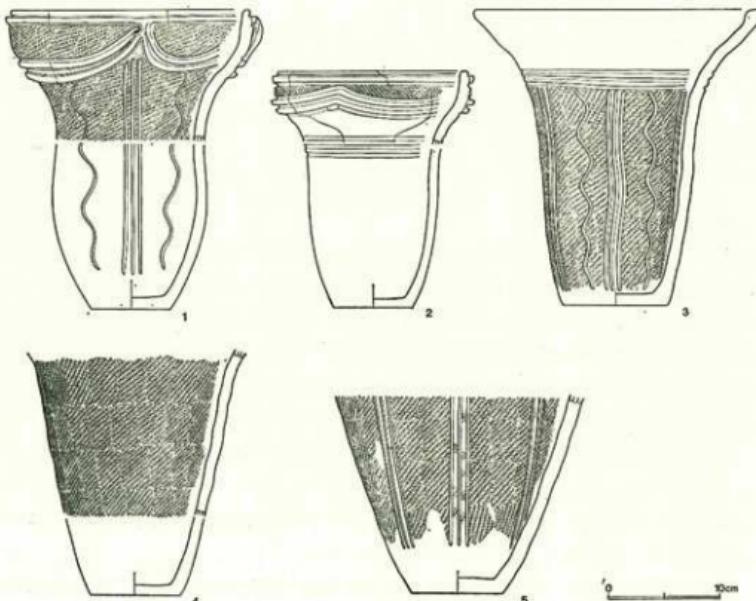
炉は長軸方向に細長い不整橢円形を呈し、長径約1m、短径約0.8mを測る。底面が皿状を呈する地床炉であり、焼土の堆積は殆どなかった。



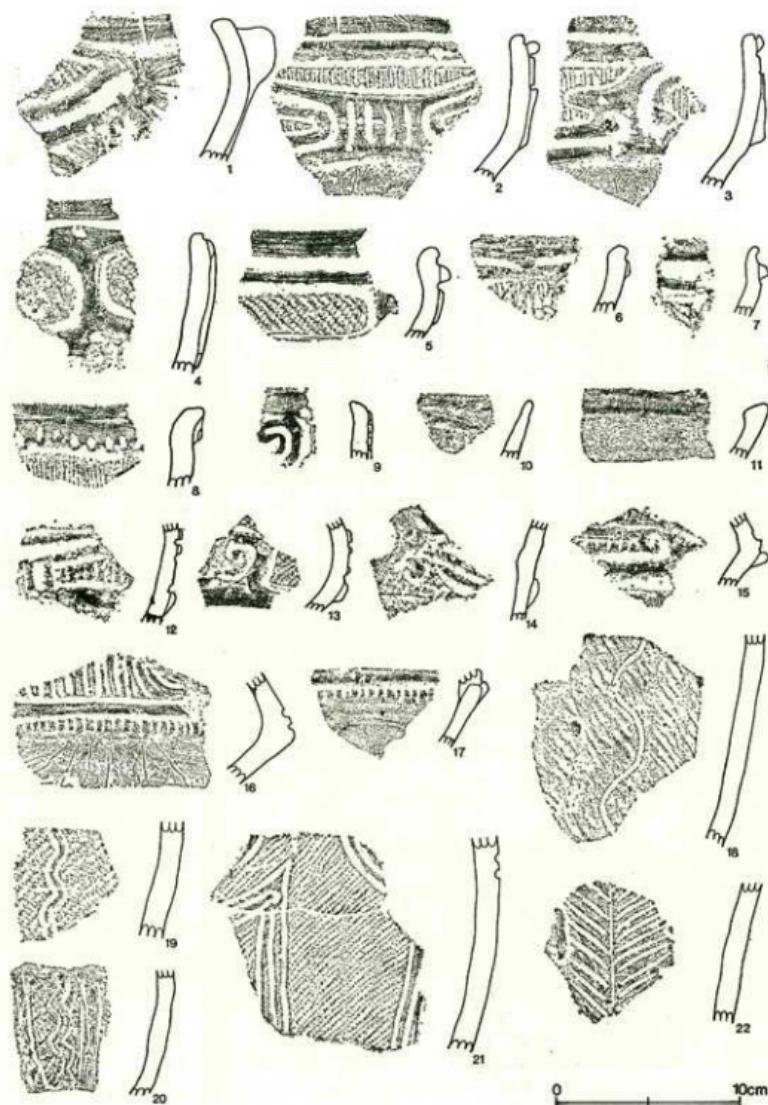
第9図 第1号住居跡

遺物は総数 439 点を検出した。住居跡中央部で密に、壁付近で粗に分布する傾向にあり、一般的なレンズ状の堆積状態を示していた。この内、ほぼ完形品 1 点と推定復元の可能な 4 点を図示した。(第10図 1～5)

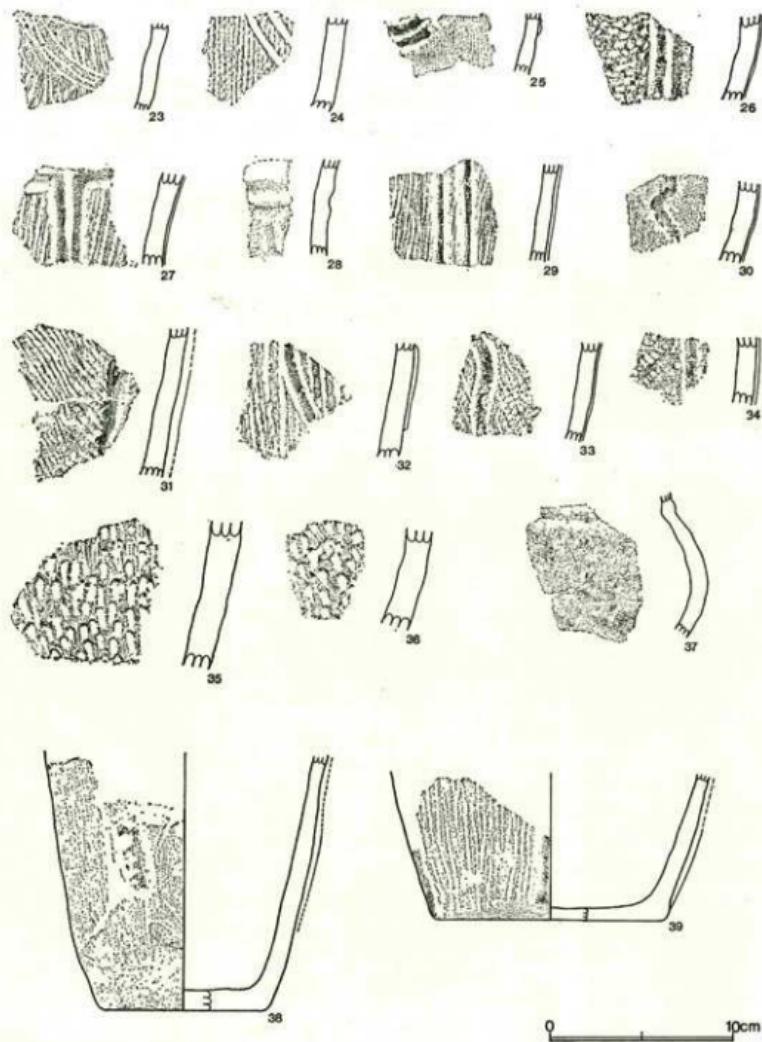
1 は口縁部破片から推定復元したものである。口縁下に 1 本の隆帯が巡り、2 本の隆帯が連弧状に配され口縁部文様帯が区画されている。従って、口縁部文様帯の下端部は区画が不明瞭になっている。弧状に連結する隆帯の上 1 本は、口縁部隆帯と接する部分で小さな渦を巻く。隆帯の連結部の下部に、3 本単位の沈線が垂下し、1 本の蛇行沈線と組み合わさって懸垂文を構成するものと思われる。地文は縦文 Rしが施される。



第10図 第1号住居跡出土土器(1)



第11図 第1号住居跡出土土器(2)



第12図 第1号住居跡出土土器(3)

2は口縁部文様帶が1と同様な構成をとるが、文様帶が狭く、2本の隆帶が緩やかな波状となる。口縁部文様帶は細かな繩文RLが施される胴部と頸部は沈線で分帶され、頸部無文帶が形成されている。隆帶脇のナゾリは角棒状工具で施され、深くて角張った沈線になっている。

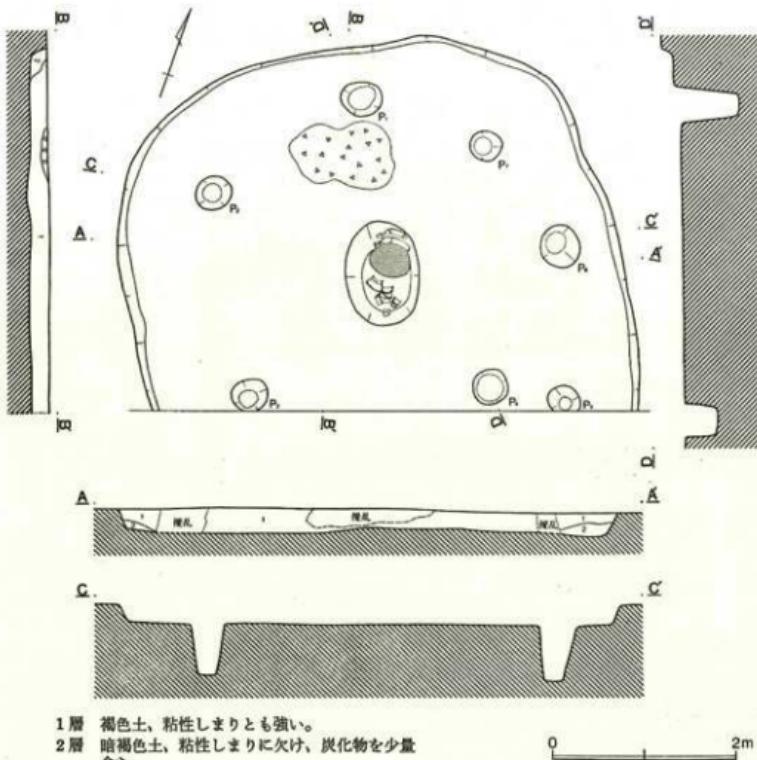
3は北壁近くのP₁とP₁₄の中間の床面直上に、押しつぶされた状態で出土した。口縁部及び底部の一部を欠損するが、第1号住居跡から出土した唯一の完形品である。口径25.6cm、底径9.4cm、器高26.4cmを測る。口縁部が朝顔状に開く深鉢形土器で、3本沈線によって無文帶の口縁部と胴部が分帶される。胴部は3本沈線の懸垂文で7分割され、その間に1本沈線の蛇行懸垂文を配している。地文は繩文RLであり、地文を施文した後に沈線を施している。

4は深鉢形土器の胴部で一周する。地文に繩文RLが密に施される。懸垂文は認められない。5は3本沈線の懸垂文が施され、繩文RLが施される。

第1号住居跡出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1 3	I a	2本隆帶によって構成される渦巻文が口唇部付近まで迫り上って突出し、綾形の小さな溝が巻く。繩文RLを横回転する。	胎土は緻密で、白色粒を多く含む。焼成は良好。表裏面とも暗赤褐色を呈する。	
2 3 3	I a	口縁部が立ち気味に内彎し、頸部無文帶部の括れが強い。低隆帶で渦巻文を基調としたモチーフが描かれ、隆帶の脇を細沈線でナゾリする。区画内は同種の沈線を充填する。2の区画文の接する部分は、綾位の4本沈線が施される。3の渦巻文の先端部は、劍先文状に突出する。	胎土は緻密で、白色粒と黒色粒が目立つ。焼成は良好。表裏面とも黄褐色を呈する。	2と3は同一個体である。
4 3	I b	口縁部が緩く内彎し、低隆帶で渦巻文と区画文が構成される。地文に繩文RLが横回転される。頸部無文帶を有しないものと思われる。	胎土は緻密であるが、砂粒を多く含み、白色粒が目立つ。焼成は良好。赤褐色を呈する。	
5 3 7 9	I	口唇部下に隆帶が巡り、隆帶と沈線で渦巻文と区画文が構成されるものと思われる。5は横位の繩文RLが、6は綾位の燃杀しが、7は繩文RLが施文される。7は波状口縁を呈すものと思われる。	5・7・9の胎土は緻密で、焼成も良好である。6は砂粒、小礫を多く含み、焼成は不良である。色調は5が灰褐色、6・9が暗褐色、7が橙褐色を呈する。	
8 3	VII	折返し口縁を呈し、折返し部に角棒状工具による刺突が施される。刺突は斜め上から施され、断面が四角形を呈する。胴部には条線が施される。	胎土は緻密であり、白色粒と黒色粒が少量含まれる。焼成は良好。色調は灰褐色であるが、部分的に黒色を呈する。	
10 3	VII	口唇部が薄く成形される、小形の鉢と思われる。地文は施文されず、ヘラ状工具によつて器面を整えている。	胎土は緻密であり、白色粒が目立つ。焼成は良好。表裏とも暗褐色を呈する。	

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11 3	V a	口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が内側に肥厚する。	胎土は砂粒、小種を多く含む。焼成は不良。表が橙褐色、裏が黒褐色を呈する。	器面が荒れ、開窓が著しい。
12 3	I a	断面カマボコ状の隆帯で口縁部モチーフが構成され、地文に撚糸しが施文される。	胎土は砂粒と長石粒を多く含む。焼成は不良。暗褐色を呈する。	器面の荒れが著しい。
13 3	I	隆帯で渦巻文と区画文が構成され、区画文内の地文は、繩文R Lが継続位に施文される。	胎土は緻密で、白色粒を多く含む。焼成は良好。赤褐色を呈する。	
14 3	I	把手の部分である。中央に円孔が認められ、2本の隆帯でモチーフが描かれると思われる。	胎土は緻密で、白色粒を多く含む。焼成は良好。黄褐色を呈する。	
15 3 17	V a	「く」の字状に屈曲する胸部破片である。沈線で渦巻文を基調としたモチーフが描かれ、沈線を充填している。15は区画内に刺み状の沈線が充填される。	胎土は緻密であり、15は白色粒が目立つ。焼成は良好。15が灰褐色、16・17が橙褐色を呈する。	16・17は同一個体である。
18 3 20	I c	18は1本、19は2本の蛇行沈線が、20は3本沈線と2本の蛇行沈線が懸垂する。地文は18が無第L、19・20が繩文R L。	いづれも胎土は緻密で、白色粒を多く含む。焼成は良好。色調はぶい黄褐色を呈する。	20はI類のミニチュアと思われる。
21 3	I c	3本沈線で連結する渦巻文や、それから垂下する懸垂文が描かれる。繩文R Lが少し間隔を開けて施文される。	胎土は緻密であり、若干の金雲母が含まれる。焼成は良好。表裏とも橙褐色を呈する。	
22 3	II	隆帯懸垂文の貼付され、地文に矢羽状の沈線が施文される。	胎土は砂粒が多い。焼成は良好。表裏とも暗赤褐色を呈する。	
23 3 25	II a	23は3本沈線で、24は2本沈線で、25は2本隆帯で連弧文が描出される。地文は23・25が条線、24が撚糸Lである。	いづれも胎土は緻密で、白色粒が少量含まれる。焼成は良好。色調は灰褐色を呈する。	
26~29 31~34 31 39	I c	27・29が2本で、他は1本の隆帯が垂下する。地文は、26がL R L、27が撚糸R、29・32・33・39が撚糸L、31が無第L、34が繩文R Lである。	胎土は33が砂粒を多く含み、他は緻密である。焼成はいづれも良好。31・33が赤褐色を呈し、他は灰褐色を呈する。	29・39は同一個体と思われる。
30・38 3	III	地文が条線で、隆帯の懸垂文を持つ。	胎土は緻密で、焼成は良好。	
35・36 3	VI	押し引き状の剥突が認められる。	胎土は砂粒が多く、焼成は良好である。赤褐色を呈する。	35・36は同一個体である。
37 3	VII	小形の壺形土器である。	胎土は緻密で焼成は良好。暗赤褐色を呈する。	



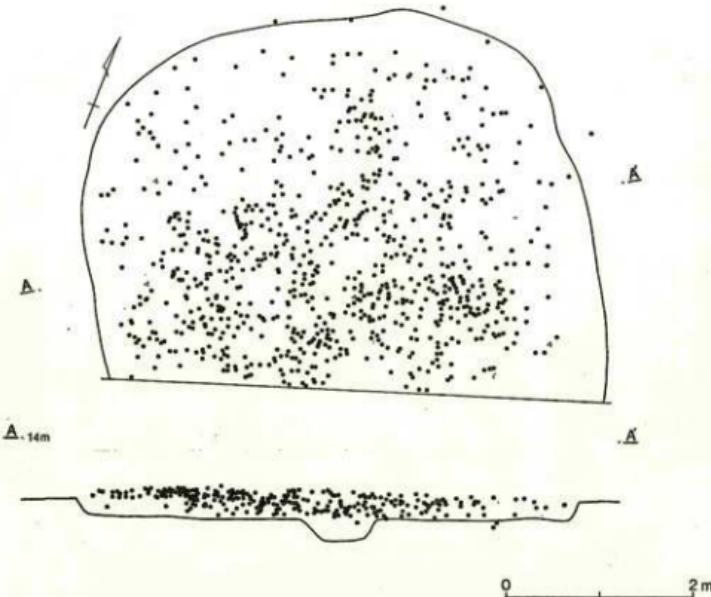
第13図 第2号住居跡

第2号住居跡（第13図）

F—3～G—3区にかけて位置しており、大半はG—3区に所在する。南壁の部分が調査区外にあたり、未調査である。

住居跡プランは未調査部分があるため推定に頼らざるを得ないが、胴の張る隅丸長方形を呈するものと思われ、短径約5.4mを測る。床面は踏み固められてはいないものの、平坦で良好な状態を呈していた。

柱穴は7個検出された。柱穴の深度はP₁=54cm, P₂=54cm, P₃=60cm, P₄=32cm, P₅=51cm, P₆=57cm, P₇=60cmであり、P₄を除くと50～60cm位で安定している。



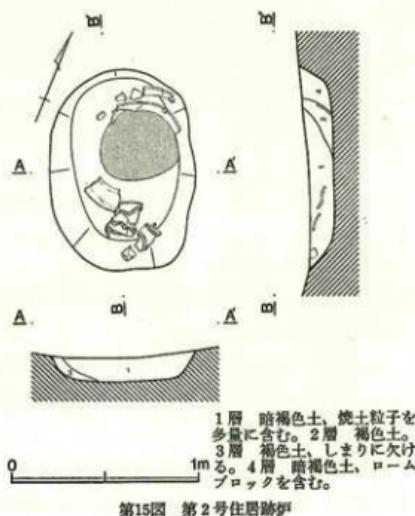
第14図 第2号住居跡遺物分布図

炉は埋壠炉であり、長径約1m、短径約0.7mを測る梢円形を呈し、住居跡長軸上やや北よりに位置する。大形の深鉢土器の胴上半部を埋設したものと思われるが、出土した破片は一周しない。炉のプランからすると、大形破片を組み合わせて炉を形成した可能性も考えられる。炉床からは連弧文土器の破片が出土した。

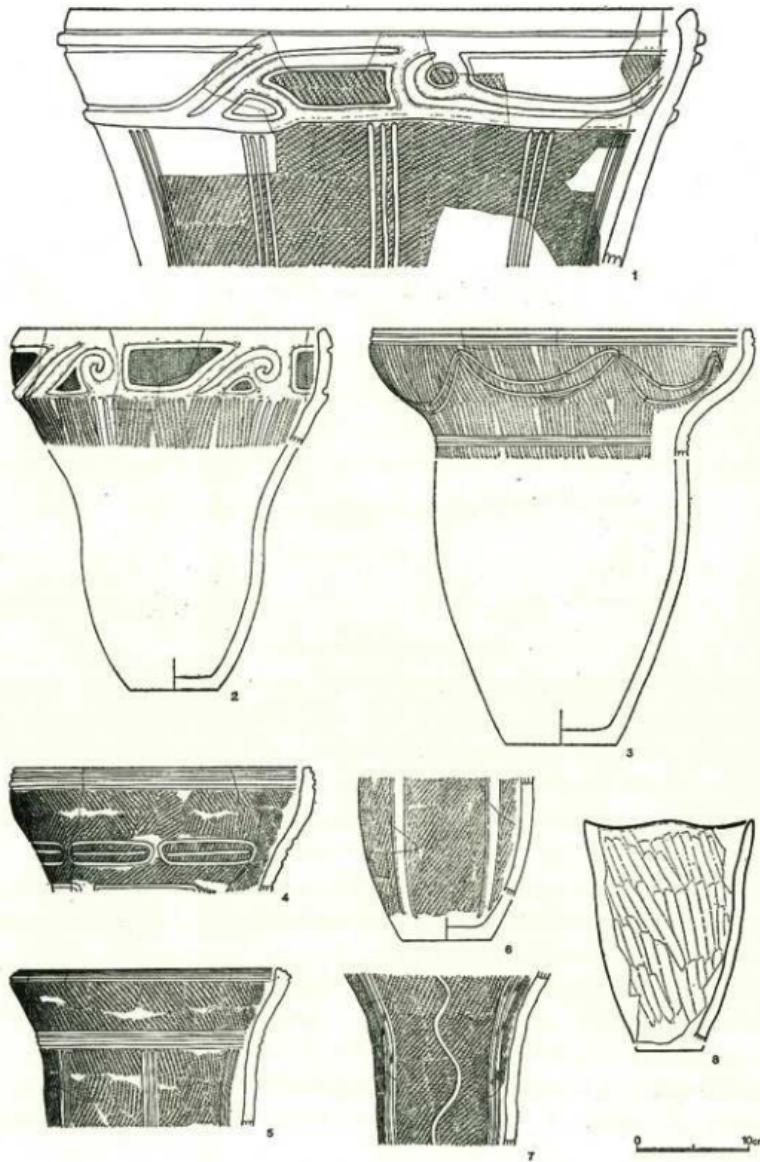
Pと炉の中間部にシジミの貝層ブロックが検出された。シジミは2cm大のものが殆んどでパンケースに約1箱分出土した。丁寧に調べたが、シジミ以外の遺存体は検出されなかった。

遺物は総数770点出土した。完形品ではなく、推定復元が可能なものを11点図示した。(第16図1~8、第17図1~3)

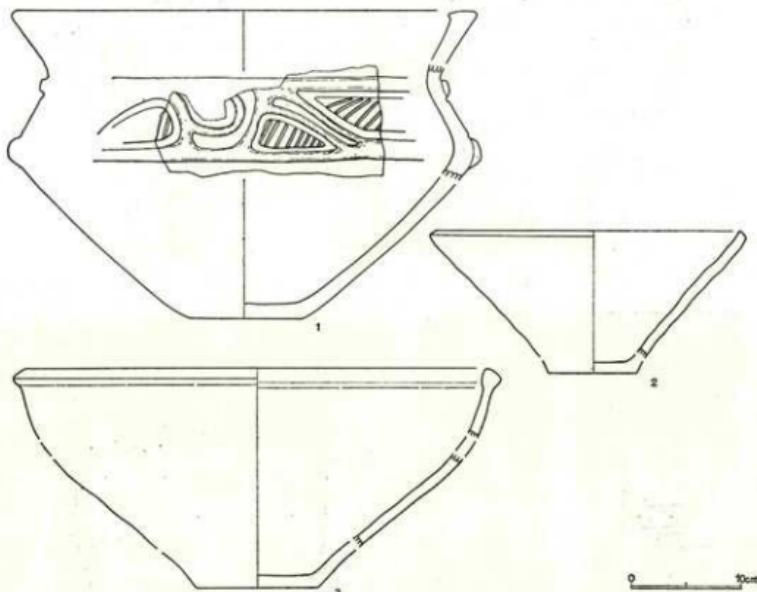
1は炉に埋設されていた土器で、一部の口縁と胴上半部の3分の1周が現存する。口縁の推



第15図 第2号住居跡炉



第16図 第2号住居跡出土土器(1)



第17図 第2号住居跡出土土器(2)

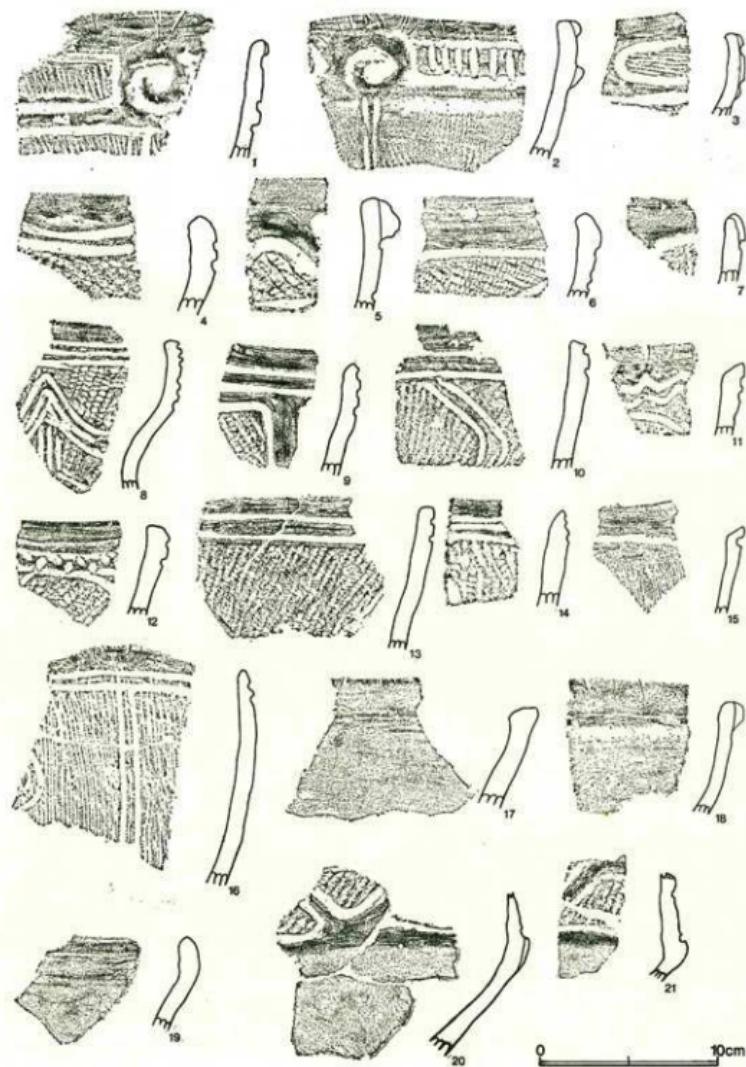
定径は56cm、現存高は23cmを測る。口縁部は太目の隆帯でモチーフが構成され、渦を巻かずに円形もしくは三角形状の区画が基調となるものであろう。頸部無文帯は形成されず、胴部には3本1組の沈線懸垂文が垂下する。地文は、口縁部が横位の繩文RL、胴部が縦位の繩文RLである。

2は口縁部が部分的に欠損し、3分の2周が現存する。推定口径は28cm、現存高は10.5cmを測る。口縁部は2本対の隆帯で渦巻文が形成される。渦巻文には二つのモチーフが看取され、それぞれが交互に配置されて器面を一周している。胴部は3本対の懸垂文が施され、地文は撚糸Rである。

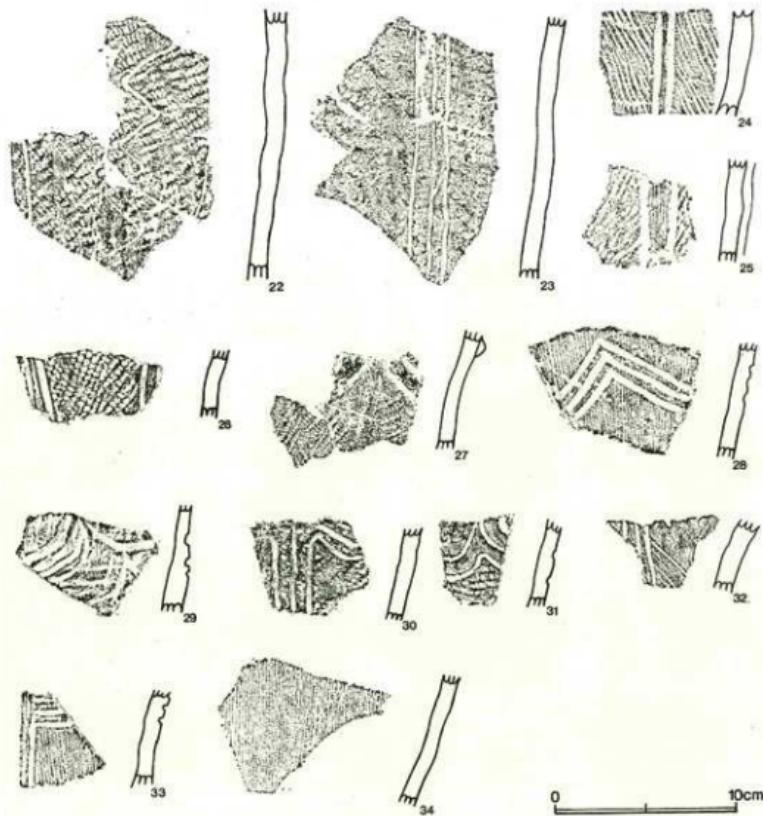
3は炉床から出土したもので、口縁の半周が現存する。推定口径は34cm、現存高は11cmを測る。口縁と胴部が2本沈線で区画され、2本沈線による崩れた連弧文が描出される。地文に撚糸Rを施文する。胴部の括れの強い連弧文土器である。

4、5は口縁部破片から推定復元したものである。4は口縁に3本沈線が巡り、胴部に梢円形の区画文を持つものである。この梢円区画は3本沈線による胴部分帶線が変形したものと思われ、中に1本の沈線が施される。梢円区画は上下の位置をずらして二段に施文されたものと思われる。5は口唇部が肥厚し、3本の沈線が巡る。胴部は3本沈線で区画され、3本対の懸垂文が施される。地文は4、5とも繩文RLを、口縁部では1段横位に、以下徐々に斜めに方向を変え、胴部では縦位に施文している。

6は2本沈線間を磨消す懸垂文を持ち、7は3本沈線と1本の蛇行沈線が対になる懸垂文を持つ。



第18図 第2号住居跡出土土器(3)



第19図 第2号住居跡出土土器(4)

両者とも地文は縦文R Lが縦位に施文される。

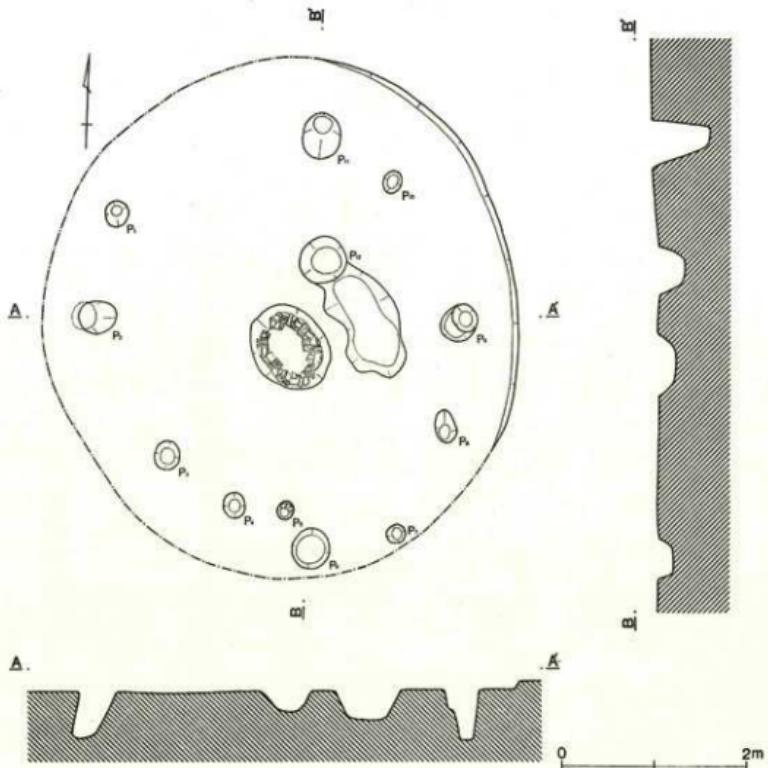
8は波状口縁の深鉢形土器で、地文の施文はなくヘラ状工具によるナデ状の成形がみられる。

第17図1～3は浅鉢である。1は「く」の字状に屈曲する胴部破片から推定復元したものである。隆帯による渦巻文を基調としたモチーフが描かれ、区画内は沈線が充填される。2は底部から直線状に口縁部が開く浅鉢で、推定口径は30cmを測る。底部を欠くが、全体の2分の1程が現存する。3は口縁部が肥厚してやや外傾する浅鉢で、口縁の3分の1と胴部の4分の1程が現存する。推定口径は45cmを測り、口径の割に器壁が1cm前後と薄く仕上げられている。

第2号住居跡出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	3 I b	口縁は外反しながら僅かに内彎し、墜帶によって幅の狭い文様帯が区画される。墜帶の渦巻文が上下の区画に接する様に配され、区画文と対になって口縁部モチーフを構成するものと思われる。胴部は渦巻文下に沈線懸垂文が施される。地文は撚糸Rである。	胎土は緻密であるが、白色粒が多く含まれ、部分的に小簇が目立つ。焼成はあまり良好ではない。表裏面とも灰褐色を呈す。	
2	3 I b	口縁部の内壁は緩く、幅の狭い文様帯が区画されている。墜帶による逆「の」字状の渦巻文が口唇部まで迫り上る。渦巻文間は沈線で長方形の区画文が構成され、区画内は同種の沈線が充填される。渦巻文下に2本の沈線懸垂文が配される。地文は撚糸Jである。	胎土は緻密であり、白色粒が目立ち、若干の雲母が含まれる。焼成は良好である。色調は表裏とも暗褐色、裏が黄橙色を呈する。	
3	3 I b	口縁部が内彎し、幅の狭い文様帯が区画される。口縁部文様帯内は沈線で梢円区画文が配され、罫文L Rが施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は表裏とも橙褐色を呈する。	
4	3 II c	口唇部が若干肥厚して内彎する。口縁下に2本の沈線が巡る。地文は複節J R Lが縱位に施文される。	胎土は細砂を多く含み、白色粒が目立つ。焼成は良好である。表裏とも暗赤褐色を呈する。	
5	3 I b	口縁部は緩く内彎し、太くて高い墜帶でモチーフが構成される。地文は罫文L Rが施文される。	胎土は緻密であり、白色粒が多く含まれる。焼成は良好。色調は暗赤褐色を呈する。	
6	3 I b 7	口縁が肥厚し、緩く内彎する。沈線で区画文が配置され、低墜帶による渦巻文と組み合わさって、口縁部文様帯が構成されるものと思われる。地文は6が罫文J R、7が撚糸Jである。	6・7とも胎土は緻密で、白色粒が少量含まれている。焼成は良好である。色調は6が茶褐色で7が橙褐色を呈する。	6・7とも器面が丁寧に研磨されている。
8	3 II a	口縁部が内彎し胴部が強く括れる器形を呈し、口縁下に3本の沈線が巡る。3本単位の沈線で定形的な連弧文が描出され、連結部から3本沈線が垂下する。地文は罫文R Lが施文される。	胎土は緻密で、白色粒と黒色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は表裏とも灰褐色を呈する。	
9	3 II c	口縁下に2本の沈線が巡り、3本目の沈線が垂下して磨消懸垂帯を構成する。地文は罫文L Rが縱位に施文される。	胎土は緻密で、黒色粒が少量含まれる。焼成は良好である。色調は表裏とも褐色を呈する。	
10	3 VII 13	口縁下に2本の沈線が巡り、蛇行する2本沈線が垂下する。地文は罫文L Rが斜位に施文され、条が縱方向に走る。	胎土は緻密である。焼成は良好である。色調は表裏とも暗灰色、裏が褐色を呈する。	10・13は同一個体である。

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11 · 12 · 14	I c	11は鋸歯状の沈線が2本巡り、12は2本の沈線間に交互の刺突が行われ、14は3本の沈線が巡る。いずれも追弧文は施出されない。地文は12・14が繩文R Lで、12は不明である。11の口唇部形態は内削状を呈する。	胎土はいずれも緻密であり、12は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は11が橙褐色、12が茶褐色、14が暗灰褐色を呈する。	
15	III	口縁下に1本の深い沈線が巡り、口唇部は外傾する。地文に条線が施される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。	
16	VII	口縁に2本の沈線が巡り、2本対の平行沈線と蛇行沈線が垂下する。地文は条線である。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好で、暗褐色を呈する。	
17 · 18	V	17は頭部と胴部が屈曲する浅鉢の口縁部と思われる、口唇部が内側に肥厚する。18は口縁の開く浅鉢で、口縁部が肥厚して外傾する。	両者とも胎土は緻密であり、焼成は17が良好で、18は不良である。色調は両とも橙褐色を呈する。	
19	IV	外傾する口縁部が、立ち気味に内彎する。地文は施文されていない。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。	
20 · 21	V a	「く」字状に屈曲する胴部破片で、胴部の文様帯は隆帶で区画されている。地文は繩文R Lが縦位に施文されている。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	20・21は同一個体である
22 · 23	I c	3本沈線による懸垂文が施文される。22は鋸歯状の沈線が垂下する。地文は繩文R Lしが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は22が灰褐色、23が暗赤褐色を呈する。	
24 · 26	I c	2本の沈線間が磨消される懸垂文を持つ。地文は24が捺糸Lで、26が繩文R Lである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は両とも灰褐色を呈する。	
25	I c	断面カマボコ状の隆帶が垂下する。地文は繩文L Rが施文される。	胎土は緻密で、焼成は不良である。色調は赤褐色を呈する。	
27	VII	隆帶が連弧文状に貼付されたものである。地文は繩文R Lしが施文される。	胎土は白色粒を多量に含み、焼成は不良である。赤褐色を呈する。	
28 · 31	I	3本沈線で、28は定形的な、29~31は崩れた連弧文が施文される。地文は28が条線、29・30が繩文R L、31が0段多条繩文R Lである。	いずれも胎土は緻密で焼成は良好である。色調は28・29が橙褐色、31が灰褐色を呈する。	
32 · 34	III	32は蛇行条線の上に3本の沈線懸垂文が施され、33は条線の上に沈線で区画が成される。34は条線のみである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は32が灰褐色、33・34が赤褐色を呈する。	33・34は同一個体と思われる。



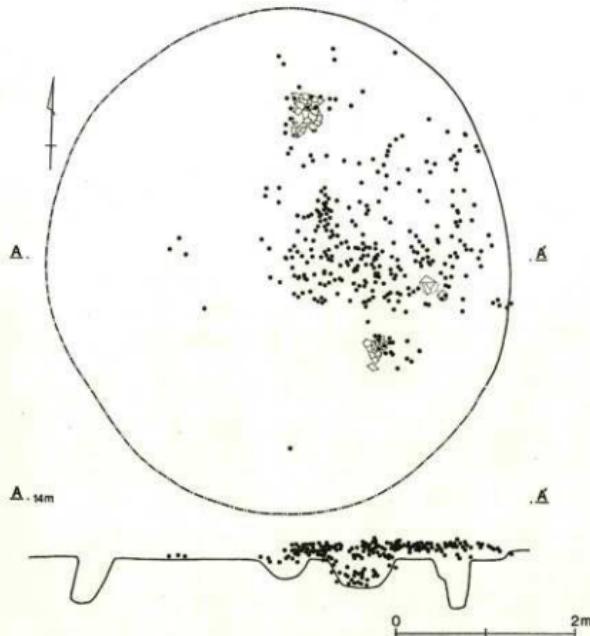
第20図 第3号住居跡

第3号住居跡（第20図）

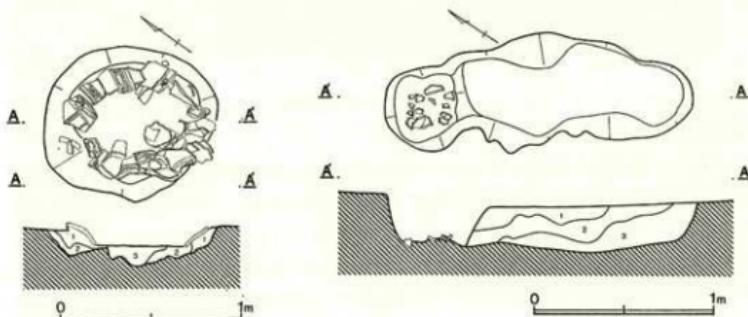
G—2～3区にかけて位置し、大半がG—3区に所在する。第2号住居跡の北東方向に、第4号住居跡の北西方向に隣接して位置する。また、第3号住居跡の北西コーナーは第11号住居跡と重複している。

住居跡はローム面に浅く掘り込まれて構築されているため、覆土の上層まで表土の擾乱が及んでいた。また、第11号住居跡と重複するため、表土除去の際、第11号住居跡の遺物と本住居跡の遺物とが、ほぼ同一レベルで混在していた。そして、これ等の遺物を取り除いて、住居跡のプランを確認した際には、殆んどの壁は不明瞭であった。

住居跡のプランは現存する壁、柱穴の配置、遺物の出土状態等から、南北にやや長い橢円形を呈していたものと思われる。推定の規模は、長径が約5.6m、短径が約5.2mを測る。床面は炉を中心として踏み固められていたが、堅固な状態ではなかった。



第21図 第3号住居跡遺物分布図



- 1層 褐色土、ロームブロックを含む。
2層 赤褐色、ロームが赤色化したもの。
3層 暗褐色土、焼土を多量に含む。

第22図 第3号住居跡

- 1層 褐色土、しまりに欠ける。
2層 暗褐色土、焼土粒子を含む。
3層 暗褐色土、しまりあり。

第23図 第3号住居跡、ピット12

柱穴は総数12個検出された。柱穴の床面からの深度は、 $P_1=37\text{cm}$ 、 $P_2=45\text{cm}$ 、 $P_3=23\text{cm}$ 、 $P_4=46\text{cm}$ 、 $P_5=10\text{cm}$ 、 $P_6=14\text{cm}$ 、 $P_7=18\text{cm}$ 、 $P_8=46\text{cm}$ 、 $P_9=49\text{cm}$ 、 $P_{10}=16\text{cm}$ 、 $P_{11}=61\text{cm}$ 、 $P_{12}=26\text{cm}$ を測る。この内、 P_5 は底部付近の破片が立った状態で出土しており、住居跡内の埋甕として考えることも可能である。しかし埋甕として考えるには、あまりにも貧弱であった。また、 P_{12} は底面から土器片が多數出土しており、更に長楕円形の掘り込み部を伴なったり、炉に近接していることなどから、一般的な柱穴とは思われない。発掘時の所見では、住居跡との切り合い関係は不明であった。

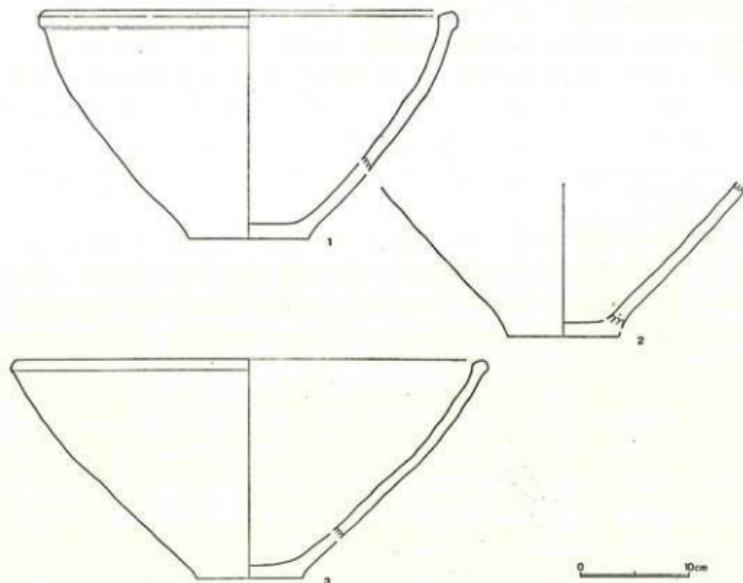
炉は住居跡のはば中央部に位置しており、長径約1.1m、短径約0.8mを測る橢円形を呈する。長軸方向がN-40°-Wを測るため、住居跡のプランはこの方向に長軸をとる可能性もある。炉の形態は埋甕炉であるが、単体の土器を埋設するのではなく、数個体の口縁部の大形破片を橢円形に組み合わせて構築するものである。炉には第25図3・4・5・6・7が使用され、炉の覆土から8が突き刺さった状態で出土した。

遺物は総数387点出土した。しかし遺構確認時に多数の土器片が出土しており、住居跡の西半分の遺物もその時にとりあげているため、遺物の分布図には示されていない。覆土からはほぼ完形品に近いものや大形破片が多數出土している。また、炉に使用されていた土器片も、その重要性から可能なかぎり復元して図に示した。（第24図1～3、第25図1～9）

第25図1は、口縁部が立ち気味に内彎し、胴部で括れて上半部が朝顔状に開き、下半部が脹らみながら底部へ移行する器形を呈する。底部と口縁の3分の1を欠損するが、全体の器形を知り得る現存率は約60%である。口径は21cm、現存高は21cmを測る。口縁下に2本の沈線が巡り、胴上部文様帯の上限を画している。胴部は括れ部に3本の沈線と両端が折れて懸垂文を構成する沈線が巡り、上下に文様帯が分帶されている。上半部は文様が描出されず、縄文Rしが斜位に施文されている。そのため条が立ち気味になっている。下半部は前述の沈線が2本対となり蛇行して垂下する。胴下半部はこの懸垂文によって5分割されている。

2は口縁部の大形破片から復元したものであり、推定口径約27cm、現存高13cmを測る。口縁下に2本の沈線が巡り、沈線間は上下からの半肉彫の刺突で鋸歯状を呈している。胴部の括れ部に沈線が巡り、上下に文様帯が分帶される。上半部は3本対の沈線が胴部分帶線まで垂下し、文様帯を分割している。下半部がどの様なモチーフ構成になるかは不明であるが、おそらく同種の沈線が垂下するものと思われる。地文は無節Lしが施文されている。

3は口縁部が緩く内彎し、胴部の括れが弱いキャリバー形を呈する。口縁の約4分の1と胴下半部を欠損する。推定口径は52cm、現存高は39cmを測る。口縁部文様帯は比較的幅が狭く、渦巻文と区画文でモチーフが構成される。渦巻文は文様帯下端から上端へ迫り上り上から渦き込む隆帯と、上端から下端へ垂れ下り下から渦き込む隆帯で構成される。渦巻文が相互に入り組む部分には、長楕円形の区画文が配置されている。また2本の隆帯が斜位に平行する部分では、上下に三角形状の区画文が配置される。口縁が全周しないので推定に頼らざるを得ないが、8単位の渦巻文、4単位の橢円形区画文、上下を一組とすると4単位の三角形区画文で、口縁部文様帯が構成されていたものと思われる。また隆帯脇をなぞる沈線に目を転じると、両端に渦を巻く大きな「○」字状の沈線

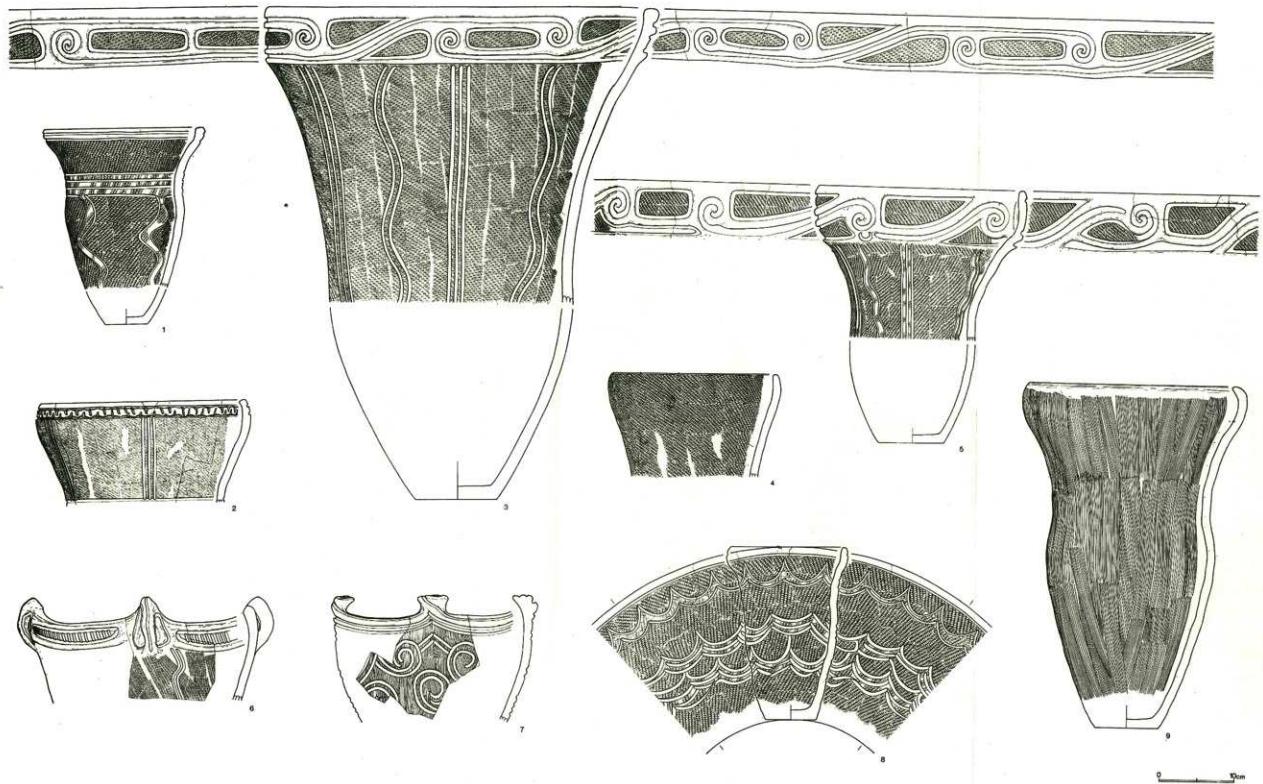


第24図 第3号住居跡出土土器(1)

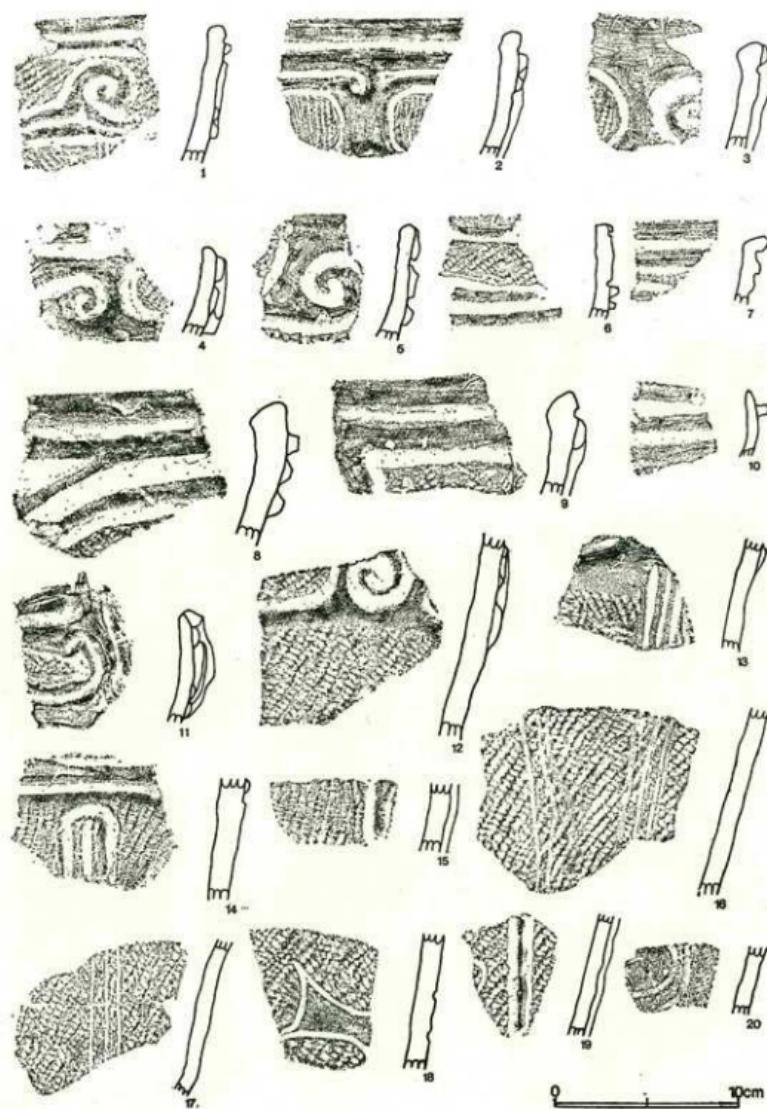
が、相互に入り組んで4箇所に突出され、その間に橢円形区画文と三角形区画文が交互に配置されるという構図が理解される。胴部は3本沈線の懸垂文と、2本沈線の蛇行懸垂文が交互に配置されている。地文は複節LRSLが、口縁部、胴部共に縦位に施文されている。

4は口縁部が内彎する深鉢土器で、口縁の半周が現存する。推定口径は22cmを測る。文様の描出はみられず、口縁直下から繩文SLRが密に施文されている。

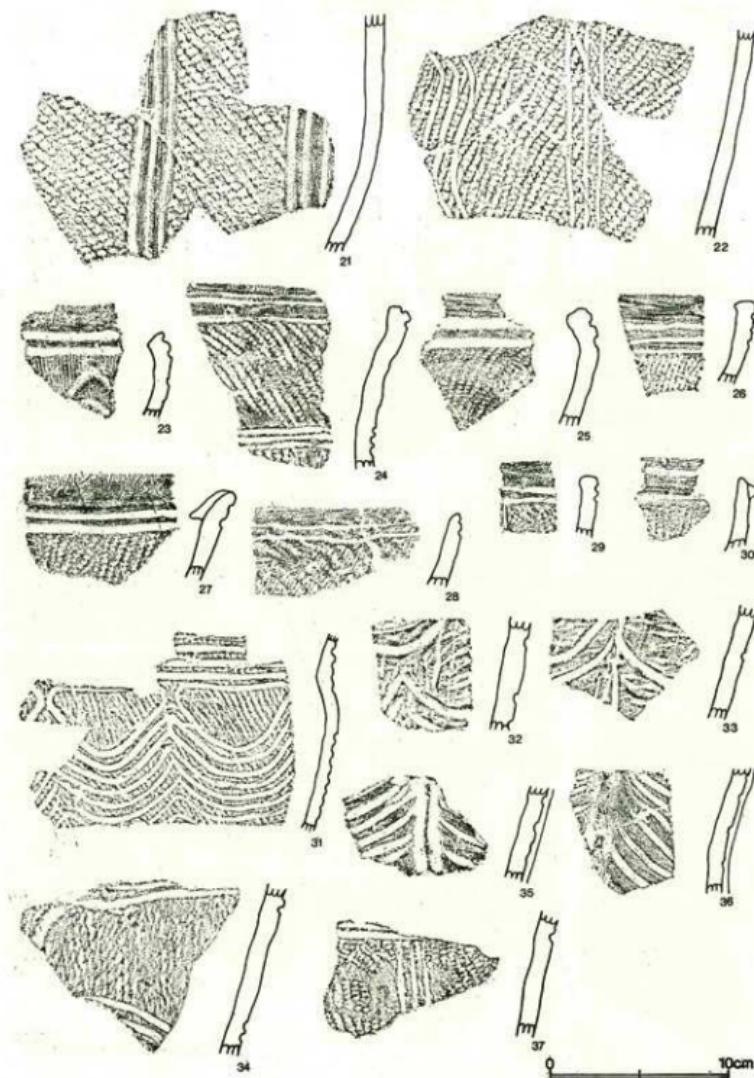
5は口縁部が立ち気味に内彎し、括れの強いキャリバー形土器である。口縁の一部と胴下半部を欠損する。口径27.4cm、現存高20cmを測る。口縁部文様帶は、隆帯による渦巻文と区画文から構成される。渦巻文は、下から迫り上る隆帯と上から垂れ下る隆帯が組み合わさって形成されているが、単独の隆帯で渦を巻く部分もある。そしてアクセントを加えたり、多少モチーフや組み合わせる。区画文や渦巻の方向を変えているため、5箇所の渦巻文はそれぞれが異なったものとなっている。区画文も上下対で5箇所に配されるが、1箇所は長方形区画となっている。1箇所の渦巻文の下部には、沈線で三日月形の文様が付加されている。胴部の懸垂文は3本単位で、渦巻文下に蛇行沈線が5箇所、区画文下に平行沈線が5箇所配されている。平行沈線と蛇行沈線が対となって胴部を5分割しているが、長方形区画文が配される部分は渦巻文間が狭くなっているため、懸垂文間もつまっている。そして、この部分の平行沈線懸垂文だけが2本単位となっている。地文は繩文RLSが口縁部で横位に、胴部で斜位から斜いに縦位に施文されている。



第25图 第3号生居陈出土器(2)



第26圖 第3号住居跡出土土器(3)



第27図 第3号住居跡出土土器(4)

6は口縁部破片から復元したもので、橋状把手が4箇所に付くものと思われる。幅の狭い口縁部文様帶が構成され、横長の区画文の中に沈線が充填される。胴部の地文は撚糸しが施文され、2本対の蛇行沈線が垂下する。

7も口縁部破片から復元したもので、4箇所に把手が付くものと思われる。胴部は2本沈線で描出される巻方向の異なる渦巻文が、左右に連結して1単位となり、さらにそれぞれが横に連結するモチーフ構成をとるものと思われる。下段の渦巻文は山を1つずらしており、連弧文土器と同様な文様構成を示している。

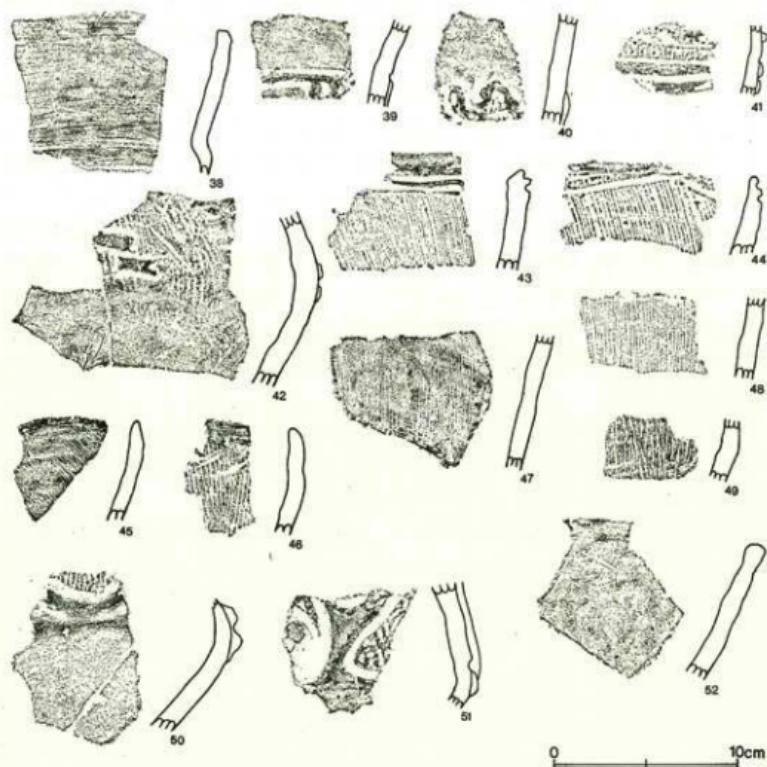
8は口縁部が僅かに内彎し、胴部の括れの弱い深鉢形土器である。口縁部が約半周程欠損している。口縁下に1本の沈線が巡り、胴部は分帶されず連弧文が3段にわたって施文される。連弧文を描出する沈線は浅く、不明瞭である。上段の連弧文は2本沈線で描出される。中段、下段は3本沈線で描出されているが、部分的に2本になったり4本になったりしている。中段と下段は山をずらして施文されるが、描出法は全体的に粗雑である。地文は繩文RLが口縁部で横位に、胴部で縦位に施文されている。

9は口縁部内彎し、胴部が括れるキャリバー形を呈する。口径36cm、底径8.4cm、器高45.7cmを測る。口縁と胴の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。文様の描出はみられないが、口縁直下に無文部を残し、他は条線が底部付近まで密に施文されている。

第24図1～3は口縁部が開く無文の浅鉢であり、完形品はない。1は口唇部が肥厚して外傾するやや器高の高い浅鉢である。全体の約5分の1が現存し、底部を欠損する。推定口径は37.6cmを測る。2は胴部破片であり、口縁部と底部を欠損する。全体の約5分の1が現存する。3は口唇部が肥厚し、やや外傾する。全体の約3分の1が現存し、底部を欠損する。推定口径43cmを測る。

第3号住居跡出土土器

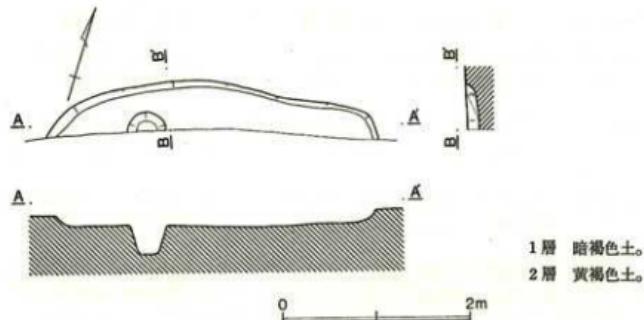
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	3 I b	口縁部は隆帯で区画され、同種の隆帯で渦巻文が描出される。胴部は渦巻文下に沈線の懸垂文が配される。地文は繩文RLが口縁部で横位に胴部で縦位に施文される。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は表が黒褐色で、裏が赤褐色を呈する。	
2	3 I b	口縁部は低隆帯による梢円区画文が配されその上下に沈線による小さな渦巻文が描かれる。地文は撚糸しが施文される。	胎土は緻密で、白色粒と黒色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は暗棕褐色を呈する。	P12から出土。
3	3 I b 7 10 12 30 8	隆帯による渦巻文と区画文で、口縁部文様帶が構成されるものである。口縁部は緩く内彎して、外傾する。地文は3・4・5・12が縦位の繩文RL、6・30が横位の繩文RLである。	胎土はいずれも緻密で、4は砂粒が目立ち、6は白砂粒と雲母が目立つ。焼成は良好。色調は3・5が黄橙色、4・6・10・12・30が赤褐色、7は黒褐色を呈する。	
8	3 I b	口縁部が緩く内彎し、口唇部形態が内削状を呈する。2本の太目の隆帯で、渦巻文を基調とするモチーフが描出されるものと思われる。地文は繩文RLが横位に施文される。	胎土は緻密であり、黒色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は8が橙褐色、9が暗褐色を呈する。	8・9は色調は異なるが、同一個体と思われる。



第28図 第3号住居跡出土土器(5)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11	3 I b	口縁部が波状を呈し、横状把手が付く。地文は繩文RLが横位に施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。	
14	3 I b	胴部に3本沈線の両端が連結する懸垂文が施される。地文は0段多条の繩文RLが縱位に施文される。15は隆帯が貼付される。	胎土は緻密である。白色粒を多く含む。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	14・15は同一個体である。
15				
13	3 I c	胴部に3本沈線による平行懸垂文が施文される。地文は、13が口縁部文様帶下に繩文RLを横位に施文するほかは、繩文RLが縱位に施文される。	胎土は緻密である。焼成は16が不良で他は良好である。色調は13・17・21が赤褐色で、16が灰褐色を呈する。	16・21はP12から出土。
16				
17				
21				

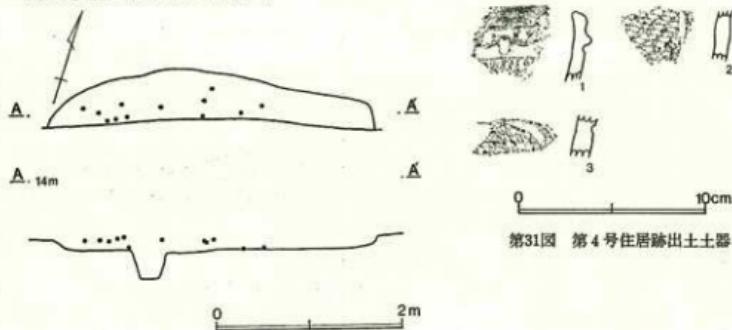
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
18 3	VII	沈線による菱形状のモチーフが描出される。全体の構成は不明。地文は縄文RLである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
19 3	I c	断面カマボコ状の隆帯と、蛇行沈線が垂下する。地文は縄文RLの縱回転である。	胎土は砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。赤褐色を呈する。	
20 3	VII	2本の沈線で曲線モチーフが描出される。地文は細い撚糸しが密に施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
21 3	I c	3本沈線間を磨消す懸垂文が施文されている。地文は複節LRLが縱位に施文される。	胎土は緻密であるが白色粒が目立つ。色調は暗赤褐色を呈する。	P12から出土。
22 3	II a	口縁下に2本の沈線が巡り、2本沈線で連弧文が描出される。地文は条線である。	胎土は白色粒、黒色粒が多く含まれ、焼成は不良。灰褐色を呈する。	
24 3 29	III c	口縁下に26は3本、他は2本の沈線が巡り、連弧文の描出されないものである。胴上半部が外傾し、口縁部が僅かに内凹する。27は口縁部裏側に三角形状の突帯を持つ。24は胴部が3本沈線で分帶される。地文は、28が0段多条縄文RLで、他は縄文RLである。	いずれも胎土は緻密である。焼成は27・28が不良で、他は良好である。色調は27が灰白色で、他は赤褐色を呈する。	24・28が戸内から出土、27がP12から出土。
31 3	II a	胴部が4本沈線で分帶され、下半部に7本の沈線で連弧文が描出される。一番上側の沈線が柱状区画を成す。地文は撚糸Lである。	胎土は緻密で、白色粒子が目立つ。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。	
32 3 37	II	連弧文土器の胴部破片である。32～36は削れた連弧文と懸垂文がみられる。37は懸垂文のみみられる。地文は32～34が撚糸L、37が縄文RLである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調はいすれも暗赤褐色を呈する。	35・36は同一個体である。
38 3 41	IV	口縁部が無文帯で、朝顔状に聞くもの。胴部が隆帯で分帶される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	
42 3	VII	胴部の彎曲の強い壺と思われ、地文に撚糸Lが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
43 3 49	III	地文に条線が施文される。43・44は口縁下に2本の沈線が巡る。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	45はP12から出土。
50 3 51	V a	「く」の字状に屈曲する胴部である。地文は縄文RLしが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
52 3	V b	口縁が聞く無文の浅鉢である。口唇部は肥厚しない。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	



第29図 第4号住居跡

第4号住居跡 (第29図)

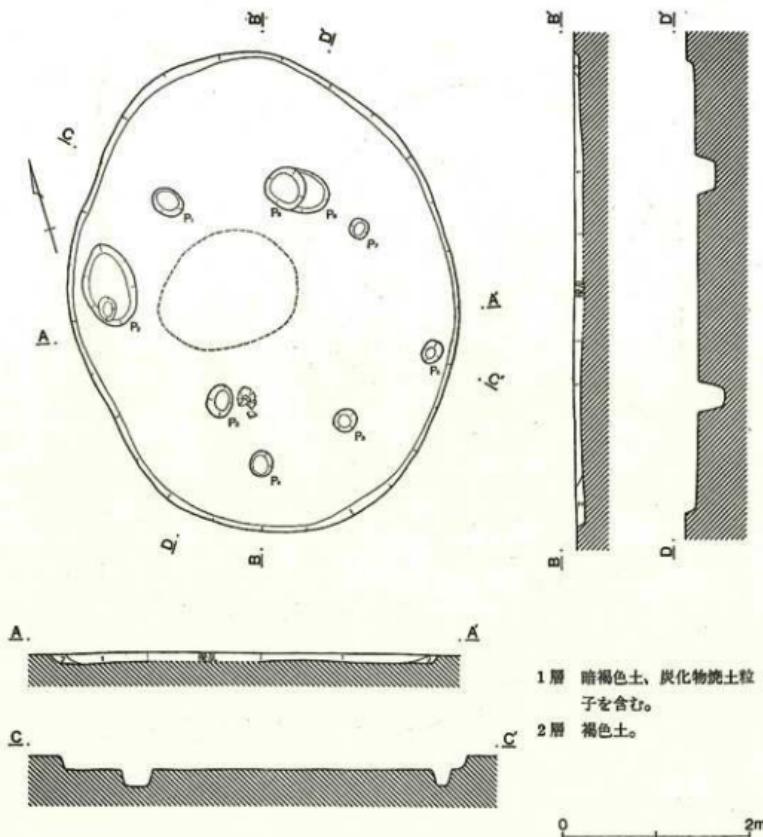
H-3区、第3号住居跡の東南に位置する。住居跡の殆んどが調査区外であるため、全体の規模、プラン等は不明である。柱穴がかろうじて検出された。深さは31cmを測る。住居跡の現存幅は3.5mを測る。壁の立ち上がりは浅い。



第30図 第4号住居跡出土物分布図

第4号住居跡出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1 3	I c	口縁に1本の隆帯が巡り、上下から刺突が加えられる。地文は撚糸Lである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
2 3	I	沈線の懸垂文がみられる。地文は纏糸R Lが縱位に施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
3 3	I	曲線の懸垂文がみられる。地文は複節LR Lが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	



第32図 第5号住居跡

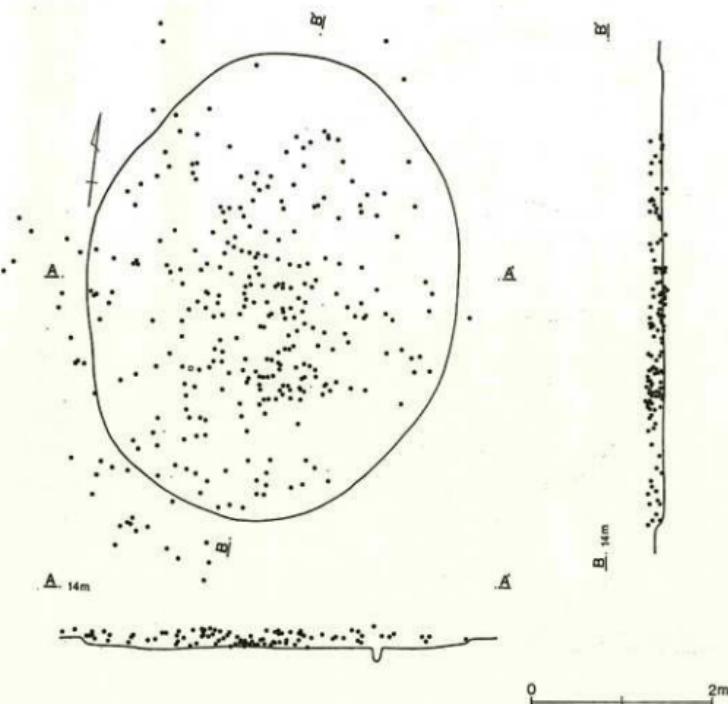
第5号住居跡（第32図）

J—2～3区にかけて位置する。今回の調査区では東端に位置し、西隣りに第13号住居跡が存在する。

住居跡のプランは南北に細長い梢円形を呈し、長径5.1m、短径4.2mを測る。ローム面への掘り込みは浅く、確認面から約10cmを測る。床面は小さな擾乱等を受け全体的に脆弱な状態を示していたが、ブロック状に固い部分が散在していた。

柱穴は総数9個検出された。いずれも深く掘り込まれているものはない。柱穴の深度は、P₁=15cm、P₂=15cm、P₃=25cm、P₄=18cm、P₅=22cm、P₆=17cm、P₇=11cm、P₈=17cmを測る。

炉は住居跡のはば中央部に存在していたものと思われる。しかし、この部分が約1.5m×1m位の擾乱を受けており、不明となっている。擾乱内からは焼土や土器が出土しており、ここが炉であ

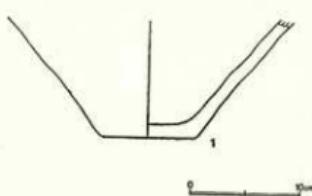


第33図 第5号住居跡遺物分布図

ったことは間違いないであろう。

遺物は全体的にむらなく分布し、332点出土したが、その密度は濃くなかった。遺物の分布状態から住居跡のアウトラインを決定したが、柱穴の配列からみると長楕円形のプランは、幾分円に近いものになる可能性もある。

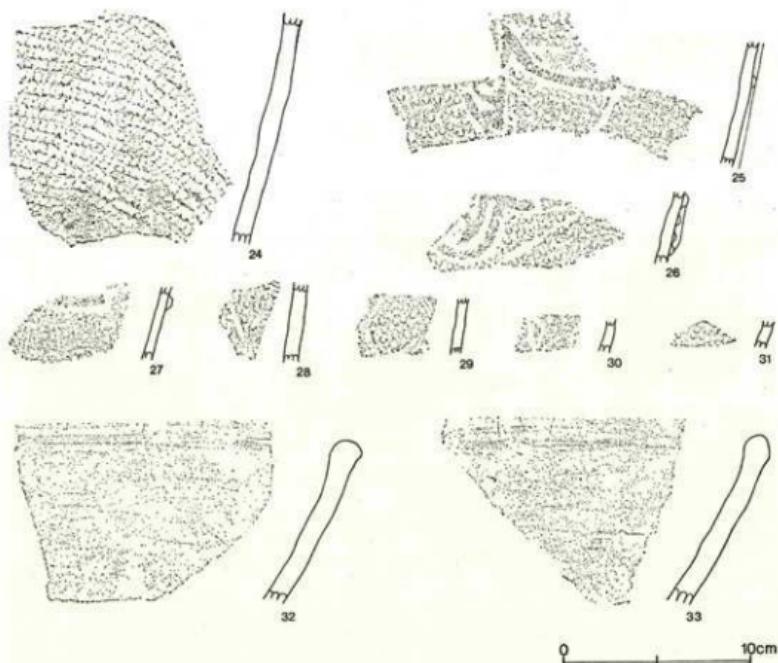
第34図1はP₂の東側から出土したものである。床面からは少し浮いた状態で正置されている。口縁部を欠損する浅鉢と思われる。底径9cm、現存高11cmを測る。



第34図 第5号住居跡出土土器(1)



第35圖 第5號住居跡出土土器(2)

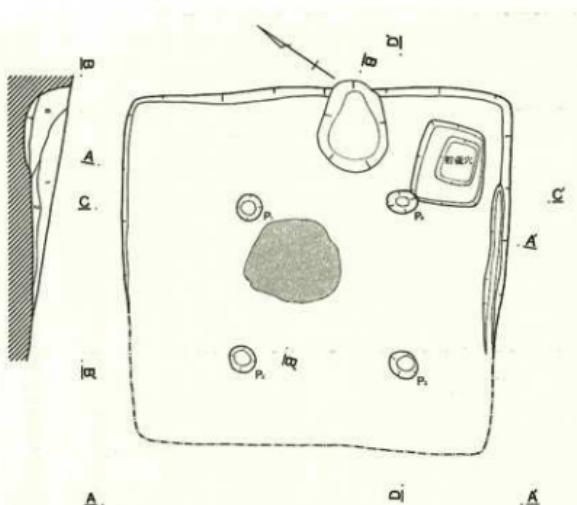


第36図 第5号住居跡出土土器(3)

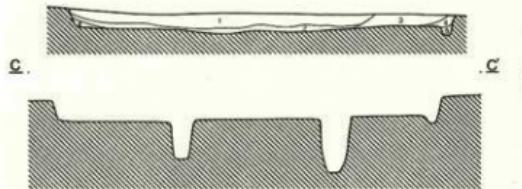
第5号住居跡出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	3 b	口縁部が僅かに内凹し、隆帯の渦巻文が上から巻き込む。渦巻文の隣りは沈線で枠状文が区画されている。	胎土は緻密であるが、焼成は不良である。色調は橙褐色を呈する。	風化が著しい。
2	3 b	しっかりとした隆帯で、渦巻文と枠状文が区画される。地文は縄文R Lが継ぎ位に施文されている。	胎土は緻密であるが、白色粒と黒色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。	
3	3 b	2本隆帯で渦巻文が描出され、その間に区画文を配するものと思われる。地文は縄文R Lを継ぎ位に施文している。	胎土は緻密である。焼成は良好である。色調は暗橙褐色を呈する。	

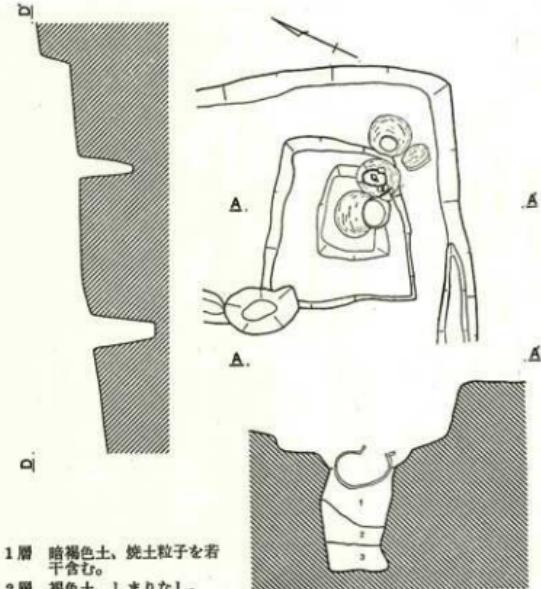
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
4 7 8	I c	キャリバー形土器の胴部破片である。4・7は3本沈線の懸垂文と2本沈線の蛇行懸垂文がみられる。6は3本の懸垂文、8は2本の蛇行懸垂文がみられる。地文は、4～7が縄文RLであり、8は撚糸Lが施文される。	胎土はいずれも緻密である。焼成は良好である。色調は4が暗褐色、5が黒褐色、6が暗赤褐色、7が黄褐色、8が赤褐色を呈する。	
9 10 11	I c	2本沈線間が磨消される磨消懸垂文を持つものである。地文は9が複節RLR、10が縦文RL、11が複節RLRである。	胎土は緻密であり、9と10は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は暗橙褐色を呈する。	
12	II a	口縁部に2本の沈線が巡り、2本の沈線で連弧文が描出される。連弧文は口縁部区画線とは接していない。地文は縄文RLが横位に施文されている。	胎土は砂粒、小礫を多く含み、白色粒が目立つ。焼成は不良である。色調は赤褐色を呈する。	
13	III c	口縁下に3本の沈線が巡るが、下の2本は1本目からやや離れて施文される。地文は縄文RLが施文される。	胎土は小礫を多く含む。焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
14 15	VII	14は口縁下に3本の沈線が巡り、3本目の沈線が垂下して、枠状の区画を施す。15は1本の沈線が巡り、3本の沈線が垂下して枠状区画を成す。地文は14が縄文RL、15が撚糸Lを施文する。	胎土は緻密であり、白色粒と黒色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は14が赤褐色、15が暗赤褐色を呈する。	
16	III a	胴下半部に連弧文が施文されるものである。連弧文は3本沈線で描出され、やや崩れかかっている。地文は撚糸Lが施文される。	胎土は緻密であり、白色粒が少量含まれる。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
17	VII	口縁部が緩く内彎し、胴部が括れる器形を呈するものと思われる。口縁下に2本の沈線が巡る。地文は無文であり、表裏ともよく磨かかれている。	胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は表が黒褐色を呈し、裏が褐色を呈する。	
18 20 24	VII	18は口縁が内彎し胴部で括れる器形を呈するものと思われ、撚糸Lが施文される。20は0段多条縄文RLが、24は縄文RLが施文される。	胎土はいずれも緻密である。焼成は良好である。色調は18が橙褐色、20が褐色、24が暗赤褐色を呈する。	
19	V a	「く」の字状に屈曲する部分に、上下から刺突が加えられている。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
21 23	III	地文に条線が施文されるものである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	
24 31	VII	隆帯で劍先文を持つ渦巻文が連結され、地文に小さな刺突文を持つ。	胎土は緻密で、焼成は不良である。色調は暗橙褐色を呈する。	24～31は同一個体である。



1層 暗褐色土、焼土粒子を若干含む。
2層 褐色土、しまりなし。
3層 黄褐色土、粘性しまりあり。



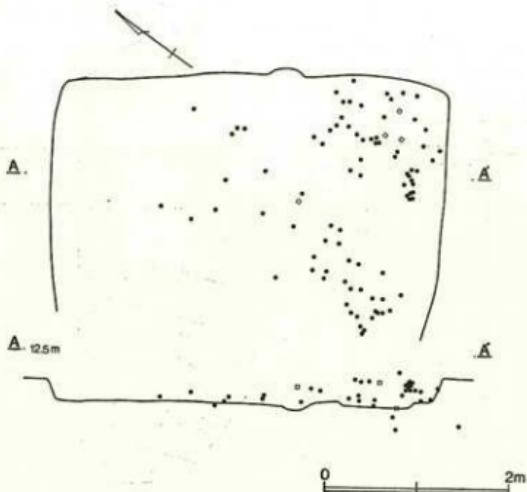
第38図 第6号住居跡貯藏穴



1層 暗褐色土、焼土粒子を含む。2層 褐色土
粘性しまりあり。3層 褐色土。4層 暗褐色土
5層 黄褐色土。6層 暗褐色土、焼土粒子を若干
含む。7層 茶褐色土、焼土粒子を含む。

第37図 第6号住居跡

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
32 33	V b	口唇部が肥厚して口縁部が開く無文の浅鉢である。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	32・33は同一個体である。



第39図 第6号住居跡遺物分布図

第6号住居跡（第37図）

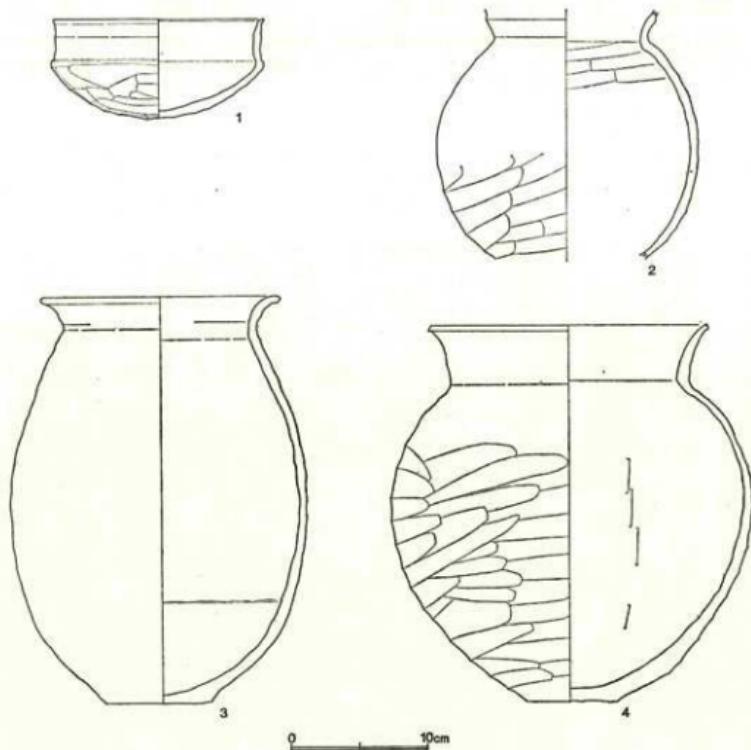
B—5～6区にかけて位置する。今回の調査区内において、最西端に位置する。住居跡は台地の平坦面から緩斜面へ移行する地点に構築されており、遺構を確認した時点では、すでに住居跡の西壁が削平されていた。

住居跡のプランは柱穴の配置等から、ほぼ方形に近いものと思われる。横幅4.3mを測り、カマドを通る主軸では現存2.5mを測る。南壁で塙溝が一部確認されたが、全周するものではない。

カマドは殆んど崩れた状態で検出され、範囲等は不明瞭であった。焼土の堆積も少なく、僅かにカマドの袖の部分が確認されただけである。主軸方向はN—60°—Eを測る。

カマドの東側に貯蔵穴が存在する。開口部の周辺に約1m位の範囲で10cm位の方形の落ち込みが確認され、そのやや壁寄りの部分に長径50cm、短径35cm、深さ50cmの貯蔵穴が位置する。

柱穴は4個検出され、P₁=41cm、P₂=66cm、P₃=71cm、P₄=52cmを測る。柱穴の内側の部分の床面が約1m²にわたって焼けており、バリバリの状態を呈していた。



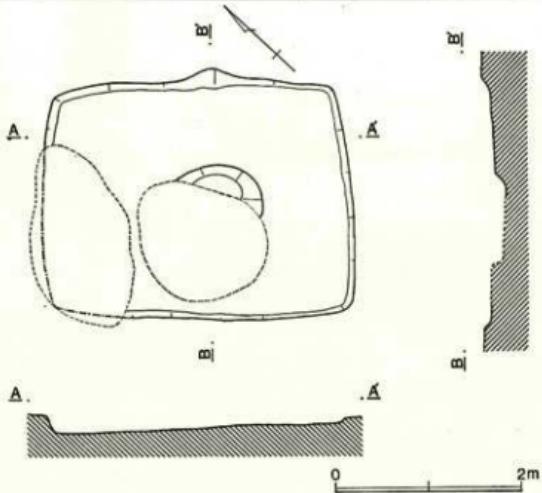
第40図 第6号住居跡出土土器

遺物は貯蔵穴の周辺にまとまって出土している。貯蔵穴直上からは、壺が1点、長甕が1点、甕が1点、壺が1点ほぼ完形の状態で出土した。他に貯蔵穴周辺を中心として、土玉が4点出土している。

第6号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 15.5 器高 7.2	口縁部が直立する。口唇部は小さい段状を呈す。体部に段を持つ。 胎土細。焼成良。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。	完形。
壺	2	現存高 19	口縁部と底部を欠損する。頸部は立ち気味に外傾し、段を持つ。 胴部は球形。胎土細。焼成不良。	頸部上半ヘラケズリ後ナデ。下半はヘラケズリ。胴部内面上位ヘラケズリ。	口縁・底部を欠損。胴部一部欠損。

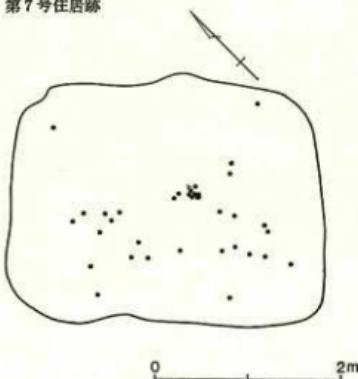
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	3	口径 17.7 底径 7.9 器高 27.9	口縁部が「く」の字状に外傾し、張りのある長胴へ移行。胴中央部に最大径を持つ。胎土細。焼成良。	口縁部ヨコナデ。胴部外面はヘラケズリよりも、縱方向のナデ。	完形。
甕	4	口径 20.6 底径 6.7 器高 27.4	口縁部は立ち気味に外反し、口唇部近くで傾斜が強くなる。胴部は肩の張る球形を呈し、胴中央部に最大径を持つ。胎土は粗。焼成良。	口縁部ヨコナデ。胴部外面はヨコのヘラケズリ。内面はヘラナデ。	完形。



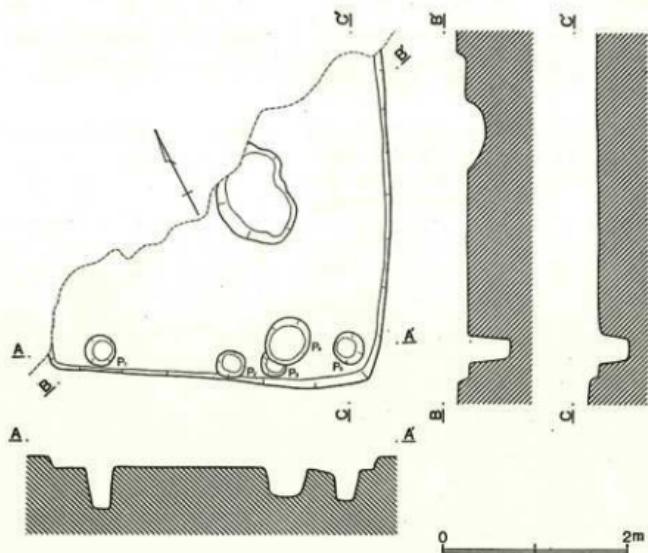
第41図 第7号住居跡

第7号住居跡（第41図）
D—5区に位置する。北に第8号住居跡が隣接する。住居跡の中央部と北壁部が搅乱されており、さらに中央部で土壤1と切り合う。

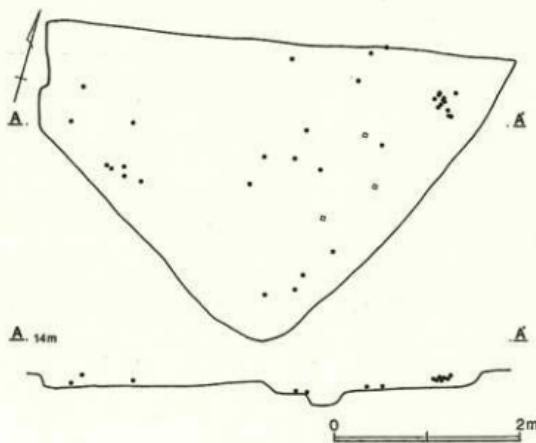
プランは長方形を呈し、長径3.3m、短径2.7mを測る。ローム面への掘り込みは浅く、確認面から約10cm前後を測る。床面は脆弱な状態を呈し、カマドの位置も不明瞭であった。遺物は搅乱内より多く出土し、覆土からは須恵器壺の破片が少量出土して



第42図 第7号住居跡遺物分布図



第43図 第8号住居跡



第44図 第8号住居跡遺物分布図

いる。

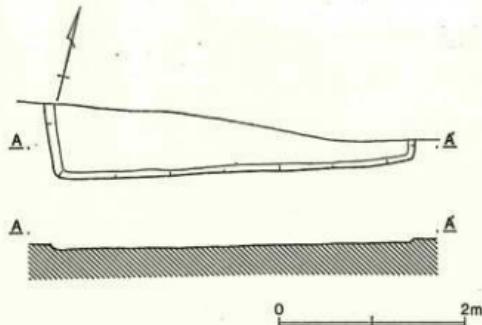
第8号住居跡（第43図）

C—5～D—5区にかけて位置する。南に第7号住居跡が隣接する。住居跡の北壁が削平されているが、南のコーナーとかろうじて西のコーナーが検出された。

プランは長方形を呈するものと思われ、短径3.5m、現存長径3.4mを測る。炭化物が多量に出土し、床面が焼けていることから、焼失家屋と思われる。住居跡の中央部東寄りに、焼けた落ち込みが検出された。炉と思われるが、正確なところは不明である。床面は脆弱な状態を呈している。

柱穴は5個検出され、P₁=46cm、P₂=7cm、P₃=12cm、P₄=32cm、P₅=27cmを測る。

遺物はハケ目の存在する台付甕の破片と、土玉が3点出土した。



第45図 第9号住居跡

第9号住居跡（第45図）

E—4～5区にかけて位置するが大半はE—4区に所在する。南壁付近が残るのみで、他は削平されている。プランは長方形を呈するものと思われ、現存する一辺が4mを測る。出土遺物はなく、柱穴も検出されなかった。ローム面への掘り込みは浅く、8cmを測る。

第10号住居跡（第46図）

F—4区に位置し、一部F—5区にかかる。住居跡北西のコーナーと南西のコーナーが擾乱を受けている。また、中央部も木の根による小さな擾乱を受け、床面は凹凸が著しくなっている。

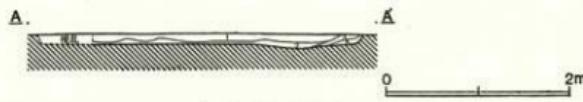
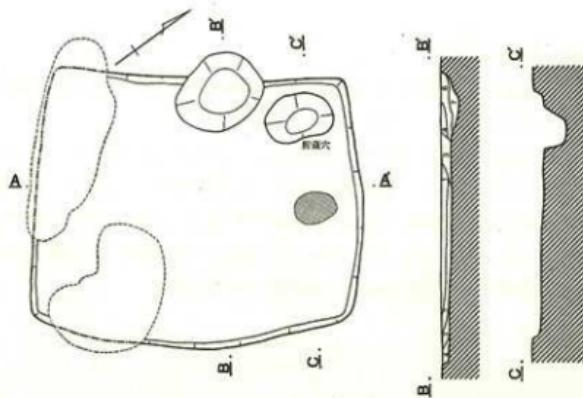
プランは長方形を呈し、長径3.6m、短径2.9mを測る。主軸はN—55°—Wを測る。

カマドは北壁中央部や西寄りに位置する。袖の一部が僅かに存在したが、他は崩壊していた。

カマドと東壁の間に貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は長径74cm、短径50cm、深さ21cmを測り、橢円形を呈する。

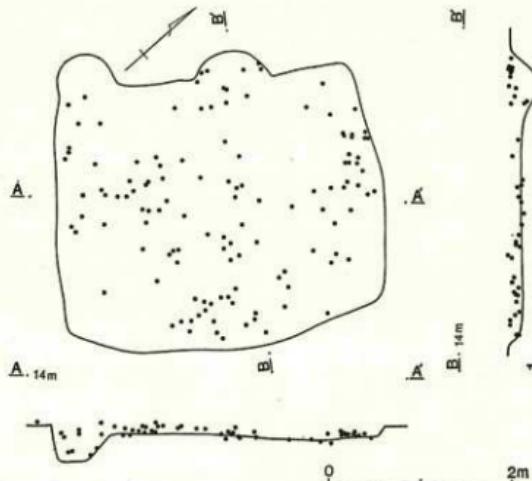
貯蔵穴の南の東壁付近には焼土がブロック状になって検出された。焼土塊の下の床面も焼けた状態を呈していた。

遺物は覆土中から須恵器の壺の破片、土師器の甕の破片等が少量出土している。図示したものは壺と台付甕の脚部と甕であるが、復元可能なものはこの3点のみであった。この内、第48図2、3は擾乱内より出土したものである。

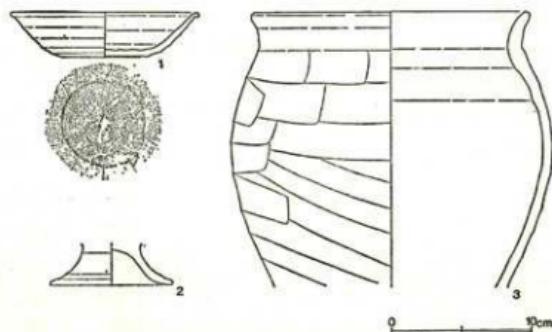


第46図 第10号住居跡

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1層 黒褐色土。 | 5層 黄褐色土、しまりあり。 |
| 2層 暗褐色土、炭化物、焼土粒子を含む。 | 6層 黒褐色土、焼土塊を混入する。 |
| 3層 褐色土。 | 7層 暗褐色土、焼土粒子を含む。 |
| 4層 黄褐色土、ロームブロックを含む。 | |



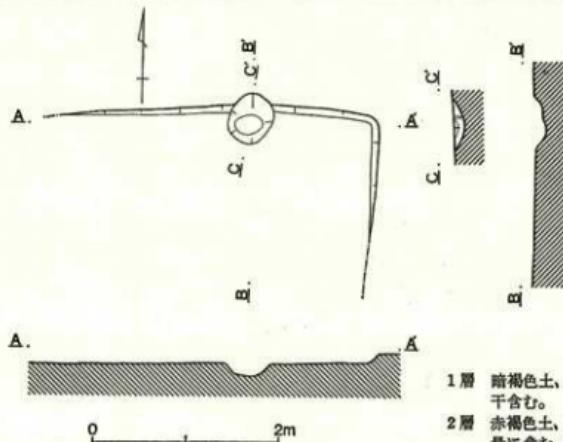
第47図 10号住居跡遺物分布図



第48図 第10号住居跡出土土器

第10号住居跡出土土器

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1口径 13.5 底径 6.2 器高 3.2	体部で張りを持ち、開く。口唇部は肥厚して外反する。口縁部歪み有。胎土細。焼成不良。	クロロ整形。底部回転糸切り後、外縁部回転ヘラケズリ。底部付近の体部にもヘラケズリ。	口縁部欠損。
台付甕	2底径 8.8 現在高 2.8	脚部が一部めぐり上がる。体部との境に凹線有。胎土細。焼成良。	内外面ともヨコナデが施される。	脚部現存。
甕	3口径 20.0 現在高 24.5	口縁部肥厚して、緩く外反する。肩部に張りを持ち、最大径が胴上半部に有。胎土細。焼成良。	口縁部内外面ともヨコナデが施される。胴部上半ヨコのヘラケズリ。胴部下半ナナメのヘラケズリ。	底部欠損。全体の1/2現存。

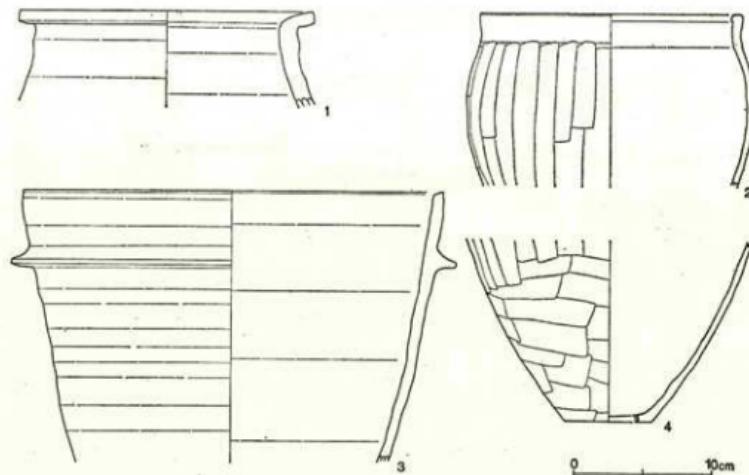


第49図 第11号住居跡

第11号住居跡（第49図）

H—2～3区にかけて位置する。南側において第3号住居跡と重複する。カマドと北壁及び東壁の一部が現存する。柱穴は検出されなかった。

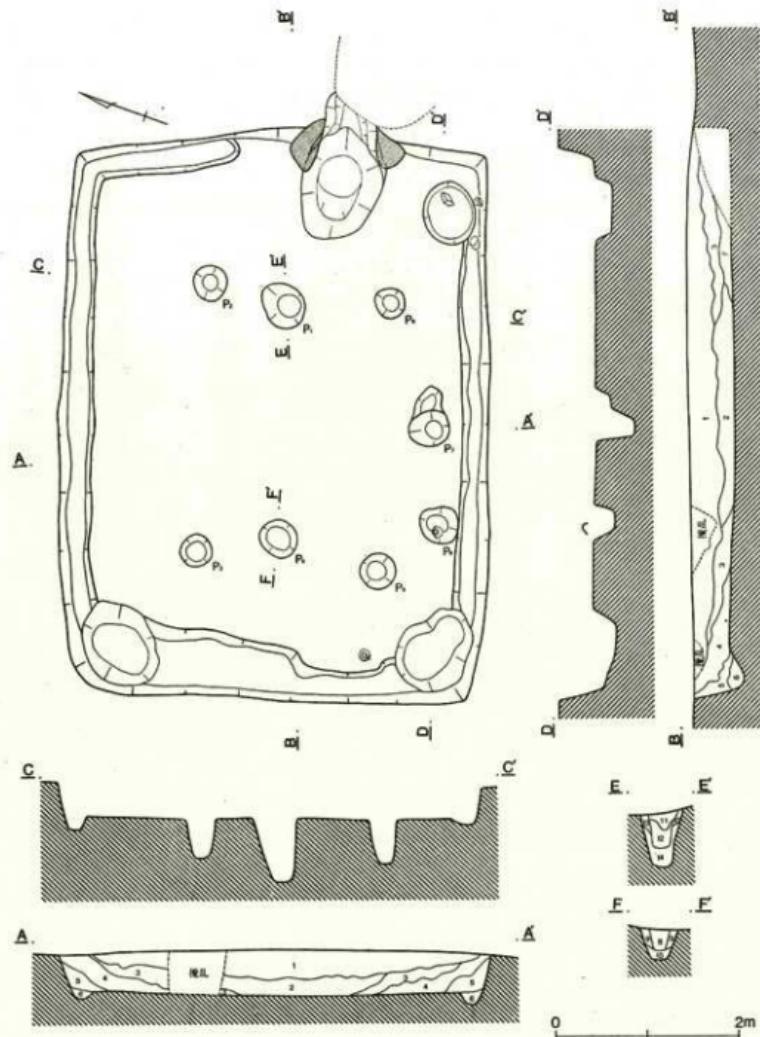
カマドは北壁中央部やや東寄りに位置し、焼土が僅かに堆積していた。住居跡はローム面に殆んど掘り込まれておらず、覆土は擾乱が進み、遺物は第3号住居跡出土遺物と混在していた。



第50図 第11号住居跡出土土器

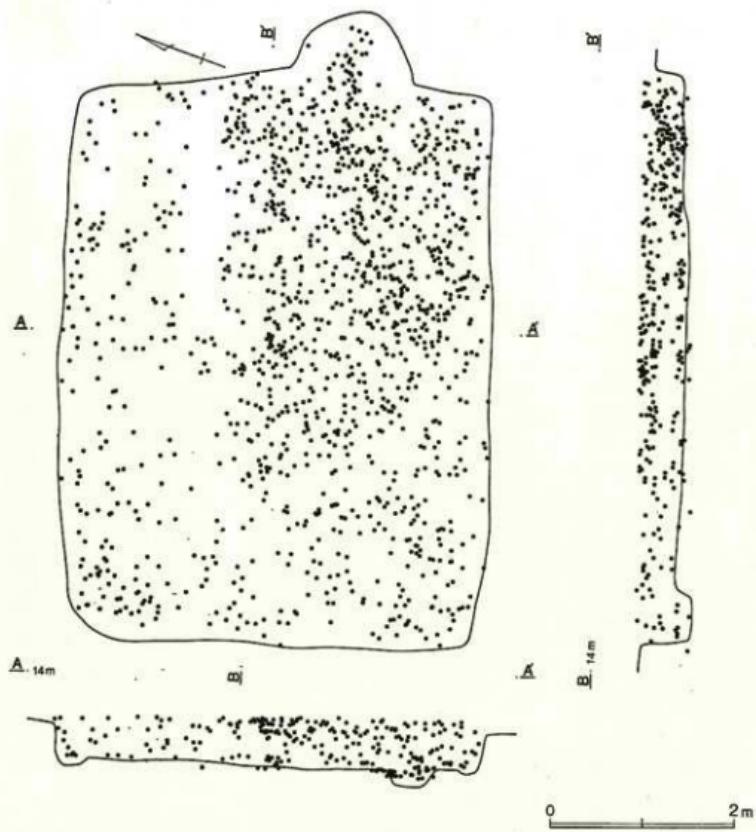
第11号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 21.3 現存高 8.5	口縁「T」状に屈折し、上面に平坦面を形成する。胴上半部は直線的に内傾する。灰白色。胎土細。焼成不良。	口縁部ヨコナデ。外面の上半部ヨコナデ。下半部ヨコのヘラケズリの後ナデを施す。	口縁部現存。 器面の調落が著しい。
甕	2	口径 19.0 現存高 15.8	口縁部外反気味に開き、口唇部肥厚して立つ。内面に稜有。胴部緩く張り、胴上半部に最大径有。暗赤褐色。胎土細。焼成良。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内面粗いケズリの後ナデを施す。	口縁部現存。 全体現存。
羽釜	3	口径 30.5 現存高 24.5	胴部直線的に開き、口縁部はやや内弯気味に立つ。口縁下 5 cm に鈎が付く。胎土細。焼成良。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部粗いヨコのヘラケズリの後、ナデを施す。内面輪積痕を残す。	胴下半部を欠損する。
甕	4	底径 6.2 現存高 16.1	胴下半部は緩く脹らみながら開く。胎土細。焼成良。	胴上半部はタテのヘラケズリ。下半部はヨコのヘラケズリ。	胴下半部を現存。



- 1層 黒褐色土、焼土粒子と炭化物を多く含む。
2層 暗黄褐色土、ローム粒子を多く含む。
3層 褐色土。
4層 暗褐色土。
5層 茶褐色土、ロームブロックを多く含む。
6層 暗褐色土、ローム粒子を多く含む。
7層 暗褐色土、焼土粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土、炭化物、焼土粒子を含む。
9層 茶暗褐色土、ロームブロックを多く含む。
10層 褐色土。
11層 褐色土。
12層 暗褐色土、炭化物を若干含む。
13層 褐色土。
14層 茶褐色土、ロームブロックを多く含む。

第51図 第12号住居跡



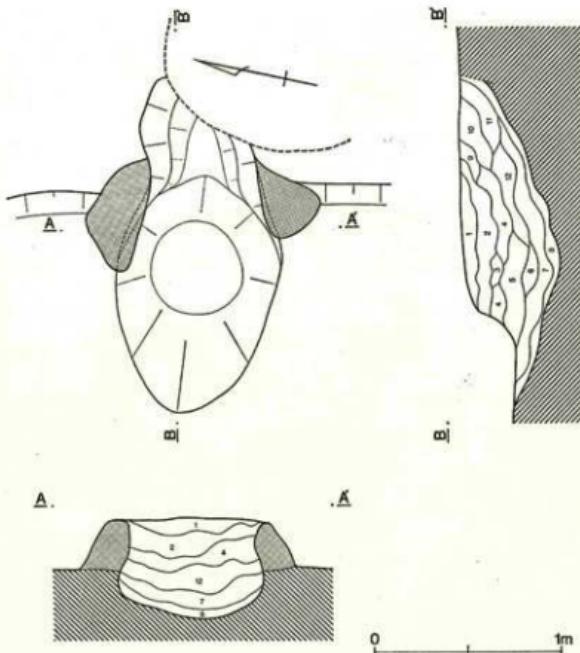
第52図 第12号住居跡遺物分布図

第12号住居跡（第51図）

H-2～I-2区にわたって位置する。主軸方位はN-71°-Eを測る。

プランは東西に長い長方形を呈し、長径 6.7 m、短径 5 m を測る。カマドの周辺部を除いて壁溝が巡り、西壁部では幅広くなっている。また北西コーナーと南西コーナーには、壁溝と一体となつた浅い皿状の落ち込みが確認された。床面は踏み固められており、遺存状態は良好であった。

柱穴は 8 個検出され、 $P_1 = 60\text{cm}$ 、 $P_2 = 44\text{cm}$ 、 $P_3 = 46\text{cm}$ 、 $P_4 = 93\text{cm}$ 、 $P_5 = 88\text{cm}$ 、 $P_6 = 20\text{cm}$ 、



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1層 黒褐色土。 | 7層 灰褐色土。 |
| 2層 褐色土。 | 8層 茶褐色土。ロームブロックを含む。 |
| 3層 灰褐色土。焼土塊を含む。 | 9層 棕褐色土。焼土ブロックを含む。 |
| 4層 暗褐色土。 | 10層 褐色土。焼土粒子を多量に含む。 |
| 5層 黒褐色土。炭化物を多く含む。 | 11層 灰褐色土。 |
| 6層 暗褐色土。 | 12層 暗茶褐色土。焼土ブロックを多く含む。 |

第53図 第12号住居跡カマド

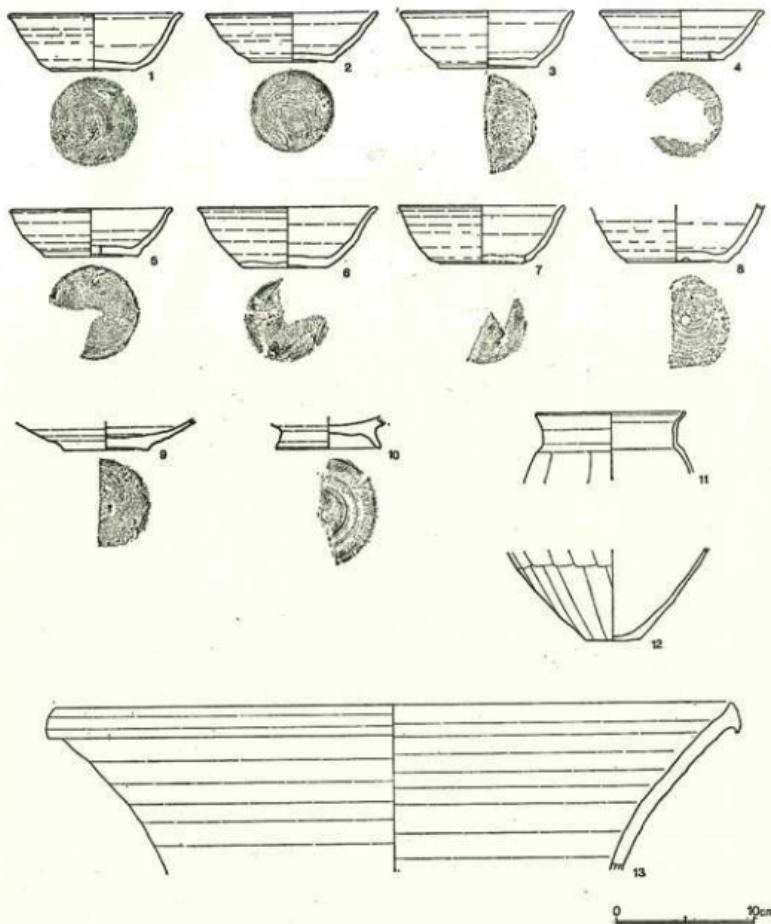
$P_1 = 16\text{cm}$, $P_2 = 43\text{cm}$ を測る。

カマドは東壁中央部やや南寄りに位置し、煙道の先端部が擾乱を受けている。上から押しつぶされた状態で検出され、両袖と焚口部の遺存状態は良好であった。カマドと南壁の間に皿状の窪みを呈する貯藏穴が存在し、内部から砾石と杯が出土している。

遺物は総数1381点である。カマド周辺を中心として、全体的にむらのない状態で出土した。遺物は須恵器の杯と甕、土師器の甕、砾石、羽口鉢型等が破片の状態で出土している。

第12号住居跡出土土器

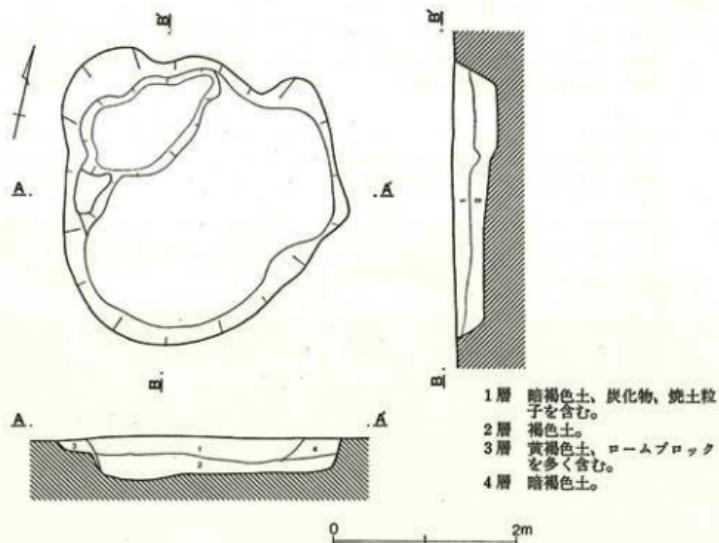
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 杯	1	口径 12.6 底径 6.3 器高 4.1	口唇部が若干肥厚して外反する。体部はゆるやかに開く。灰白色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転 糸切り。底部に二度の糸切痕を有す。	白封状物質を含む。完形。



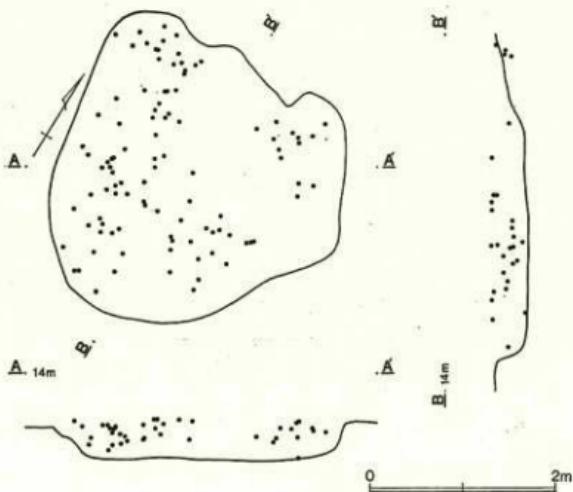
第54図 第12号住居跡出土土器

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	2 口径 12.5 底径 6.1 器高 3.5	やや浅い杯。体部にわずかに張りを持ち、口縁部へ直線的に開く。灰白色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。接合痕を残す。	白針状物質を含む。完形。
杯	3 口径 12.6 底径 6.8 器高 4.1	体部に張りを持ち、口縁部へ移行する部分に稜を持つ。底部が高台状に突出する。橙褐色。砂粒・小砾を多く含む。焼成不良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。	白針状物質を含む。全体の1/4現存。

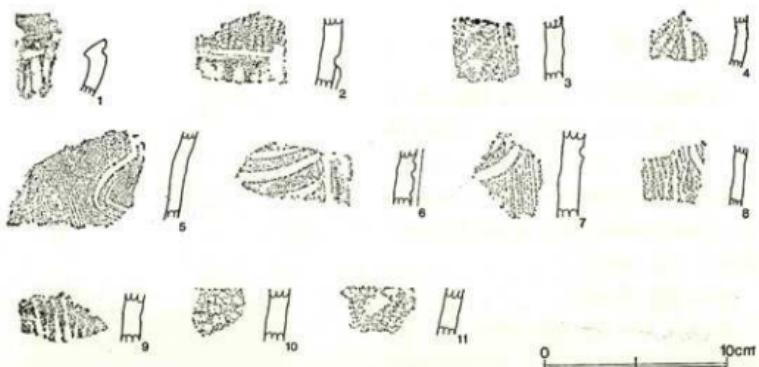
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	4	口径 12.0 底径 6.0 器高 3.6	やや浅い壺。口縁歪む。体部や張りを持ち、直線的に外傾する。青灰色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り、底部に二度の糸切痕を残す。	白針状物質を含む。全体の $\frac{1}{4}$ 現存。
壺	5	口径 12.8 底径 6.8 器高 3.5	体部に張りを持ちながら開く。口唇部外側へ肥厚する。底部は突出する。青灰色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。	白針状物質を含む。全体の $\frac{1}{4}$ 現存。
壺	6	口径 12.7 底径 6.2 器高 4.4	体部にやや張りを持ち外傾し、肥厚する口唇部が外反する。器肉は厚目。褐色。胎土細。焼成不良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。底部に二枚の糸切痕を有す。	白針状物質を含む。全体の $\frac{1}{4}$ 現存。
壺	7	口径 12.2 底径 6.2 器高 4.2	体部は直線的に開き、口縁部は上に向ぐが並んでいる。青灰色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。輪横痕を有す。	白針状物質を含む。全体の $\frac{1}{4}$ 現存。
壺	8	底径 7.4 現存高 4.5	やや大型の壺。器肉も厚い。底部に焼成前の穿孔有り。穴は貫通しない。灰白色。胎土細。焼成良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。	白針状物質を含む。全体の $\frac{1}{4}$ 現存。
皿	9	底径 6.2 現存高 1.9	底部が突出し、体部がやや内灣気味に大きく開く。黄褐色。胎土は小確を多く含む。焼成不良。	ロクロ整形。右回転。底部回転糸切り。	底部 $\frac{1}{4}$ 現存。
高台付壺	10	高台径 7.4	台取付部に棱を持つ。台部は肉厚で、しっかりと取付られる。茶褐色。胎土細。焼成不良。	ロクロ整形。右回転。体部の底部は回転糸切り。台部はナデが施される。	底部 $\frac{1}{4}$ 現存。
土師器台付壺	11	口径 10.8 現存高 4.8	口縁部は「コ」の字状を呈し、立つ。口唇部が若干肥厚して上に向く。赤褐色。胎土細。焼成良。	口縁部内外面ロコナデ。胴部ロコのヘラケズリ。	口縁部 $\frac{1}{4}$ 現存
甕	12	底径 2.4 現存高 6.5	底部はケズリ出されているため平坦面ではない。胴下半部は内湾気味に立ち上る。赤褐色。胎土細。焼成良。外面にスス付着。	胴下半部はタテのヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	胴下半部 $\frac{1}{4}$ 現存。
須恵器甕	13	口径 48.9 現存高12.1	頸部は外反して開く。口縁端部は上下に肥厚する。黒褐色。胎土細。焼成良。	口縁部・頸部ともロコナデ。口縁部と頸部の一部に自然釉がかかる。	口縁部 $\frac{1}{4}$ 現存。



第55図 第13号住居跡



第56図 第13号住居跡遺物分布図



第57図 第13号住居跡出土土器

第13号住居跡（第57図）

1～2区にわたって位置する。東には第5号住居跡が、北西には第12号住居跡が位置する。不整梢円形を呈し、長径3.2m、短径2.9mを測る。北壁には浅い落ち込みが検出された。

柱穴がなく、炉も存在しないため、一般的な住居跡としては認められないが、土壤としては大きすぎる。遺物も出土しているため、何らか居住に関連ある施設として捉えた。一般的には小窓穴遺構と呼ばれるが、その性格も不明瞭であるため、ここではとりあえず住居跡として扱った。

(金子 直行)

第13号住居跡出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1 3	I b	1は口唇部が内削状を呈し、内彎する。口縁部が沈線で区画され、同種の沈線を充填する。2は地文に羅文R Lが施文され、縦帯の懸垂文を持つ。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は1が橙褐色、2が赤褐色を呈する。	
3 3	I c	平行沈線の懸垂文を持つものである。4は沈線間が磨消される。地文は3が羅文R L、4が羅文L Rである。	胎土は緻密で、4は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は3が赤褐色、4が橙褐色を呈する。	
5 3	II	2本の蛇行沈線が垂下する。地文は条線である。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。	
7 3	II	連弧文が描出されるものである。6は縦帯が垂下する。地文は7が条線で、8が撚糸Lである。	胎土はいずれも緻密で、焼成は良好である。色調は6が赤褐色、7が灰褐色、8が橙褐色を呈す。	
9～11	3 VI	地文のみ認められるものである。9が撚糸L、10が複節L R L、11が複節R L Rである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調はいずれも赤褐色を呈する。	

2 土壌と土器

土壌は総数 105 基検出された。調査区内に連続として分布するが、発掘時には二百余基を調査した。その内、明らかに木の根等による擾乱と思われるものを排除した結果、105 基となつた。土層は色調別に分類し、通し番号を付け、最後に一括して表に示した。

第1号土壌（第58図）

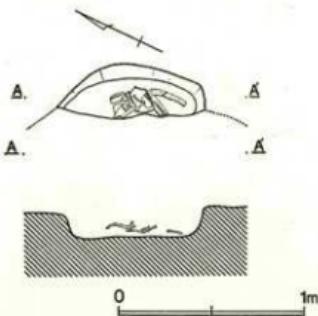
D—5 区、第7号住居跡内に位置する。土壌の大半が擾乱を受けているが、かろうじて複元可能な土器片が出土している。（第59図 1～3）

1は頭部無文帯が外反し、肩に張を持つ小形の土器である。屈曲部は半截竹管状工具による4本の沈線で区画され、中央部に刻目が施される。胴は2本単位の平行沈線懸垂文で区画され、区内に半弧状のモチーフが描かれる。半弧状モチーフからは2本単位の沈線懸垂文が1本、又は2本垂下する。地文は0段多条の縄文RLが施文される。推定口径 12.5cm、現存高 13cm を測り、底部を欠損するが完存率は約40%である。2は口縁部が朝顔状に開き、無文帯となる深鉢である。胴部は縄文LRのみが、底部付近まで施文される。

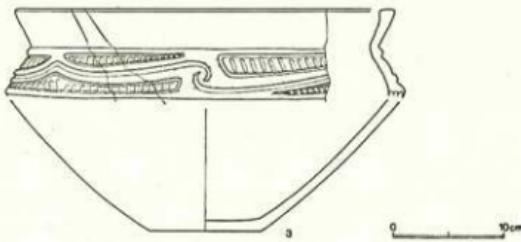
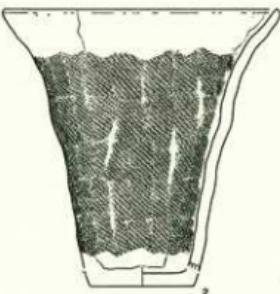
底部を欠損するが、完存率は約30%である。3は口縁部と胴部が「く」の字状に屈曲する浅鉢である。胴部文様帶には、低隆帯と沈線で構成される渦巻文のモチーフが描出される。渦巻文外は沈線で区画され、押し引き状の沈線が充填される。胴下半部を欠損するが、口縁は約半周する。

第2号土壌（第60図）

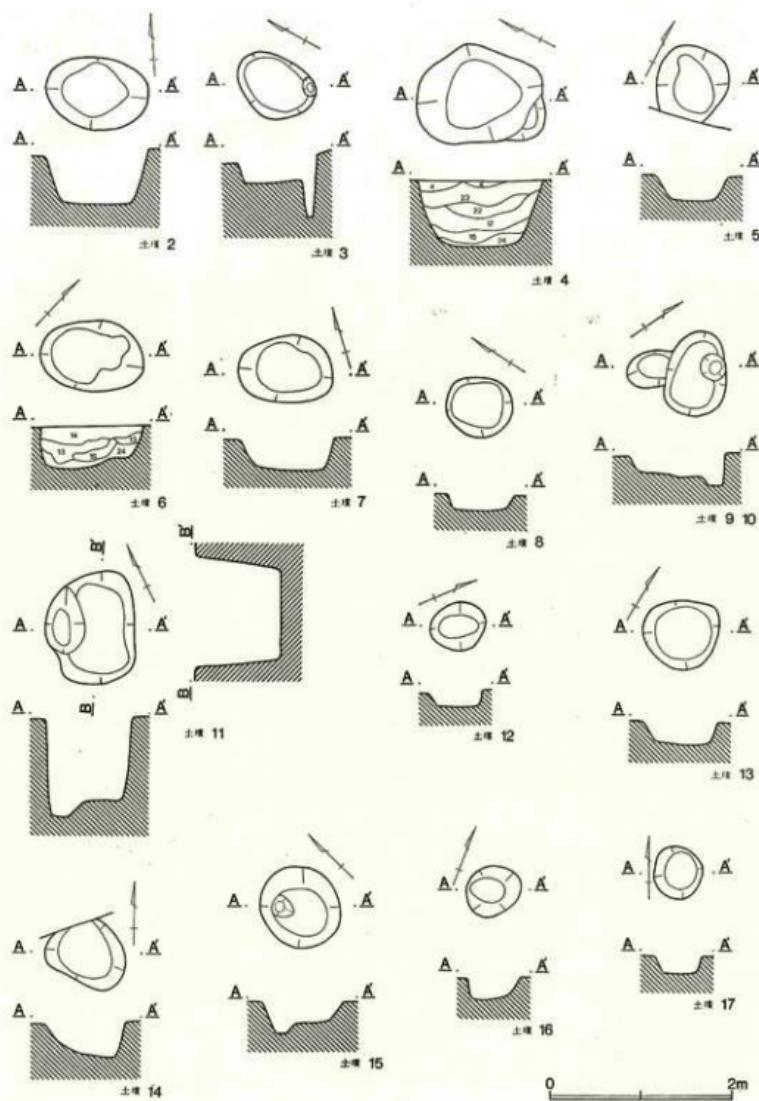
B—6 区、N—82°—W
長軸 1.13 × 短軸 0.78m、深さ 0.62m の不整梢円形を呈す。調査区西端に位置し、東から西へ傾斜する斜面上



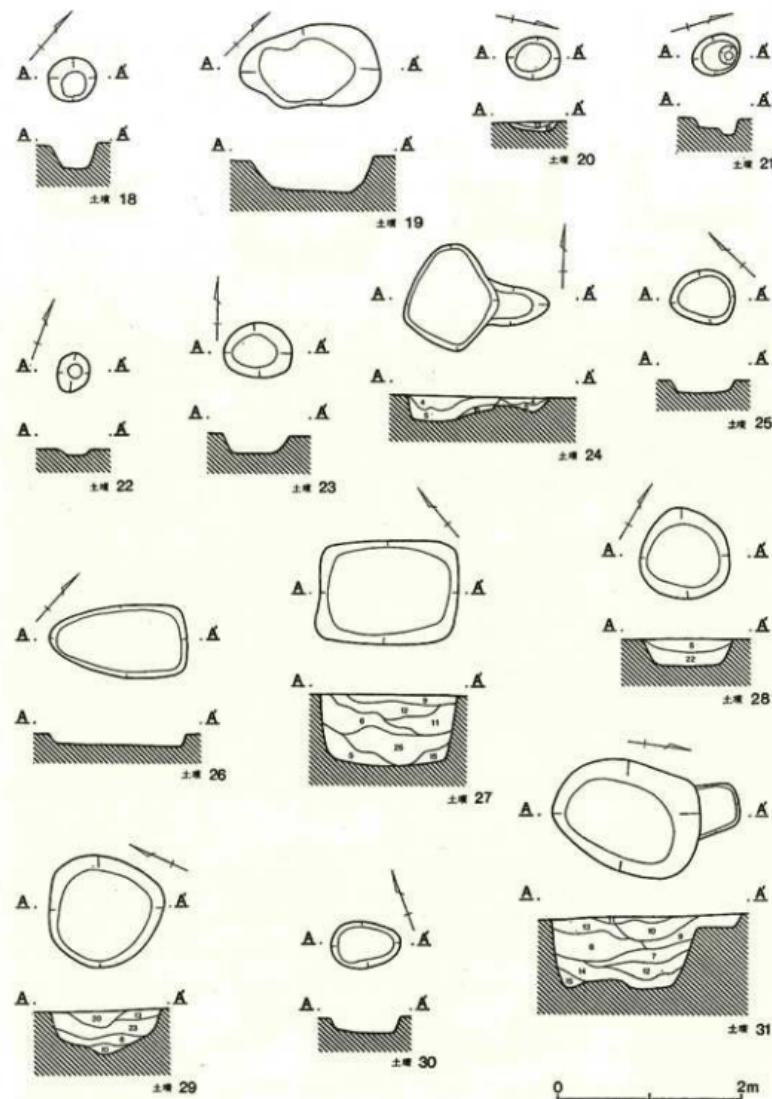
第58図 第1号土壌



第59図 第1号土壌出土土器



第60図 土 壤 (1)



第61図 土 壤 (2)

に構築されている。底部は平坦で軟らかい。

第3号土壙（第60図）

B—6区 N—2°—W 長軸0.90×短軸0.67m、深さ0.28m、ピット0.70mの橢円形を呈す。底部は平坦で、南側壁にピット状の掘り込みを有す。

第4号土壙（第60図）

B—6区 N—36°—W 長軸1.39×短軸1.08m、深さ0.72mの不整橢円形を呈す。南側にテラスを有し、境内に落ち込む。底部は平坦で、硬化している。土層の堆積状態より、27号土壙と同種のものと思われる。

第5号土壙（第60図）

C—6区 N—14°—W 長軸(0.80)×短軸0.79m、深さ0.28mの不整円形を呈す。底部は凹凸が見られるが、硬化している。

第6号土壙（第60図）

C—6区 N—64°—E 長軸1.16×短軸0.76m、深さ0.46mの橢円形を呈す。底部は凹凸があり、硬化している。南西側が低く、北東側に段状に浅くなり、立ち上っている。

第7号土壙（第60図）

C—5区 N—67°—W 長軸1.05×短軸0.74m、深さ0.36mの橢円形を呈す。底部は平坦で、北西側に緩く立ち上がる。

第8号土壙（第60図）

C—5区 N—31°—W 長軸0.73×短軸0.66m、深さ0.18mの円形を呈す。底部は南西側に高くなる。底部付近から菱形土器の小破片が出土した。

第9号土壙（第60図）

C—5区 N—29°—E 長軸(0.40)×短軸0.40m、深さ0.20mで橢円形を呈すと思われる。底部は平坦で、軟弱である。全貌は10号土壙に切られ不明である。

第10号土壙（第60図）

C—5区 N—44°—W 長軸0.93×短軸0.66m、深さ0.18m、ピット0.35mの橢円形を呈す。底部の北東部にピット状の掘り込みを有す。

第11号土壙（第60図）

C—5区 N—33°—E 長軸1.25×短軸0.98m、ピット1.08mの不整橢円形を呈す。底部西側に浅いピット状の掘り込みを有す。底部は僅かに硬化しており、ほぼ垂直に立ち上がる。

第12号土壙（第60図）

C—5区 N—18°—E 長軸0.42×短軸0.34m、深さ0.18mの円形を呈す。底部は平坦で、軟弱である。

第13号土壙（第60図）

C—5区 N—70°—E 長軸0.83×短軸0.74m、深さ0.24mの円形を呈す。底部は舟底形に若干凹み、底面は硬化している。

第14号土壙（第60図）

C—5 区 N—63°—W 長軸0.90×短軸0.69m、深さ0.18mの不整橿円形を呈す。底部は西側に浅くなり、緩やかに立ち上がる。

第15号土壌（第60図）

C—5 区 N—31°—E 長軸0.63×短軸0.54m、深さ0.21m、ピット0.34mの円形を呈す。底部北側にピット状の掘り込みを有し、底面は平坦である。覆土より甕形土器破片、鉄滓等が出土した。

第16号土壌（第60図）

C—5 区 N—31°—E 長軸0.63×短軸0.54m、深さ0.25mの円形を呈す。底部は東側に浅くなり、緩やかに立ち上がる。

第17号土壌（第60図）

C—5 区 N—90°—E 長軸0.56×短軸0.54m、深さ0.25mの円形を呈す。底部は平坦で、軟弱である。

第18号土壌（第60図）

D—5 区 N—51°—E 長軸0.53×短軸0.46m、深さ0.27m円形を呈す。底部は平坦である。

第19号土壌（第60図）

D—5 区 N—41°—E 長軸1.53×短軸0.87m、深さ0.39mの橿円形を呈す。底部は平坦で、南西側に浅くなり立ち上がる。

第20号土壌（第61図）

D—5 区 N—20°—W 長軸0.57×短軸0.46m、深さ0.11mの円形を呈す。底部は平坦で、南側に浅くなり、緩やかに立ち上がる。

第21号土壌（第61図）

D—5 区 N—12°—W 長軸0.52×短軸0.43m、深さ0.11m、ピット0.18mの円形を呈す。底部は平坦で、北側にピット状の掘り込みを有す。

第22号土壌（第61図）

D—5 区 N—15°—E 長軸0.42×短軸0.37m、深さ0.06mの円形を呈す。掘り込みは浅く、底部も軟弱である。

第23号土壌（第61図）

D—5 区 N—86°—E 長軸0.73×短軸0.59m、深さ0.22mの橿円形を呈す。底部は平坦で、硬化している。

第24号土壌（第61図）

E—5 区 N—90°—E 長軸(0.57)×短軸0.45m、深さ0.16mのものと、N—4°—W 長軸1.16×短軸1.03m、深さ0.28mの二者があり、後者が前者を切っている。前者は橿円形、後者は不整円形を呈している。

旧土壌は、東側が部分的に深く、凹凸になっている。新土壌は東側へ浅くなり、緩やかに立ち上がる。また、西側の一部分が硬化している。

第25号土壌（第61図）

E—5 区 N—43°—W 長軸0.68×短軸0.59m、深さ0.14mの不整橿円形を呈す。底部はゆるい

舟底形を成し、軟弱である。

第26号土壙（第61図）

E—5 区 N—48°—E 長軸1.48×短軸0.79m、深さ0.14mで北東側が直線的な角形状の橢円形を呈す。北東側の底部は加熱のためにボロボロしている。

第27号土壙（第61図）

E—5 区 N—50°—W 長軸1.51×短軸1.13m、深さ0.79mの隅丸方形を呈す。底部は舟底形を成す。図示した縄文土器（第68図—7）の他、覆土各層より、土師器片、甕形土器片、多量の鉄滓が出土した。

第28号土壙（第61図）

E—4 区 N—40°—W 長軸1.02×短軸0.98m、深さ0.30mの円形を呈す。底部は平坦で、部分的に硬化している。

第29号土壙（第61図）

E—4 区 N—40°—W 長軸1.30×短軸1.23m、深さ0.49mの円形を呈す。擂鉢状の底部を成す。

第30号土壙（第61図）

E—5 区 N—68°—W 長軸0.77×短軸0.50m、深さ0.18mの橢円形を呈す。底部は北西方向に浅くなり、立ち上がる。

第31号土壙（第61図）

E—5 区 N—14°—W 長軸(0.44)×短軸(0.59)m、深さ0.13mのものと、N—14°—E 長軸1.62×短軸1.15m、深さ0.78mの二者がある。旧土壙は、隅丸方形、新土壙は橢円形を呈す。前者の底部は平坦で、軟弱である。後者の底部は凹凸がみられ、硬化している。形状、土層の堆積状態からみて27号土壙と同種と思われる。

第32号土壙（第62図）

F—5 区 N—69°—W 長軸1.13×短軸0.71m、深さ0.32mの橢円形を呈す。底部は平坦で、北西側に浅くなる。

第33号土壙（第62図）

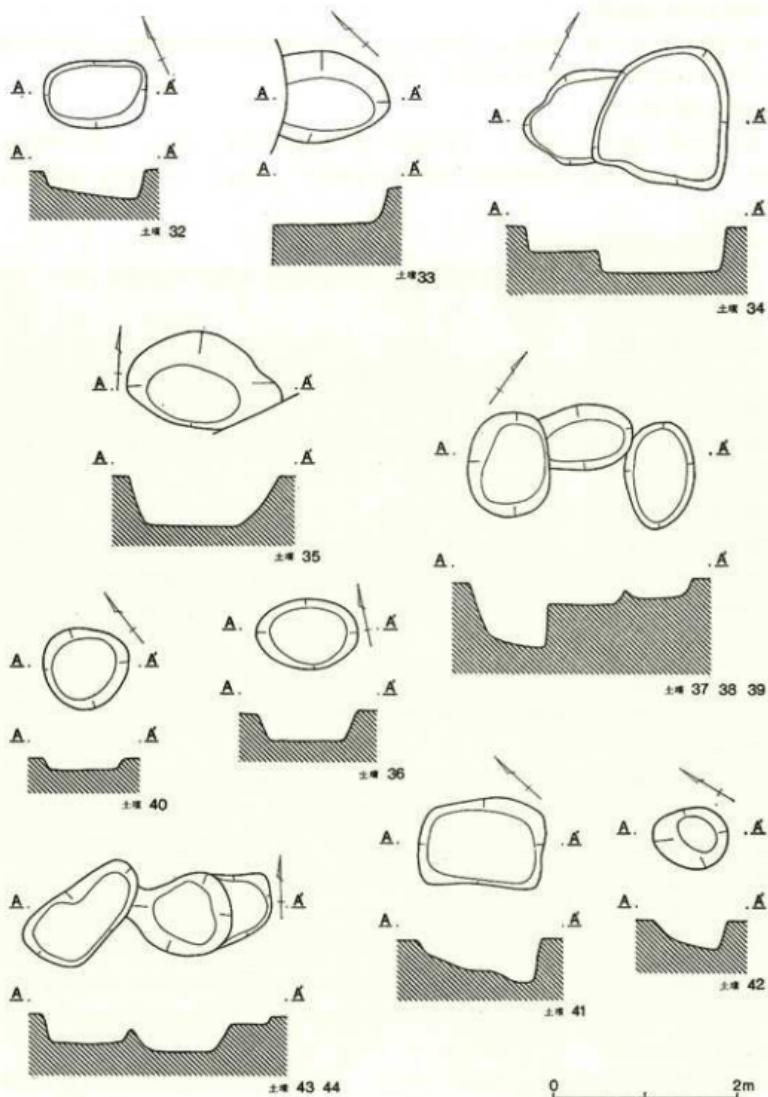
F—5 区 N—40°—W 長軸(1.11)×短軸1.00m、深さ0.45mの橢円形を呈す。北西側は松の木の抜根により壊れている。底部はゆるい舟底形を成す。出土した遺物は縄文時代中期のもの（第68図—2・24、第69図—45・56）と、後期のもの（第69図—56）がある。

第34号土壙（第62図）

F—5 区 N—57°—E 長軸(0.80)×短軸(1.00m)、深さ0.27mのものと、N—26°—E 長軸1.71×短軸1.61m、深さ0.48mの二者がある。前者は、橢円形を呈すと思われる。後者は、辺が少し角張る不整円形を呈す。両者とも底部は平坦である。新土壙より縄文時代後期の土器片（第69図—55）が出土した。

第35号土壙（第62図）

F—5 区 N—88°—E 長軸1.69×短軸1.04m、深さ0.55mの橢円形を呈す。底部は平坦で、中心が南側によっている。出土遺物は縄文時代早期の土器（第69図—53・54）である。



第62図 土 墓 (3)

第36号土壌（第62図）

F—4 区 N—80°—E 長軸1.12×短軸0.74m、深さ0.32mの橢円形を呈す。底部は平坦である。

第37号土壌（第62図）

F—4 区 N—33°—W 長軸1.11×短軸0.88m、深さ0.72mの橢円形を呈す。底部は西側に浅くなり、垂直に近い状態で立ち上がる。

第38号土壌（第62図）

F—4 区 N—50°—E 長軸(0.97)×短軸0.71mの橢円形を呈すものと思われる。37号土壌に南西部を切られている。覆土より繩文土器（第68図—4・19）が出土した。

第39号土壌（第62図）

F—4 区 N—37°—W 長軸1.13×短軸0.77m、深さ0.20mの橢円形を呈す。底部は平坦で、部分的に凹凸がみられる。

第40号土壌（第62図）

F—4 区 N—82°—W 長軸0.95×短軸0.91m、深さ0.31mの円形を呈す。底部は凹凸があり、軟弱である。

第41号土壌（第62図）

F—4 区 N—40°—W 長軸1.35×短軸0.98m、深さ0.46mの隅丸方形を呈す。底部は凹凸があり、北西側に浅くなり、緩やかに立ち上がっている。

第42号土壌（第62図）

F—4 区 N—41°—W 長軸0.82×短軸0.68m、深さ0.32mの不整円形を呈す。底部は軟弱で、北西側に浅く立ち上がる。

第43号土壌（第62図）

F—4 区 N—45°—E 長軸1.36×短軸0.74m、深さ0.30mの不整橢円形を呈す。底部は平坦である。土壌内より口縁部破片（第69図—33）が出土している。

第44号土壌（第62図）

F—4 区 N—74°—W 長軸1.11×短軸0.93m、深さ0.40mのものと、N—75°—E 長軸(0.45)×(0.76)m、深さ0.08mの二者が存在する。前者は円形を呈し、後者は前者に大半が壊されて不明である。新土壌より胴部破片（第69図—37）が出土した。

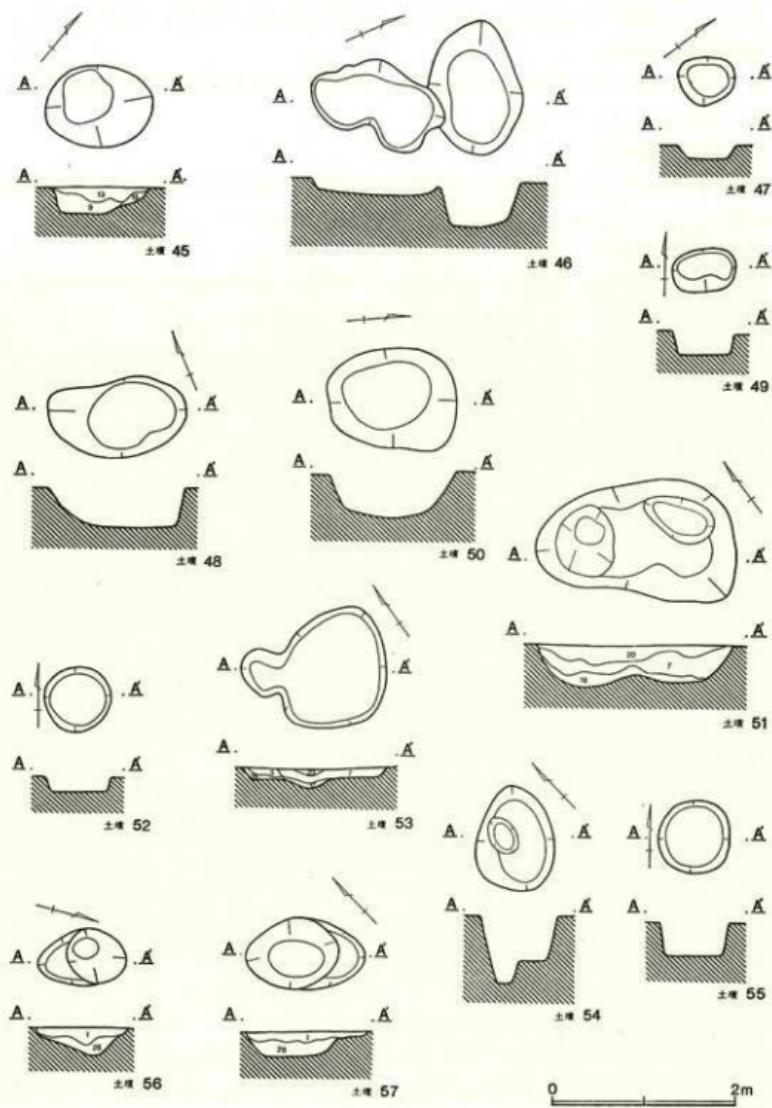
第45号土壌（第63図）

F—4 区 N—55°—E 長軸1.14×短軸0.88m、深さ0.30mの橢円形を呈す。南西部に中心を持ち底部は平坦である。北東部に浅くなり、緩やかに立ち上がる。

第46号土壌（第63図）

F—3 区 N—74°—W 長軸1.23×短軸0.98m、深さ0.50mのものと、N—34°—E 長軸1.49×短軸0.78m、深さ0.17mの二者がある。前者は橢円形を呈し、底面は凹凸があり硬化している。後者は不整橢円形を呈し、底面は軟弱である。掘り込みの深い土壌から破片が2点（第69図—44・51）出土した。

第47号土壌（第63図）



第63圖 土 壇 (4)

F—3区 N—28°—E 長軸0.60×短軸0.52m、深さ0.14mの円形を呈す。底部は凹凸があり、硬化している。底部付近から口縁部破片（第69図—43）が出土した。

第48号土壙（第63図）

F—3区 N—78°—W 長軸1.50×短軸0.42m、深さ0.42mの不整橢円形を呈す。北西側に浅く立ち上がる。覆土中層部から胸部破片（第68図—17）が出土した。

第49号土壙（第63図）

F—3区 N—80°—E 長軸0.68×短軸0.48m、深さ0.25mの橢円形を呈す。底部は軟弱で、凹凸がある。

第50号土壙（第63図）

F—2区 N—18°—E 長軸1.48×短軸1.07m、深さ0.50mの不整橢円形を呈す。底部は舟底形で丸味を持ち、軟弱である。口縁部破片（第69図—34）が出土した。

第51号土壙（第63図）

F—2区 N—50°—W 長軸2.18×短軸1.31m、深さ0.44mの橢円形を呈す。底部は北西側と南東側にそれぞれ深い面をもつ。上から2層目より炭化物が少量出土した。

第52号土壙（第63図）

E—1区 N—80°—E 長軸0.72×短軸0.69m、深さ0.16mの円形を呈す。底部は平坦で硬化している。覆土に焼土粒子を若干含む。

第53号土壙（第63図）

E—1区 N—30°—E 長軸(0.52)×短軸0.49m、深さ0.12mのものと、N—60°—E 長軸1.42×短軸1.16m、深さ0.20mの新旧の二者が存在する。前者は、不整円形を呈すと思われる。後者は橢円形を呈し、底部は平坦で、北西側の一部が僅かに凹んでいる。

第54号土壙（第63図）

F—2区 N—32°—W 長軸1.17×短軸0.89m、深さ0.49m、ピット0.54mの橢円形を呈す。底部は平坦で、北西方向にピット状の掘り込みを有する。

第55号土壙（第63図）

F—2区 N—43°—W 長軸0.82×短軸0.81m、深さ0.37mの円形を呈す。底部は平坦で、硬化している。壇内より口縁部破片（第69図—41）が出土した。

第56号土壙（第63図）

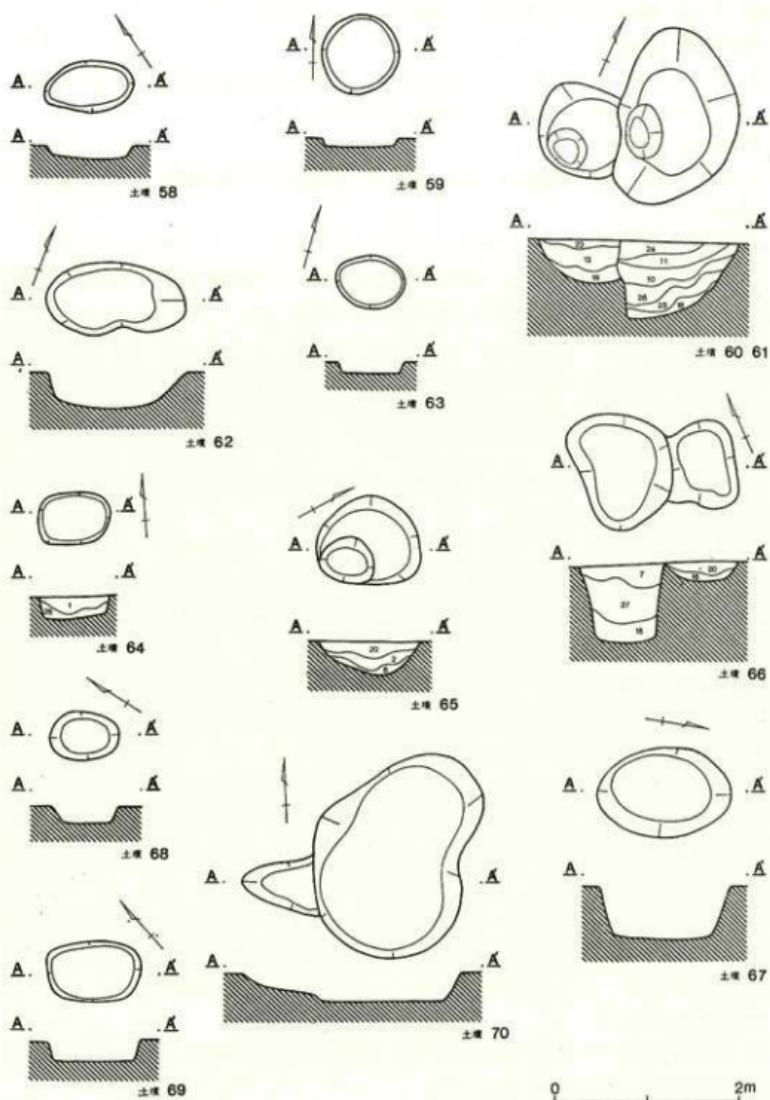
F—1区 N—15°—W 長軸0.96×短軸0.61m、深さ0.30mの橢円形を呈す。南側に浅く立ち上がる。上から1層めに焼土粒子、炭化物が少量含まれる。壇内より口縁部破片（第69図—39）が出土した。

第57号土壙（第63図）

F—1区 N—45°—W 長軸1.29×短軸0.78m、深さ0.26mの橢円形を呈す。東側に一段テラスを有す。底部は緩やかな舟底形を呈している。

第58号土壙（第64図）

F—1区 N—65°—W 長軸0.94×短軸0.55m、深さ0.14mの橢円形を呈す。底部は船底形を成



0 1 2m

第64図 土 墓 (5)

し、緩やかに立ち上がっている。

第59号土壤（第64図）

F—1区 N—16°—E 長軸0.87×短軸0.82m、深さ0.09mの円形を呈す。底部は平坦である。

第60号土壤（第64図）

F—1区 N—74°—E 長軸(0.90)×短軸0.94m、深さ0.46mの梢円形を呈すと思われる。第61号土壤に東側を切られる。底部は舟底形を成し、立ち上がる。壇内より胴部破片（第68図—15・22、第69図—35）が出土している。

第61号土壤（第64図）

F—1区 N—12°—W 長軸1.94×短軸1.30m、深さ0.83mの梢円形を呈す。西側は垂直に近い角度で立ち上がる。

第62号土壤（第64図）

F—1区 N—70°—E 長軸1.30×短軸0.76m、深さ0.40mの不整梢円形を呈す。底部は舟底形を呈し、東側に浅くなる。壇内より土器片2点（第68図—25、第69図—29）が出土した。

第63号土壤（第64図）

F—1区 N—90°—E 長軸0.76×短軸0.56m、深さ0.24mの梢円形を呈す。底部は平坦で、比較的硬い。

第64号土壤（第64図）

G—1区 N—28°—E 長軸0.74×短軸0.57m、深さ0.12mの隅丸方形を呈す。底部は平坦で、硬化している。覆土第1層に、炭化物、焼土粒子を少量含んでいる。壇内より口縁部破片（第68図—1）が出土した。

第65号土壤（第64図）

G—1区 N—28°—E 長軸1.13×短軸0.95m、深さ0.38mの梢円形を呈す。底部は擂鉢状を呈し、立ち上がる。

第66号土壤（第64図）

G—2区 N—8°—E 長軸0.98×短軸0.71m、深さ0.20mのものと、N—13°—E 長軸1.28×短軸1.00m深さ0.84mの2個の土壤が併存している。2者とも不整円形を呈す。両者の底部は舟底形を呈し、後者の底部は硬化している。掘り込みの深い土壤から口縁部破片（第68図—6）が出土した。覆土第1層には、少量の炭化物が混入している。

第67号土壤（第64図）

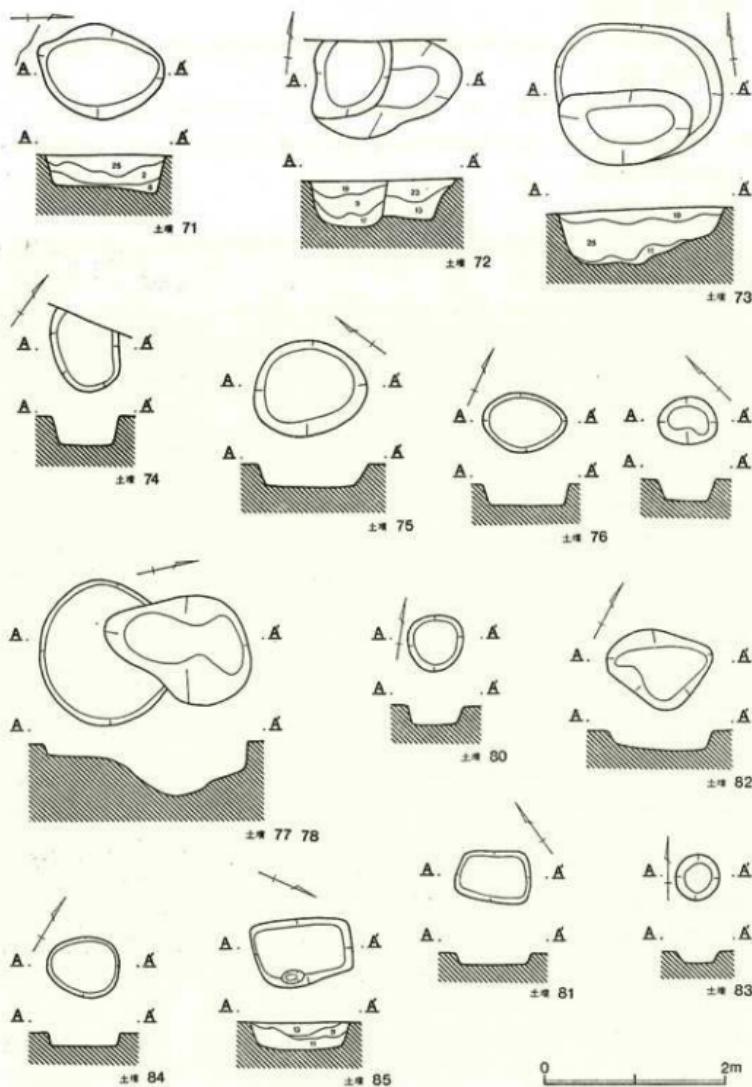
G—2区 N—15°—W 長軸1.43×短軸0.98m、深さ0.58mの梢円形を呈す。底部は、浅い舟底形を呈す。

第68号土壤（第64図）

G—2区 N—35°—W 長軸0.74×短軸0.56m、深さ0.18mの梢円形を呈す。底部は平坦で、硬化している。

第69号土壤（第64図）

G—2区 N—48°—W 長軸1.01×短軸0.66m、深さ0.24mの梢円形を呈す。底部は平坦で、軟



第65図 土 壤 (6)

弱である。

第70号土壤 (第64図)

H—2 区 N—87°—W 長軸 (0.79) × 短軸 (0.66) m、深さ (0.24) m のものと、N—32°—E 長軸 2.32 × 短軸 1.80 m、深さ 0.30 の新旧 2 者がある。前者は橢円形を呈すものと思われる。底部は舟底形を成し、緩やかに立ち上がる。後者は不整橢円形を呈す。底部は凹凸があり、軟弱である。掘り込みの深い土壤より土器片 (第69図—38・48) が出土した。

第71号土壤 (第65図)

H—1 区 N—5°—E 長軸 1.38 × 短軸 1.02 m、深さ 0.42 m の橢円形を呈す。底部は中央が若干高くなる。覆土第 2 層には、多量の炭化物が混入している。

第72号土壤 (第65図)

H—1 区 N—72°—W 長軸 (1.82) × 短軸 0.90 m、深さ 0.44 m のものと、N—5°—E 長軸 (0.84) × 短軸 0.85 m、深さ 0.51 m の新旧 2 者がある。北側は、抜根により壊されている。前者は不整円形、後者は橢円形を呈すと思われる。底部は前者が凹凸があり軟弱、後者は舟底形で比較的の硬化している。

第73号土壤 (第65図)

H—1 区 N—72°—W 長軸 1.88 × 短軸 1.56 m、深さ 0.59 m の橢円形を呈す。底部西側に大きな落ち込みを持つ。底部は凹凸があり軟弱である。覆土第 1 層中には、少量の炭化物を含む。境内より胴部破片 (第68図—16) が出土した。

第74号土壤 (第65図)

H—0 区 N—35°—W 長軸 (0.76) × 短軸 0.77 m、深さ 0.30 m で橢円形を呈すと思われる。底部は平坦で、比較的の硬化している。

第75号土壤 (第65図)

I—0 区 N—55°—W 長軸 1.28 × 短軸 1.04 m、深さ 0.26 m の橢円形を呈す。底部は平坦である。

第76号土壤 (第65図)

H—1 区 N—65°—E 長軸 0.92 × 短軸 0.66 m、深さ 0.23 m の橢円形を呈す。底部は平坦で、硬化している。

第77号土壤 (第65図)

H—1 区 N—26°—E 長軸 1.66 × 短軸 1.17 m、深さ 0.60 m の不整橢円形を呈す。底部は擂鉢形を呈し、凹凸があり軟弱である。境内より胴部破片 (第68図—9・10・20・21) が出土した。

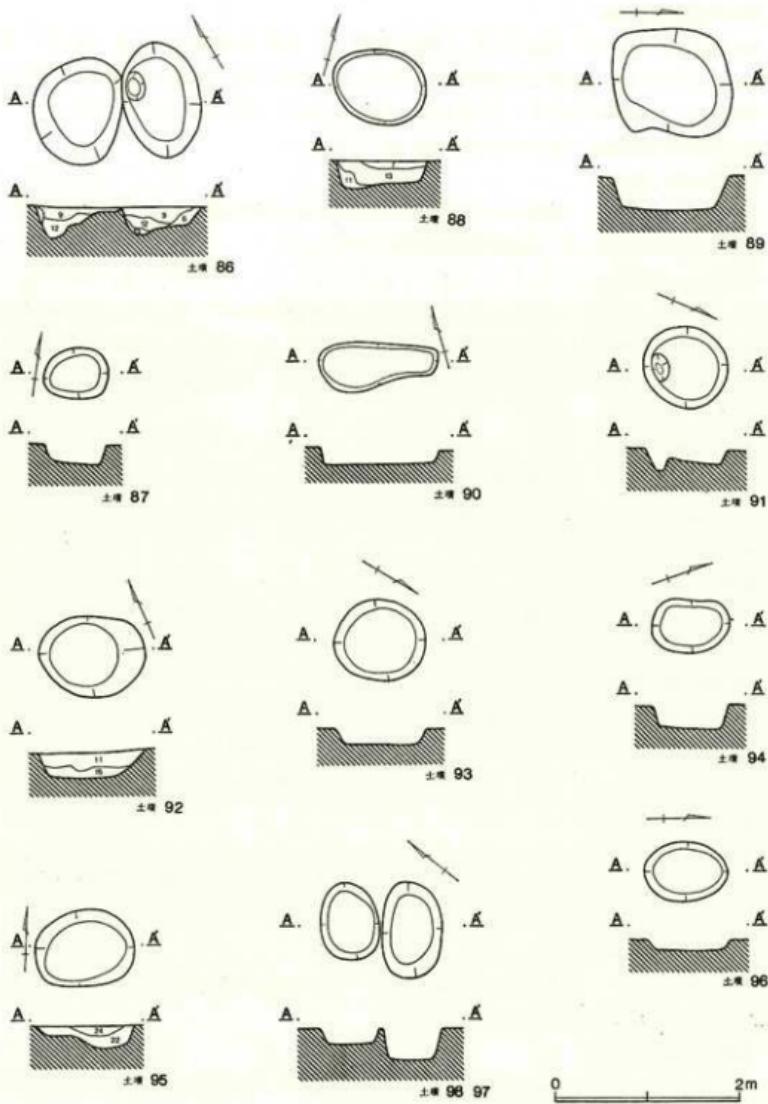
第78号土壤 (第65図)

H—1 区 N—86°—W 長軸 1.60 × 短軸 (1.22) m、深さ 0.15 m で円形を呈すと思われる。底部は平坦である。第77号土壤に北側を切られている。

第79号土壤 (第65図)

H—2 区 N—44°—W 長軸 0.66 × 短軸 0.52 m、深さ 0.24 m の橢円形を呈す。底部は平坦である。覆土中層より口縁部破片 (第69図—47) が出土した。

第80号土壤 (第65図)



第66図 土 墓 (7)

H—3 区 N—25°—E 長軸0.84×短軸0.62m、深さ0.21mの円形を呈す。底部は平坦で、軟弱である。境内より胴部破片（第69図—49）が出土した。

第81号土壙（第65図）

H—2 区 N—45°—W 長軸0.84×短軸0.52m、深さ0.21mの隅丸方形を呈す。底部は平坦である。境内より胴部破片（第68図—12）が出土した。

第82号土壙（第65図）

I—2 区 N—61°—E 長軸1.15×短軸0.86m、深さ0.21mの不整橢円形を呈す。底部は浅い舟底形を呈し、南西方向に浅くなり立ち上がる。境内上面より胴部破片（第69図—42）が出土した。

第83号土壙（第65図）

H—2 区 N—10°—E 長軸0.52×短軸0.42m、深さ0.11mの円形を呈す。底部は平坦である。境内より胴部破片（第69図—52）が出土した。

第84号土壙（第65図）

H—2 区 N—58°—E 長軸0.80×短軸0.65m、深さ0.15mの楕円形を呈す。境内より胴部破片（第69図—50）が出土した。

第85号土壙（第65図）

I—2 区 N—30°—W 長軸1.10×短軸0.77m、深さ0.30mの隅丸方形を呈す。北東側に小さなピット状の掘り込みを持つ。底部は平坦で、比較的硬くしまっている。境内より口縁部破片（第69図—30）が出土した。

第86号土壙（第66図）

I—2 区 N—28°—E 長軸1.17×短軸0.96m、深さ0.36mのものと、N—18°—E 長軸1.24×短軸0.85m、深さ0.29mの二者が併存する。底部は凹凸があり、東側に浅く立ち上がる。後者、東側の土壙より胴部破片（第69図—36）が出土した。

第87号土壙（第66図）

I—2 区 N—65°—E 長軸0.72×短軸0.54m、深さ0.22mの楕円形を呈す。底部は西側に浅くなり立ち上がる。

第88号土壙（第66図）

H—2 区 N—85°—W 長軸1.04×短軸0.80m、深さ0.30mの楕円形を呈す。底部は西側の一部が凹み、東側へ浅くなっている。覆土第1層より少量の炭化物が出土した。また、境内中層より胴部破片（第68図—11・14）が出土した。

第89号土壙（第66図）

I—1 区 N—23°—E 長軸1.41×短軸1.13m、深さ0.35mの不整橢円形を呈す。底部は平坦である。境内より胴部破片（第68図—23）が出土した。

第90号土壙（第66図）

I—2 区 N—78°—W 長軸1.29×短軸0.54m、深さ0.17mの不整橢円形を呈す。底部は平坦である。境内より胴部破片（第68図—18）が出土した。

第91号土壙（第66図）

I—2区 N—15°—E 長軸0.93×短軸0.84m、深さ0.16m、ピット0.22mの円形を呈す。南東側にピット状の掘り込みを持ち、底部は南東側に浅くなり立ち上がる。境内より土器片（第68図—8、第69図—40）が出土した。

第92号土壙（第66図）

I—2区 N—63°—W 長軸1.18×短軸0.87m、深さ0.29mの橢円形を呈す。底部は舟底形を成し、南東側は緩かに立ち上がる。

第93号土壙（第66図）

I—2区 N—41°—W 長軸1.00×短軸0.88m、深さ0.16の円形を呈す。底部は平坦で、比較的硬くしまっている。境内より口縁部破片（第69図—32・41）が出土した。

第94号土壙（第66図）

I—2区 N—20°—E 長軸0.84×短軸0.57m、深さ0.22mの橢円形を呈す。底部は平坦で、南側が若干浅くなっている。境内より口縁部破片（第69図—31・34）が出土した。

第95号土壙（第66図）

I—1区 N—74°—E 長軸1.10×短軸0.85m、深さ0.24mの橢円形を呈す。底部は東側が深く凹んでいる。境内より口縁部破片（第69図—28）が出土した。

第96号土壙（第66図）

J—2区 N—2°—E 長軸0.90×短軸0.64m、深さ0.10mの橢円形を呈す。底部は平坦である。境内より胴部破片（第69図—26）が出土した。

第97号土壙（第66図）

K—2区 N—54°—E 長軸1.02×短軸0.65m、深さ0.34mの橢円形を呈す。底部は平坦である。境内より口縁部破片（第69図—27）が出土した。

第98号土壙（第66図）

K—2区 N—37°—E 長軸0.83×短軸0.64m、深さ0.16mの橢円形を呈す。境内より口縁部破片（第69図—46）が出土した。

第99号土壙（第67図）

K—1区 N—50°—W 長軸1.06×短軸0.84m、深さ0.22mの隅丸方形を呈す。底部は平坦である。境内より口縁部破片（第68図—5）が出土した。

第100号土壙（第67図）

K—1区 N—12°—W 長軸(0.90)×短軸0.88m、深さ0.26mで橢円形を呈すと思われる。底部は平坦である。

第101号土壙（第67図）

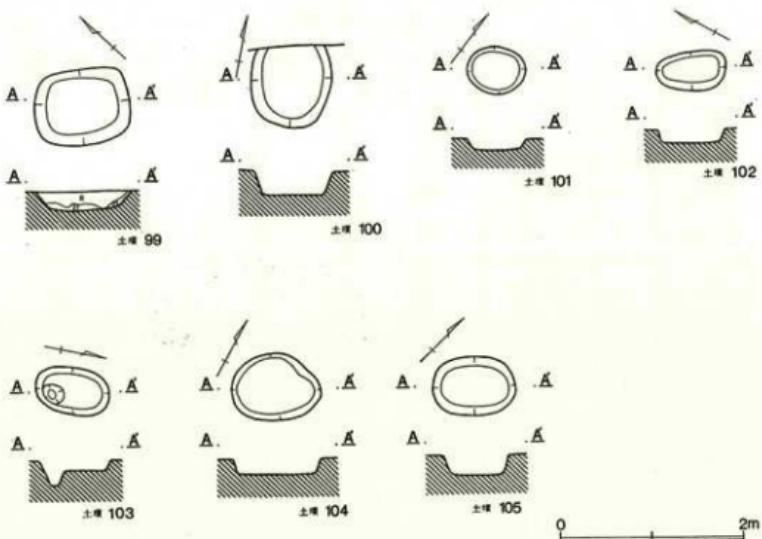
K—1区 N—50°—E 長軸0.63×短軸0.52m、深さ0.12mの円形を呈す。底部は舟底形を呈す。

第102号土壙（第67図）

L—2区 N—28°—W 長軸0.73×短軸0.47m、深さ0.16mの橢円形を呈す。底部は舟底形を呈す。

第103号土壙（第67図）

L—1区 N—1°—E 長軸0.81×短軸0.39m、深さ0.10m、ピット0.29mの橢円形を呈す。南



第67図 土 墓 (8)

側にピット状の掘り込みを持ち、底部は平坦で、南側に浅くなる。境内より胸部破片(第68図-13)が出土した。

第104号土壙(第67図)

L-1区 N-65°-E 長軸0.86×短軸0.72m、深さ0.12mの椭円形を呈す。底部は平坦である。境内より口縁部破片(第68図-3)が出土した。

第105号土壙(第67図)

L-1区 N-45°-E 長軸0.91×短軸0.63m、深さ0.22mの椭円形を呈す。底部は平坦である。
(樋口 誠司)

土壤一覧表

番号	位置	プラン	主軸方位	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土土器(第68、69図)
1	D-5	不 規 形	明 形	N-82°-W	113	78	18
2	B-1	円 形	明 形	N-2°-W	90	67	28
3	B-6	規 形	円 形	N-36°-W	139	108	72
4	B-6	不 整 規 形	円 形	N-14°-W	80	79	28
5	C-6	不 整 規 形	円 形	N-64°-E	116	76	46
6	C-5	規 形	円 形	N-67°-W	105	74	36
7	C-5	規 形	円 形	N-31°-W	73	66	18
8	C-5	規 形	円 形	N-29°-E	40	40	20
9	C-5	規 形	円 形	N-44°-W	93	66	18
10	C-5	規 形	円 形				
11	C-5	不 整 規 形	円 形	N-33°-E	125	98	ピット
12	C-5	円 形	形	N-18°-E	42	34	18
13	C-5	円 形	形	N-70°-E	83	74	24
14	C-5	不 整 規 形	円 形	N-63°-W	90	69	18
15	C-5	円 形	形	N-31°-E	63	54	21
16	C-5	円 形	形	N-31°-E	63	54	25
17	C-5	円 形	形	N-90°-E	56	54	25
18	D-5	円 形	形	N-51°-E	53	46	27
19	D-5	規 形	円 形	N-41°-E	153	87	39
20	D-5	円 形	形	N-20°-W	57	46	11
21	D-5	円 形	形	N-12°-W	52	43	11
22	D-5	円 形	形	N-15°-E	42	37	6
23	D-5	規 形	円 形	N-86°-E	73	59	22
24	E-5	不 整 規 形	円 形	N-90°-E	57	45	16
25	E-5	不 整 規 形	円 形	N-43°-W	68	59	14
26	E-5	規 形	円 形	N-48°-E	148	79	14
27	E-5	腰 丸 方	形	N-50°-W	151	113	79
28	E-4	円 形	形	N-40°-W	102	98	30
29	E-4	円 形	形	N-40°-W	130	123	49
30	E-5	腰 彌 丸 方	形	N-68°-W	77	50	18
31	E-5	規 形	円 形	N-14°-W	44	59	13
32	F-5	規 形	円 形	N-14°-E	162	115	78
33	F-5	規 形	円 形	N-69°-W	113	71	32
34	F-5	規 形	円 形	N-40°-W	111	100	45
35	F-5	不 整 規 形	円 形	N-57°-E	97	71	27
36	F-5	規 形	円 形	N-26°-E	171	161	48
37	F-4	規 形	円 形	N-88°-E	169	104	55
38	F-4	規 形	円 形	N-80°-E	112	74	32
39	F-4	規 形	円 形	N-33°-W	111	88	72
40	F-4	規 形	円 形	N-50°-E	97	71	第68図- 4・19
41	F-4	腰 丸 方	形	N-37°-W	113	77	20
42	F-4	不 整 規 形	円 形	N-82°-W	95	91	31
43	F-4	不 整 規 形	円 形	N-40°-W	135	98	46
44	F-4	不 整 規 形	円 形	N-41°-W	82	68	32
45	F-4	不 整 規 形	円 形	N-45°-E	136	74	30
46	F-4	不 整 規 形	円 形	N-74°-W	111	93	40
47	F-3	規 形	円 形	N-75°-E	45	76	第69図-37
48	F-3	不 整 規 形	円 形	N-55°-E	114	88	30
49	F-3	規 形	円 形	N-74°-W	123	98	50
50	F-2	不 整 規 形	円 形	N-34°-E	149	78	第69図-44・51
51	F-2	規 形	円 形	N-28°-E	60	52	17
52	E-1	規 形	円 形	N-78°-W	150	42	第69図-43
53	E-1	不 整 規 形	円 形	N-80°-E	68	48	第68図-17
54	F-2	規 形	円 形	N-18°-E	148	107	50
55	F-2	規 形	円 形	N-50°-W	218	131	44
56	F-1	規 形	円 形	N-80°-E	72	69	16
57	F-1	規 形	円 形	N-30°-E	52	49	12
58	F-1	規 形	円 形	N-60°-E	142	116	20
59	F-1	規 形	円 形	N-32°-W	117	89	49
60	F-1	規 形	円 形	N-43°-W	82	81	37
61	F-1	規 形	円 形	N-15°-W	96	61	30
				N-45°-W	129	78	26
				N-65°-W	94	55	14
				N-16°-E	87	82	9
				N-74°-E	90	94	46
				N-12°-W	194	130	第68図-15・22、第69図-35

番号	位置	ブラン	主軸方位	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土土器(第68、69回)
62	F-1	不整円形	N-70°-E	130	76	40	第68回-25、第69回-29
63	F-1	椭円形	N-90°-E	76	56	24	
64	G-1	隅丸方形	N-28°-E	74	57	12	第68回-1
65	G-1	椭円形	N-28°-E	113	95	38	
66	G-2	不整円形	N-8°-E	98	71	20	
67	G-2	椭円形	N-13°-E	128	100	84	
68	G-2	椭円形	N-15°-W	143	98	58	
69	G-2	椭円形	N-35°-W	74	56	18	
70	H-2	椭円形	N-48°-W	101	66	24	
71	H-1	不整円形	N-87°-W	(79)	(66)	(24)	第69回-38・48
72	H-1	椭円形	N-32°-E	232	180	30	
73	H-1	不整円形	N-5°-E	138	102	42	
74	H-1	椭円形	N-72°-W	(182)	(90)	(44)	
75	I-0	椭円形	N-5°-E	(84)	(85)	(51)	
76	H-1	椭円形	N-35°-W	188	156	59	第68回-16
77	H-1	椭円形	N-55°-W	76	77	30	
78	H-1	椭円形	N-65°-E	92	66	23	
79	H-1	椭円形	N-26°-E	166	117	60	第68回-9・10・29・21
80	H-1	椭円形	N-86°-W	160	122	15	
81	H-2	椭円形	N-44°-W	66	52	24	第69回-47
82	I-2	不整円形	N-25°-E	84	62	21	第69回-49
83	H-2	椭円形	N-45°-W	84	52	21	第68回-12
84	H-2	椭円形	N-61°-E	115	86	21	第69回-42
85	I-2	不整円形	N-10°-E	52	42	11	第69回-52
86	I-2	椭円形	N-58°-E	80	65	15	第69回-50
87	I-2	椭円形	N-30°-W	110	77	30	第69回-30
88	I-2	椭円形	N-28°-E	117	96	36	第69回-36
89	I-2	椭円形	N-18°-E	124	85	29	
90	I-2	椭円形	N-65°-E	73	54	22	
91	I-2	椭円形	N-85°-W	104	80	30	第68回-11・14
92	I-2	不整円形	N-23°-E	141	113	35	第68回-23
93	I-2	不整円形	N-78°-W	129	54	17	第68回-18
94	I-2	椭円形	N-15°-E	93	84	16	第68回-8、第69回-40
95	I-2	椭円形	N-63°-W	118	87	29	
96	I-2	椭円形	N-41°-W	100	88	16	第69回-32・41
97	K-2	椭円形	N-20°-E	84	57	22	第69回-31・34
98	K-2	椭円形	N-74°-E	110	85	24	第69回-28
99	K-1	隅丸方形	N-2°-E	90	64	10	第69回-26
100	K-1	椭円形	N-50°-W	106	84	22	第69回-27
101	K-1	椭円形	N-12°-W	90	88	26	第69回-46
102	L-1	椭円形	N-50°-E	63	52	12	第68回-5
103	L-1	椭円形	N-28°-W	73	47	16	
104	L-1	椭円形	N-1°-E	81	39	10	第68回-13
105	L-1	椭円形	N-65°-E	86	72	12	第68回-3
			N-45°-E	91	63	22	

土壤土層観察表

黒褐色土

- 1 塩化物、焼土粒子を含む。
- 2 塩化物を多く含む。
- 3 焼土粒子を少量含む。
- 4 粘性、しまりともなし。
- 5 粘性、しまりともあり。
- 6 粘性、しまりがあり、赤色粒子を含む。

暗褐色土

- 7 塩化物、ローム粒子を少量含む。
- 8 ローム粒子を多量に含む。
- 9 ローム粒子を少量含む。
- 10 ハードロームブロックを多量に含む。
- 11 ハードロームブロックを少量含む。
- 12 粘性、しまりあり。
- 13 粘性、しまりなし。
- 14 しまりあり、粘性なし。

14 粘性あるがしまりなし。

茶褐色土

- 16 塩化物を少量含む。
- 17 ロームブロックを少量含む。
- 18 ロームブロックを多量含む。

褐色土

- 19 塩化物、焼土粒子を少量含む。
- 20 塩化物、ローム粒子を少量含む。
- 21 ローム粒子を多量に含む。
- 22 ハードロームブロックを含む。
- 23 粘性しまりなし。
- 24 粘性しまりあり。

明褐色土

- 25 ロームブロックを多量に含む。
- 26 粘性しまりなし。
- 27 ロームブロックを多量に含む、粘性ある。



第68図 土出土土器(1)

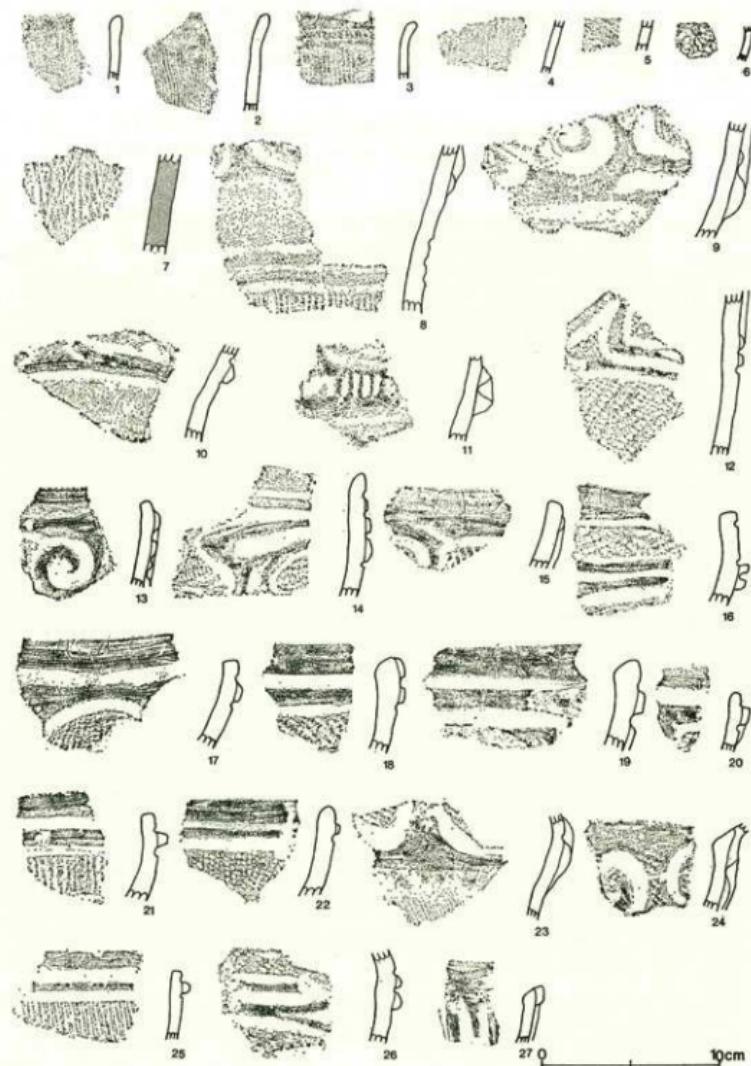
土墳出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	3 I a	口縁が内凹し、頸部無文帯を持つ。隆帯で渦巻文が描出される。地文は繩文R Lである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
2 5 7 8	3 I b	口縁が緩く内凹するキャリバー形土器の口縁部破片である。いずれも隆帯で文様帯が区画される。地文は、2・4・8が撚糸L、3・7が繩文R L、5が無筋Lである。	胎土は緻密であるが、3は小珠が目立ち、5は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は3・8が赤褐色、4・5が暗赤褐色、2・7が橙褐色を呈する。	
6	3 VII	口縁が直線的に開く深鉢で、隆帯によって口縁部文様帯が区画される。口縁部には沈線を充填する。	胎土は緻密である。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	9・10は同一個体である。
9 10	3 I b	口縁部は緩く内凹し、隆帯による渦巻文と区画文が描出される。胴部は3本沈線で両端の連結した懸垂文が配される。地文は繩文R Lを施文する。	胎土は緻密であり、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
11 14	3 I c	平行沈線の懸垂文が施文されるものである。11・12は3本、13・14は2本で構成される。地文は11・12が繩文R L、13が0段多条繩文R L、14が無筋Lである。	胎土は緻密であり、11・13に白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は11・13が褐色、12・14が橙褐色を呈する。	
15	3 VII	頸部の括れる壺形土器と思われる。蛇行沈線が垂下し、地文に繩文R Lを施文する。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
16 17	3 I c	2本沈線間を削消する懸垂文が施文されるものである。地文は繩文R Lを施文する。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。	
18 19	3 I c	断面カマボコ状の隆帯が懸垂するものである。地文は18が復節R L R、19が繩文R Lを施文する。	胎土は18が砂粒・小礫を多く含み、19は緻密である。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
20 21 23	3 II	地文に条線が施文されるもので、20・21は蛇行沈線、23は平行沈線が垂下する。23の地文は蛇行する条線である。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は20が橙褐色、21が赤褐色、23が灰褐色を呈する。	
22	3 VII	2本対の沈線で渦巻文が描出され、さらに同種の沈線でモチーフが連結されるものと思われる。地文は条線が施文される。	胎土は緻密であるが、小珠が目立つ。焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。	
24 26	3 VII	24・25は角棒状工具で、26は丸棒状工具で刺突文を施すものである。25は押し引き状の刺突文が列を成す。26は区画内に刺突文が充填される。	胎土は緻密であり、24は白色粒が目立つ。焼成は26が不良で、他は良好である。色調は24が赤褐色、25が灰褐色、26が橙褐色を呈する。	



第69圖 土壤出土土器(2)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
27 · 29 · 31	II c	口縁が緩く内彎し、口縁下に2~3本の沈線が巡り、27・31は直線の沈線が、29は蛇行沈線が垂下する。地文は27が繩文RL、29・31が繩文LRを施文する。	胎土は緻密である。焼成は良好である。色調は27が暗褐色、29・31が黄褐色を呈する。	
28 · 30	III c	口縁下に2本の沈線が巡り、30はやや幅広の無文帯を区画する。地文は28が条線、30が繩文RLを施文する。	胎土は緻密で、28は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
32 · 34	III c	口縁下に、32は列点を2列、33は2本沈線間に列点を、34は鋸齒状沈線を2本を巡らす。地文は32が繩文RLを施文する。他は不明。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は32・34が橙褐色、33が黒褐色を呈する。	
35 · 38	II	連弧文土器の調部破片である。35・36は胴部分帶線から沈線が垂下する。38は連弧文が突出される。地文は35・38が条線、36が撚糸L、37が繩文RLを施文する。	胎土は緻密で、36は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は35が灰白色、36・37・38が赤褐色を呈する。	
39	VII	口唇部が外削状を呈し、緩く外反する。地文は施文されない。	胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。	
40 · 42	IV	口縁部が無文で、輪顔状に開く深鉢である。41は頸部に刺突文が施される。42は鋸齒状の隆帯が貼付され、地文に繩文RLが施文される。	胎土は緻密で、41は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は40・42が灰褐色、41が赤褐色を呈する。	
43 · 45	V a	口縁と胴部が「く」の字状に屈曲する浅鉢の口縁部である。	胎土は緻密で、43・44は白色粒子が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
46	V b	口唇部が肥厚して、内彎気味に開く浅鉢である。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。	
47 · 52	VII	地文のみ認められる破片である。地文は、47・48・51・52が繩文RL、49・50が撚糸Lを施文する。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は、47・48・50が赤褐色、49・51・52が橙褐色を呈する。	51・52は同一個体である。
53 · 54		風化が著しく、器面は荒れているが、条痕が微かに認められる。	胎土は緻密を多く含む。焼成は不良である。色調は黒褐色を呈す。	
55	4	口縁部が内彎して、外傾する。2本の隆帯が、二段にわたって巡る。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
56	4	平行沈線が5段にわたって施文される。風化が著しく、地文は不明である。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。	



第70図 グリッフ出土土器(1)

3 グリッド出土土器

今回の調査で出土した土器は、パンケースにして約30箱程度であった。この内、大半は遺構出土のもので、縄文時代中期後半のものである。遺構確認時に遺構周辺より出土した土器の中で、遺構出土土器と接合関係のないものをグリッド出土土器とした。これ等の遺物も遺構と関連が深いため、全体的な出土遺物の様相から、グリッド出土土器を分類していきたい。従って、ここでの分類と、遺構出土土器拓影図の分類は等しいので参照していただきたい。

第1群土器（第70図1～6）

縄文時代早期前半の撫糸文系土器群を一括する。6点のみ出土した。1は口唇部が若干肥厚して丸棒状を呈し、石英、長石、白砂粒を多量に含む。赤褐色を呈し、縄文施文である。2は口縁部が外反し、口唇部で立ち気味に内聳する。外面が黒褐色、内面が橙褐色を呈し、白砂粒と黒色粒が目立つものの、石英、長石類は少ない。撫糸Rが施文され、細くて条間は密である。3は丸棒状の口縁部が外反し、縄文RLが施文されている。橙褐色を呈し、白砂粒と黒色粒が多く含まれ。石英、長石は目立たない。4は色調、胎土とも1と同様であり、縄文が施文される点も同じであるため、同一個体と思われる。器面が荒れていて不明瞭であるが、原体はRLの縄文と思われる。5は撫糸Rがやや条間を開けて施文される。6は器面の荒れが激しく不明瞭であるが、微かに縄文の痕跡を残す。

第2群土器（第70図7）

早期後半の条眞文系土器群を一括する。今回の調査では出土量が少い。7は外面が明赤褐色、内面が暗褐色を呈す。纖維は多めに含まれ、白色粒子が目立つ。表には条眞が明瞭に施文されており、裏には擦痕が認められる。

第3群土器（第70図8～27、第71図28～53、第72図54～79、第73図80～91、96～99）

縄文時代中期後半の加曾利E式土器と、それに伴う同後段の土器群を一括する。

第1類 キヤリバー形深鉢土器を一括する。（8～44、95、96）

a種（7～11）

頭部無文帯を有するもの。口縁部文様帯、頭部無文帯、胴部文様帯で構成され、口縁部文様帯に渦巻文、胴部文様帯に懸垂文が施される。

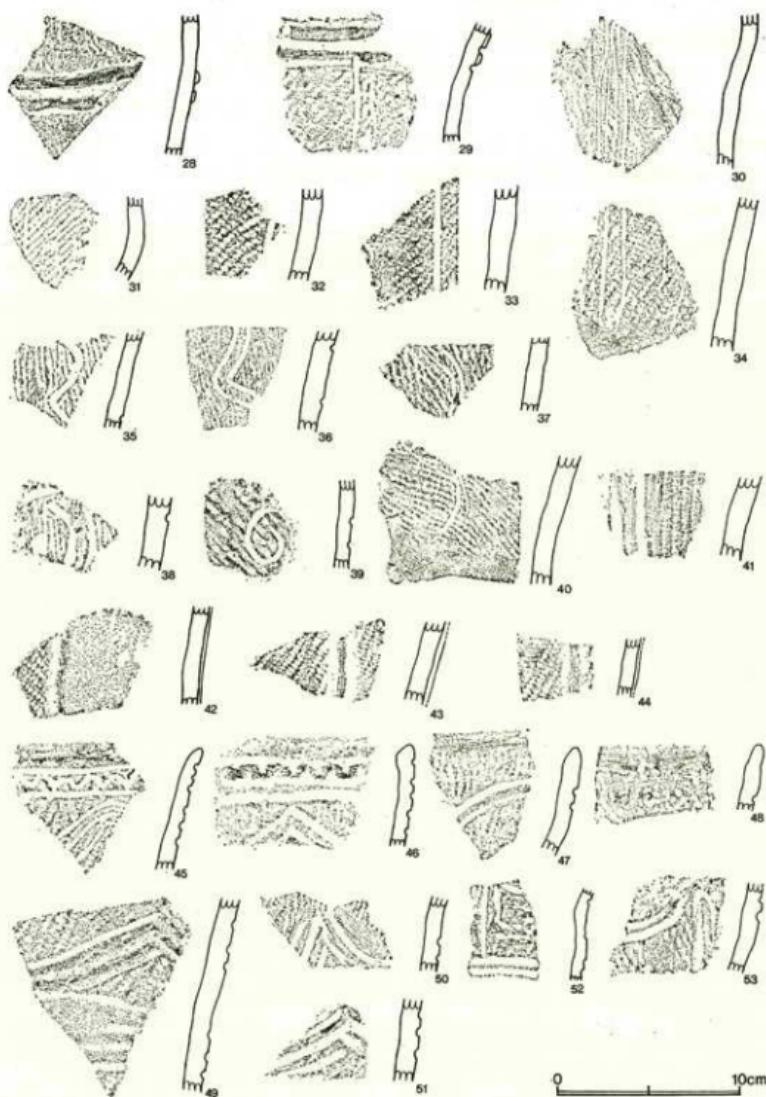
8は3本沈線によって頭部無文帯が区画され、沈線懸垂文が施文される。地文は撫糸Rである。

9は隆帯による渦巻文と沈線による区画文とで、口縁部文様帯が区画される。区画文内には縄文RLが施される。11は渦巻文から連なる隆帯と、口縁部文様帯を区画する隆帯とが接し、その部分に刻み目状に4本の沈線が施される。

b種（12～29）

頭部無文帯がなくなり、口縁部文様帯と胴部文帶の二文様帯で構成されるもの。口縁部文様帯は渦巻文と区画文からなるものが多い。胴部文様帯の懸垂文は、3本沈線が多く、隆帯は少い。

12は口縁部文様帯における渦巻文とそれに連結するモチーフが隆帯で描出されるものと思われる。口縁部と胴部に継回転の縄文RLが施文される。13は先細りの隆帯による渦巻が巻き込まれる。



第71図 ガリード出土土器(2)

おそらく区画文と対になるモチーフであろう。14は隆帯による渦巻文は描出されないが、円形の区画文となるものであろう。部分的なモチーフと思われるが、この様に口縁部文様帶におけるモチーフ展開には、渦巻文と区画文の他に、バラエティーの存在が予想される。15～28はこの種の口縁部破片である。基本的には渦巻文と区画文で口縁部モチーフが構成されるものであろう。21は地文に撲糸しが、25は地文に沈線が施文されている。

c種 (29～44, 95, 96)

a、b種の胸部破片を一括する。本来a、b種と区分されるものではないが、胸部破片のみでは帰属の識別が難しいため、一括して述べることにする。

29～34は沈線懸垂文が施されるものである。いずれも沈線間は磨消されていない。29は地文に繩文RL施文後、2本沈線を垂下する。30は繩文LR施文後、細目の4本沈線を垂下させるが、何度かにわたって施文しているため沈線が重複する。31～34も繩文RL施文後、沈線が懸垂する。

また、35～38は曲線の沈線が垂下するもので、地文は全て撲糸しがある。39は沈線が渦を巻き、40は繩文施文後蛇行懸垂文が施される。41は繩文施文後、2本沈線間が磨消され部分的に繩文が残っている。地文は繩文RLが斜位に回転され、条が縦方向に並ぶ。

42～44は隆帯の懸垂文である。43、44は断面カマボコ状の隆帯であり、地文は繩文RLが施文される。42は断面三角形状の低隆帯が使用され、幅広の無文帯が形成される。地文は繩文LRである。

95、96は底部破片である。95は隆帯が底部まで垂下し、繩文RLが施される。96は地文RLのみが施される。95、96は、おそらくa種の底部であろう。

35～38はI類の胸部として分類したが、地文が撲糸文で蛇行沈線が垂下されるなど、II類の胸部破片としての可能性も高いと思われる。30なども可能性が高い。

第II類 連弧文土器を一括する。(45～61)

a種 (45, 46, 49～53)

連弧文が定形的に施文されるものを一括する。連弧文土器は、胸部で分帶された上下の文様帶の上半部、または上半、下半部の両方に連弧文が施文される土器である。胸部にはI類と同様な懸垂文が施文される場合が多い。

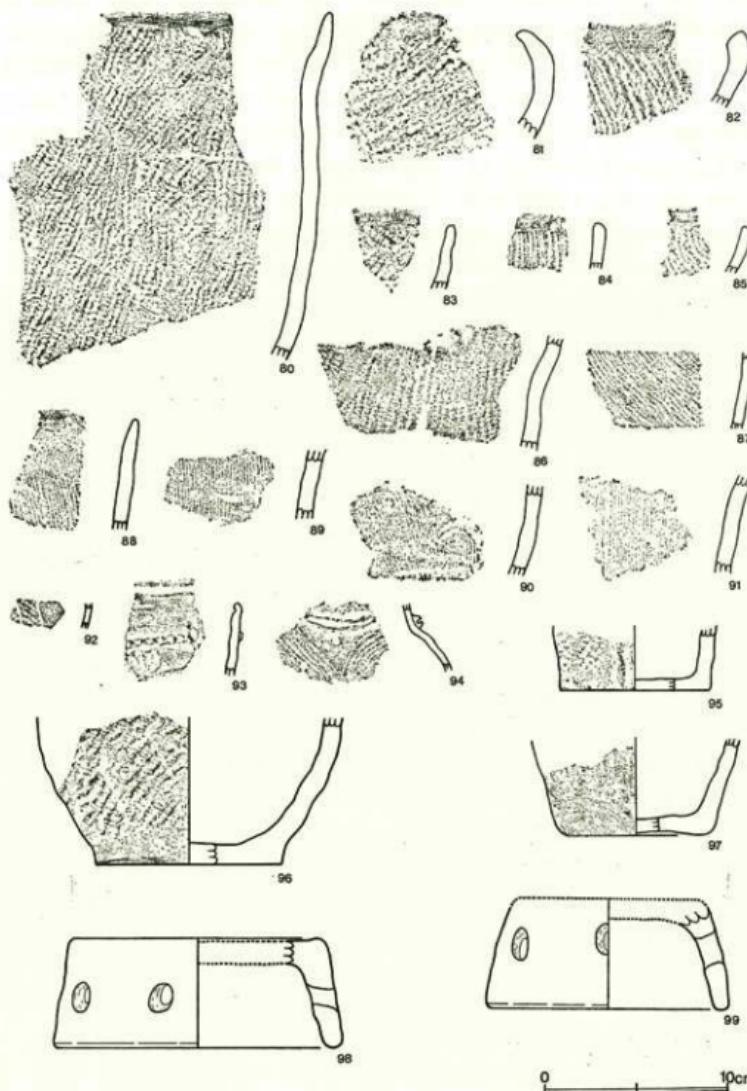
45は3本沈線で口縁部が区画され、中央の沈線が波状になっている。胴上半部は3本沈線による連弧文が施される。地文は繩文RLである。46は3本沈線で口縁部が区画され、上の2本沈線間が上下からの押捺を受け、蛇行する隆帯状の効果を表わしている。器面が摩耗しており地文は不明であるが、3本沈線で連弧文が描出される。45と46は、文様効果が非常に類似する。49は3本沈線で胸部が分帶され、上半部にやはり3本沈線の連弧文が描出される。51も同様であろう。52は上半部の連弧文間から沈線が垂下し、胴部分帶線と連弧文の間に枠状区画を成すものである。50、53は胴下半部の連弧文と思われる。53は連弧文から懸垂文が垂下している。

b種 (47, 48)

連弧文が定形的な弧状を呈さずに、崩れた波状になるものを一括する。47は半截竹管状の工具で波状の平行沈線がひかれ、平行沈線間は磨消された様な状態を呈する。口縁部は沈線によって区画されず、地文に繩文RLが斜位に施文される。48も47と同様であり、地文の繩文Rしが太い。



第72図 グリッド出土土器(3)



第73図 グリッド出土土器(4)

c 種 (54~61)

連弧文土器と器形及び文様帶構成が類似するもので、連弧文が描出されないものを一括する。54は口縁が肥厚し波状を呈する。一本の隆帶で口縁部が区画され、3本沈線による渦巻文が連結して連弧文と同様な効果をもたらしているものと思われる。55は3本沈線が口縁部に巡り、地文は条線である。56は口縁部の2本沈線間に円形の刺突列が、また、地文に蛇行条線が施文される。57は2本沈線で口縁部が区画され、地文に繩文RLが施文される。58~61は胴部分帶線付近の破片であり、3本沈線で区画されるものが多い。また、地文は58が撲糸L、他は繩文RLである。

第Ⅲ類 地文に沈線、条線が使用され、多分に曾利式の影響が強いものを一括する。(62~68)
62は綾杉状の沈線が施文される。条線をベースに、63は隆帶が貼付され、65は2本沈線が懸垂する。66、67は5本単位の蛇行条線の上に3本沈線の懸垂文が施される。68は押し引き状の刺突文が施される。赤褐色を呈し、胎土も他の土器と異なる。

第Ⅳ類 口縁部が無文帶で朝顔状に開く深鉢土器を一括する。(69)

グリッド出土土器では良好な資料は出土していないが、遺構からは出土している。69は3本沈線で胴部文様帶が区画される。I類a種の頸部破片と類似し、口縁部でないと識別が難しい。

第Ⅴ類 浅鉢土器を一括する。(70~79)

a 種 (70~73)

頸部と胴部が「く」の字状に屈曲し、胴部に文様帶を持つものを一括する。70は頸部の屈曲部、71、72は胴部の屈曲部である。70は隆帶で、71は沈線で文様が描出される。

b 種 (74~79)

口縁が開く浅鉢である。74、75は繩文RLが施され、同一個体である。76~79は口縁部形態は異なるものの、口唇部が肥厚し無文の胴部を持つ点で一致する。79は角棒状を呈し、折り返しが明瞭である。

第Ⅵ類 地文のみの深鉢土器を一括する。(80~91、97)

a 種 (80~87)

地文に繩文が施文されるものを一括する。80、83、84、86は繩文RL、81は複節LRL、82は撲糸L、87は撲糸Rが施文される。

b 種 (88~91、97)

地文に条線が施文されるもので、97はその底部である。

第Ⅶ類 その他の中期後半の土器群を一括する。(98、99)

98、99は器台である。胴部にすかし状の円孔が認められる。

第4群土器(第73図92~94)

後期初頭の土器群を一括する。92は器壁が薄く、磨消繩文が施される。93は押捺を持つ隆帶が一巡し、口縁部内側に沈線が巡る。93は頸部に隆帶が巡り、胴部に集合沈線による曲線文が描かれる。注口土器の一部であろう。掘ノ内式土器と思われる。

(金子 直行)

4 石 器

石器は総数19点出土したが、調査面積からすれば少な過ぎる感がある。他に、剥片類は多数出土しており、中には部分的に加工の施されるものも存在していた。ここでは、図示可能な石器を示した。大宮台地の特徴として、縄文時代の遺跡から出土する石器類は少い傾向にある。やはり、石材が入手しづらいという、地理的な条件からもたらされる傾向なのであろうか。

A類 打製石斧 (第74図1～6)

1は片面に疊表面を多く残し、左右のサイドから細かい調整剥離が施される。刃部の彎曲する撥形石斧であるが、頭部が一部欠損した後、その部分に調整剥離を加え再利用しているものと思われる。薄身の石斧であり、刃部には使用による擦痕が残り、摩滅している。

2は厚身の石斧で、階段状剥離によって刃部が作り出されている。片面に疊表が一部残されている。左右からの加擊は石の目に沿って進み、同形状の剥離面が形成される。刃部の一部が欠損する。形態的には直線的な刃部を持つ短冊形石斧と思われる。

3は頭部を欠損するが、細身で刃部がやや広い短冊形石斧と思われる。調整剥離の1つ1つはやや大きめであるが、石目に沿って丁寧に施されている。片面に疊表が残る。頭部付近に若干括れが認められ、紐かけの部分を作り出しているものと思われる。作りと形態から、刃部が柄に対して直交する様に取り付けられ、手斧的木工具としての機能を考えられる。

4は扁平で細長い疊を利用し、頭部からの大きな加擊と、左右からの調整剥離によって形状を整えている。刃部付近の下半部が欠損する。

5と6は中央部のあまり括れない分鉄形石斧と思われる。両者とも上半部が欠損し、片側に疊表を残している。5は厚身で粗雑な成形であるが、重量に豈む。刃部は彎曲し、使用による摩滅が部分的に認められる。6は薄身の石斧で、調整は比較的丁寧に行なわれており、直線状の刃部を持つ。

B類 磨製石斧 (第74図7、8)

7は定形的な磨製石斧である。頭部、両側縁、刃部とも丁寧に磨り出している。特に刃部は何度にもわたって、方向を変えて磨り出されており、側面形態は整った始刃状を呈している。刃部には刃毀れが認められるが、大きな欠損部については磨きを再度施している。

8も定形的な小形磨製石斧である。7と同様な形状、作りを呈しているが、頭部を欠損する。刃部には細かな刃毀れが認められる。

C類 窪み石 (第74図9)

9の1点のみ出土した。母体から剥落したものと思われる。窪みは擂鉢状を呈し、比較的深い。

D類 削器 (第74図10)

10の1点のみ出土した。扁平な剥片を素材とし、片側の側縁に調整剥離が施され、直線状の刃部が形成される。他に出土した剥片類に、部分的な調整剥離や使用痕跡の痕跡が認められるものも存在するため、削器の一種とすることができよう。この様に、かなり不定形な剥片があつても部分的に使用していることを考えると、削器は定形的なもの以外にも不定形で一回性のものが多く存在することが予想される。